

下関市立歴史博物館

研 究 紀 要

第1号

岡 松 仁 「天和家状」について …………… 2

松 田 和 也
小 林 善 也 櫻山招魂場の成立とその変遷……………27

2 0 2 0

下関市立歴史博物館

発刊にあたって

下関市立歴史博物館は、平成二八年（二〇一六）一月一日、旧下関市立長府博物館の活動を継承するとともに、市民の皆様の地域学習や、本市の交流人口の拡大に貢献することなどを目指して開館いたしました。以後、「海峡」を舞台とした政治的事件や国内外との交易・文化交流など様々なテーマで展示活動、教育普及活動及び調査研究活動を実施しております。この度、調査研究活動の成果として、研究紀要を刊行することとなりました。

創刊号となる本号では、当館学芸員による長府藩士各家の由緒書・家伝文書の集成である「天和家状」の紹介並びに、当館学芸員及び下関市立考古博物館学芸員による櫻山招魂場の調査報告を掲載いたしました。

末尾ながら、日ごろ当館の活動にご理解、ご協力いただいている皆様にお礼を申し上げますとともに、今後ともご指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和二年（二〇二〇）年三月

下関市立歴史博物館館長 吉川 宗利

「天和家状」について

岡松 仁

はじめに

歴史学研究においてもっともスタンダードな手法の一つが、古文書・古記録に厳密な史料批判を加えたうえで研究を進めることであるのは、論を俟たないところであろう。しかしながら、一般的にそれらの史料は時代が古いほど数が少なく、また地域によって残存の状態に偏差があるため、研究対象となる時代や地域によっては、研究に困難を伴う場合も多い。

右のような状況にあつて、山口県は全国的にも史料に恵まれていることで知られている。たとえば筆者が専門とする中世期については、「毛利家文書」をはじめとした原本の残存数が多いことはもちろん、近世に萩藩（1）によって編纂された「閩閩録」や「風土注進案」、「寺社由来」などに多くの中世文書が収録され、すでに活字化されている。また、近年『山口県史』の刊行に伴う調査の過程で新出史料の発見が相次ぎ、既出史料についても原本照合が進んだ。さらに、多くの歴史資料を保存・公開する施設として山口県文書館が存在していることで、他の地域と比べると比較的容易に史料を調査・収集し、研究を進めることが可能である。

以上のように、中世史研究を進めるうえで、山口県はきわめて調った環境にあるといつてよい。しかし、次のような問題が指摘できる。

一つ目は、「閩閩録」や「風土注進案」の収録対象が、萩藩領内に伝わった古文書・古記録を中心としており、長府藩をはじめとした支藩領内などに伝わる古文書・古記録がほとんど収録されていないことがあげられる（2）。先に述べたとおり、「閩閩録」などに膨大な古文書が収録されていることか

ら見逃されがちであるが、これらは長州藩全体ではなく、あくまで萩藩で編纂されたものである。これに対して、たとえば岩国吉川家（3）で編纂された「岩国藩中諸家古文書纂」や「吉川家中并寺社文書」などの記録類がある。これらに収録された古文書のうち、原本が遺っているものについては、一部『山口県史』などに収録されているが、原本の所在が不明で、「岩国藩中諸家古文書纂」などにしか収録されていない文書も存在するのである。

また、江戸時代の下関市域には、長府藩、清末藩、萩藩の三藩の藩領が入り組んでいた。萩藩領に伝わった古文書・古記録については「閩閩録」等に収録されているものが多いが、当該地域の大部分を占める長府藩領に伝わったものについては、一部を除いて収録の対象外であった。

二つ目は、紙幅の都合から『山口県史』への収録を見送られた未活字の写本類が数多く存在していることである（4）。研究を進めるうえで、原本が現存していれば、当然そちらが優先されるべきである。しかし、原本が散佚し、写本でしか伝わっていない史料は多い。写本である以上、原本以上に厳密な史料批判が必要なことは言うまでもないけれども、現状で活字化されていない写本のなかには、原本を補うような情報が記載されたものも見出すことができる。そのため、原本に加えて、そのような写本を十分に活用しながら研究を進める必要がある。

以上のような状況をふまえ、本稿では下関市立歴史博物館（以下、当館）および山口県文書館に収蔵される「天和家状」という記録に収録される中世文書について、ひとまず目録化して紹介するものである。

1. 「天和家状」の成立と長府毛利家臣団

平成二八年度、下関市立長府図書館に付設された下関文書館から当館に移管された資料のなかに二冊の冊子がある。内容を見ると、近世の武士の由緒

書や家伝文書の写が収録されており、照合可能な人名から考えて、長府藩府が藩士たちから各家の由緒書などの書上げを提出させ、それを集成したものと推察された。書上げの様式は必ずしも統一されてはいないが、おおよそ冒頭に人物名が記載され、続いてその家の由緒と書上げの提出日が記されている。さらに、その家に家伝の文書がある場合は、それらが写されている。各家はいろは順に配列されており、移管資料のうち一冊は沼田小右衛門正教家にはじまり、兼平左衛門家までを収録している。また、もう一冊は村上惣兵衛義通家にはじまり、倉光平内家までを収録する。書上げ提出の日付は一定ではなく、年号のあるものは天和四年（一六八四）、あるいは元禄二・三年（二六八九・九〇）に提出されていることがわかる。ただし、各家は提出日順ではなくいろは順に配列されているため、現状では異なる日付に提出された書上げが混在して配列されていることになる。

以上のことから、ひとまず次のような推測が可能であろう。すなわち、江戸時代のある時期に、長府藩府から藩士に対し、各家の由緒書や家伝文書の書上げの提出が命じられ、天和四年、あるいは元禄二・三年に提出された。おそらく提出が複数年にまたがっているのは、天和年間に一度目の提出があり、そのときの未提出分や提出漏れ分が元禄年間に提出されることになったためと思われる（5）。「閥閥録」編纂の際に藩士に対して各家の由緒書や家伝文書の写本の提出を命じた萩藩の事例を参考にすると、藩府に提出された書上げは、文書類の照合や選び分けを経ているは順に配列され、清書されたのちに藩府に保管されたのだろう。当館所蔵の二冊の冊子は、現存する長府藩の公文書と比較すると、清書本とするには字が整っておらず、写し間違いと思われる箇所や脱漏が多数見受けられることから、おそらく藩府に保管された清書本を何者がが写し、それが伝わったものと思われる。なお、長府藩の資料はその大部分が失われており、藩府に保管されたと考えられる清書本

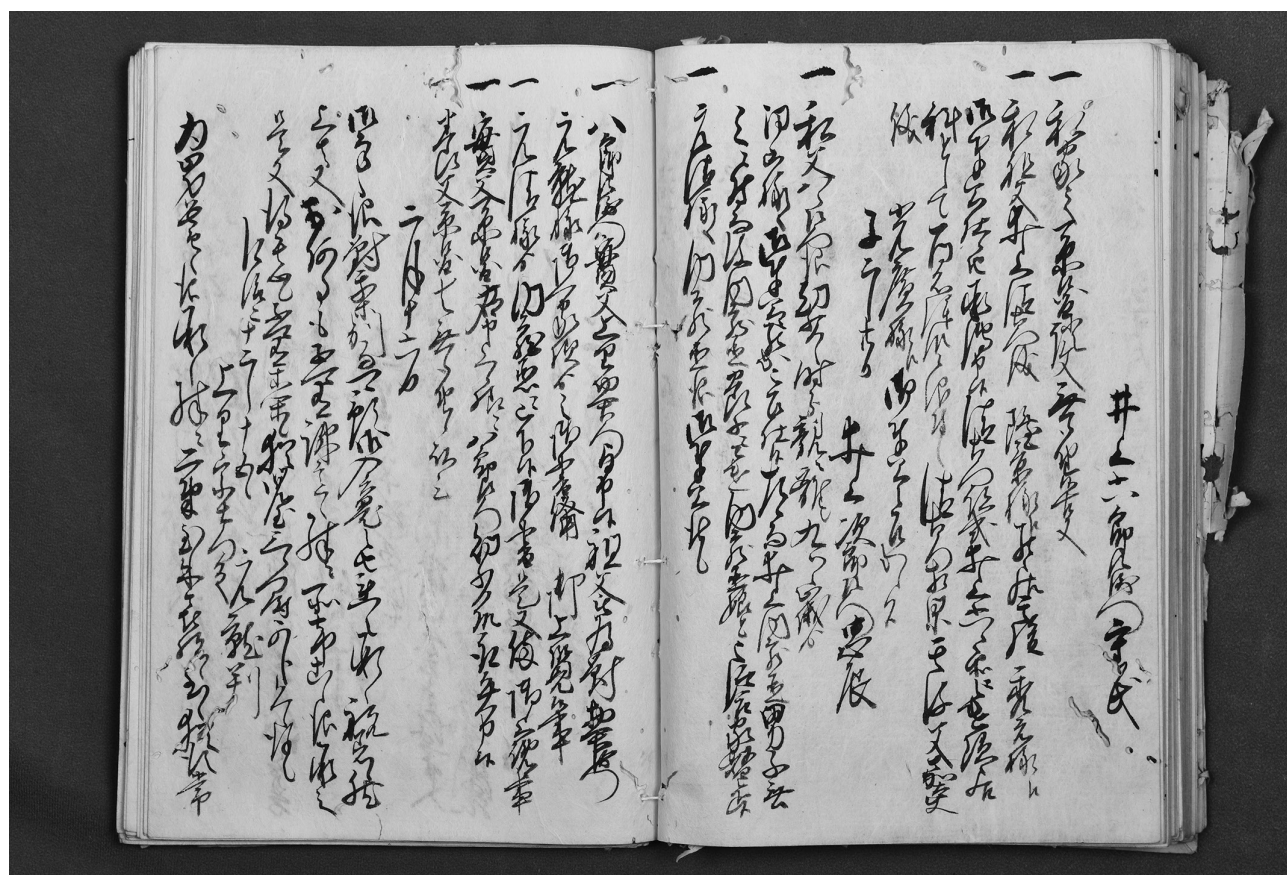


写真1 天和家状（部分、当館蔵）

も現在では失われてしまった可能性が高い。

また、山口県文書館に所蔵され、長府藩家老の桂家に伝来した「長府桂家文書」のなかに、当館所蔵の冊子と似た内容の冊子が一冊含まれている。この冊子には、「長府家老家什書写（請求番号…長府桂家七九）」という仮題が付けられており、伊秩某家にはじまり、林左兵衛家までを収録する。各家の配列は当館所蔵の冊子と同じくいろは順であり、各家の由緒書や家伝文書を収録する点、書上げの提出年代なども共通する。これらのことから、「長府家老家什書写」は、長府藩家老桂家に伝わった什書を写したのではなく、当館所蔵の二冊の冊子と同じく、藩府に保管されていた長府藩士の由緒書と家伝文書の集成を、いずれかの時点で写したものと推察される。なお、当館所蔵分と山口県文書館所蔵分の間に内容の重複は見られず、筆致は異なっていることを付記しておく。

現時点で、当館所蔵の冊子と山口県文書館所蔵の冊子をもとを同じくするものであるという明証はない。しかしながら、これらの冊子は多くの共通点をもっていることから、ひとまず一括して取り扱うこととする。

これらの冊子の原本、すなわち天和・元禄年間に編纂されたと推測される記録については、文政四年（一八二一）に、竹苞逸士（西源四郎）によって編纂された長府藩士の家譜の集成である「藩中略譜」に手掛かりがある（6）。「藩中略譜」の自序には、「藩中略譜」編纂以前には、山下某によって編纂された「藩臣略系」七卷（現存せず）があり、それは、「天和家状《邦俗謂之由緒書》」をもとに各家の家譜を記したものであるという記述がある。また、「藩中略譜」の凡例には「天和ノ由緒書」という記述もあり、天和年間頃に長府藩士の各家の由緒などを集成した編纂物があったこと、またその編纂物を閲覧して筆写することが可能であったことがうかがわれる。

以上のことから、当館と山口県文書館の所蔵する長府藩士の由緒書と家伝

文書を収録した冊子の原本は、この天和年間頃の編纂物である可能性が高い。そのため、本稿ではこれらの冊子を仮に「天和家状」と名付け、その内容を紹介することとする（7）。

長府藩士たちが、各家の由緒などを藩府に提出した天和・元禄年間は、三代藩主毛利綱元の時代にあたる。綱元は、慶安三年二月二三日（一六五一年二月一三日）、長府藩二代藩主である光広の嫡子として生まれた。長府藩は、立藩以来およそ半世紀にわたって初代秀元が藩主の座にあったが、秀元は綱元誕生直前の慶安三年閏一〇月三日（一六五〇年一月二六日）に没している。秀元の跡を継いだのは、すでに壮年に達していた光広であったが、光広は承応二年（一六五三）に病没してしまい、綱元は幼くして三代藩主の座につくことになったのである。

綱元は、祖父秀元の資質を受け継ぎ、叔父稲葉正則や岳父池田光政の影響もあって、文人大名として多くの実績を遺したことで知られる（8）。綱元が藩主であった時期は、江戸幕府でいえば四代將軍徳川家綱から五代將軍綱吉のいわゆる文治政治が進んだ時代にあたり、綱元期の藩政はその影響を強く受けているという指摘がある（9）。江戸幕府では、三代將軍家光の時代に林羅山が編纂した「本朝編年録」が、明暦三年（一六五七）の明暦の大火で焼失してしまったため、寛文二年（一六六三）に四代將軍家綱の上意によって林鶯峯による修史事業が開始され、諸大名・諸寺社などに所蔵された記録類の提出が下命された。この修史事業は、寛文一〇年に完了し、編纂された『本朝通鑑』は將軍家に提出されている（10）。時期を考慮すれば、綱元期の由緒書等の提出は、このような幕府による修史事業の影響を受けている可能性が考えられよう。

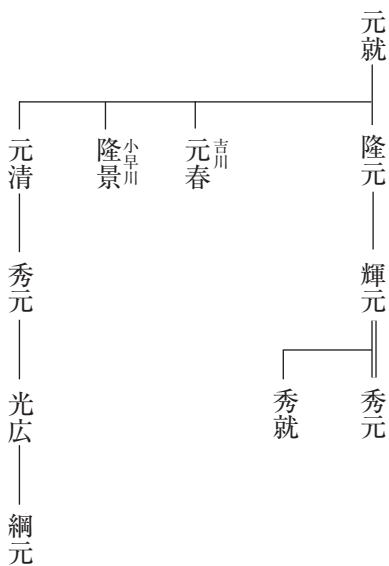
なお、こののち、萩藩では、享保年間に長府毛利家から萩毛利家を継いだ毛利吉元が修史事業を開始し、永田瀬兵衛政純の編集で「閔閔録」が成立す

ることになる。また、「閥閥録」編纂の過程や完成後の継続事業において、「神社証文」や「譜録」、「閥閥録遺漏」などが成立する(11)。なお、吉元は長府藩三代藩主綱元の実子であり、長府藩の後継者として、父の強い影響を受けたと考えられる。このことから、吉元による修史事業には、綱元による「天和家状」編纂の影響を想定してよいかもしれない(12)。

さて、「天和家状」は、長府藩士の各家の由緒書と家伝文書の集成であるから、その内容を考えるうえで、長府藩士、すなわち長府毛利家臣団の成立過程が問題となる。以下、まずは長府毛利家を興した毛利秀元とその実父である元清の経歴を概括し、その後彼らの家臣団の成立について、現状における見通しを述べておきたい。

毛利元清は、天文二〇年(一五五一)に戦国大名毛利元就とその継室乃美氏(蘭溪怡秀)との間に、元就の四男として誕生した。元清は、永祿九年(一五六六)八月六日に元服し、毛利家当主で甥にあたる輝元から偏諱を受け元清と名乗る。仮名は四郎であり、天正七年(一五七九)に輝元から治部大輔の名乗りを許され、のちに伊予守と称していた時期があった。また、永

【毛利氏略系図】(二重線は養子関係を表す)



祿一一年には来島通総の娘(松溪妙寿)を妻に迎えている

元清は、生後は毛利氏の本拠である安芸国高田郡吉田郡山城で成長したと考えられるが、永祿一二年頃に毛利家重臣桂元澄が城番を務めていた安芸国佐西郡桜尾城を預けられ、元澄子息の広繁が元清を補佐する体制ができたという。ただし、元清の桜尾入城は、少し時期が下った元亀三年の頃と推定されている(13)。

元清は、桜尾城の所在する安芸国内などに給地を得ていたが、その少なさに不満を抱いていたようである。天正年間に毛利氏が備中国を攻略しているさなか、元清は、実兄である吉川元春や小早川隆景を通じ、同国における加増を輝元に愁訴しており、最終的には「猿懸要害并五千貫之地」を獲得した(14)。新たに備中猿懸城に在番することになった元清は、桜尾城に妻と同腹の末弟(のちの小早川秀包)を残し、備中国に赴いている。

猿懸城に在番した元清は、毛利家当主である輝元に対する遠慮から、在名である穂田を名乗り、猿懸城主として毛利氏の東方戦線の一翼を担っている(15)。その後、毛利氏が羽柴(豊臣)秀吉と和睦すると、新たに築いた中山城に移ったともいわれる。また、毛利氏が豊臣政権下に入ると、吉川元春の病没、小早川隆景の豊臣大名取り立てなどを受けて、毛利家の宿老として重きをなし、輝元を補佐して政務にあたった。元清は、慶長二年(一五九七)七月九日、前月に病没した兄隆景の後を追うように、居城である桜尾城で没している。法名を笑山常快といい、広島県廿日市市の曹洞宗寺院、応龍山洞雲寺に墓があるほか、下関市長府に菩提寺である曹洞宗寺院、蓬萊山笑山寺がある。

元清は、「八箇国御時代分限帳」によれば、天正末年の時点で一万三〇〇〇石余を領していた。元清の給地は、元清死後にいったん収公された可能性があるが、慶長四年に実子秀元が分家独立する際、秀元が継承す

ることになった。

長府藩を興した毛利秀元は、父元清とその妻来島氏の二男として、天正七年十一月七日に誕生した(16)。兄宮鶴丸が天正十一年に夭折したため、本来であれば嫡男として父の跡を継ぐはずであったが、天正十二年に実子のいなかった毛利家当主輝元の養嗣子となっており、将来的な毛利家の継承を約束されることになった。しかし、この後輝元に実子秀就が誕生したため、別家して独立することとなり、慶長四年に輝元から長門国一国と周防国吉敷郡および実父元清の遺領を与えられている。さらに関ヶ原の合戦後、毛利家が周防・長門の二か国に減封されたことに伴い、長門国豊浦郡の大部分を与えられ、長府を居所に定めて長府藩を興すことになる。

毛利家の継承者であった秀元は、最初右京大夫、次いで侍従、参議に任じられ、羽柴安芸侍従(のちに宰相)の称号で呼ばれ、官位の面では正三位に昇った。なお、関ヶ原の合戦後には、伊予守、のちに甲斐守を名乗っている。また、文禄三年(一五九四)には豊臣秀吉の養女(月澗宗照、実父は豊臣秀長)を妻に迎え、慶長一四年に彼女が没すると、徳川家康の養女(柏庭宗樹、実父は松平康元)を継室としている。

江戸時代に入ると、江戸幕府との折衝や萩藩初代藩主である秀就の後見にあたったほか、三代將軍徳川家光の御咄衆となり、茶人としても名を馳せた。秀元は、慶安三年閏一〇月三日に江戸で没しており、法名を功山玄譽という。秀元の遺骸は江戸の泉岳寺に葬られ、国元の長府では父元清の菩提寺である笑山寺に墓所が営まれた(17)。

大略右のような経歴をもつ元清・秀元父子であったが、長府毛利家の成り立ちについて注目すると、同家はあくまで秀元が輝元養嗣子の立場を離れたことによって成立した家であった。近世の萩毛利家における一門家臣の關係について分析した根本みなみ氏は、長府毛利家について、「輝元との關係に

よって、元清ではなく秀元が創設した家であった」ことを指摘し、「長府毛利家の元祖は元清ではなく秀元」であるとしている(18)。

秀元が家の創始者であるという認識については、近世の長府毛利家でも概ね共通した認識をもっていたようである(19)。つまり、元清が創始した家と秀元が創始した長府毛利家は、直接的には繋がらない。しかしながら、「天和家状」に収録された文書や各家臣の由緒書を見ると、元清から秀元に引き続いて仕えた者もいたようで、元清の死後、秀元の分家独立にあたって、旧元清家臣団の一部が新たに秀元の家臣団に加わったことは間違いないようである(20)。

長府毛利家臣団の成り立ちについては、今後あらためて検討すべきものであるが、長府藩をめぐる史料の残存状況は、恵まれているとはいえないものがある。長府毛利家の家伝資料は、江戸時代初期の藩政に関わるものを欠いており、長府藩の御用所に保管されていた藩政文書の大部分は所在不明で、一説によれば処分されてしまったという。また、藩政の枢要を担った家老クラスの重臣の家伝資料はほとんど残存しておらず、残存している場合でも藩政初期のものを欠いている(21)。さらに、長府毛利家には、明治時代に入って編纂された「毛利家乗」という家史があるものの(22)、内容については誤りと思われるものを含むため、慎重に取り扱う必要がある。

このような状況をふまえ、元清・秀元の家臣団の成り立ちについて、ひとまず見通しを述べておきたい。まず、元清の家臣団については、安芸国において桜尾城を預けられた際に父元就从から付けられた者たちを中核としつつ、その後元清が備中国で転戦し、猿懸城主として活動する過程で新たに登用した者たちや、当初は一所衆として元清に従っていた者で、元清の被官となつた者などで構成されていたものと思われる(23)。これに対し、秀元の家臣団については、輝元の養嗣子となった際に実父元清から付けられた者や、養

父輝元から付けられた者たちを中核としつつ、秀元自身が登用した者や、実父元清の死後に継承した元清旧臣や分家独立の際に輝元から付けられた者などで形成されていき、関ヶ原の合戦後に再編成されることになったものと推定される。

今後は、「天和家状」に収録されたものを含めた文書や由緒書、江戸時代初期の分限帳（24）、「藩中略譜」などの系譜類を総合的に検討することで、長府毛利家臣団の成り立ちの実相に迫ることが必要になるが、具体的な研究については今後の課題とし、本稿ではひとまず「天和家状」に収録された中世文書について、特に筆者の関心に基づいて興味深いものを数点紹介したうえで、全体の目録を示しておきたい。

2. 「天和家状」収録中世文書の紹介

「天和家状」収録文書の一部には、原本が残存しているものが含まれる。まず、そのような原本と「天和家状」に収録された写を比較してみたい。

【史料①】天野元政書状（「原田家文書」）

尚々此文御と、けたのミ申候々、かしく、

両度舟被仰付候而給候、一入本望存候、今日如其元可参と存候へ共、今少之儀候間、爰元へ御供申候、明日明後日之間ニ其元へ可参候間、万々懸御目可申候、恐々謹言、

四月八日

（天野）
（原田政則）
原若

（天野）
少六

（元政）
政（花押）

まいる申給へ

【史料②】天野元政書状写（「天和家状」）

両度舟被仰付候而給候、一入本望存候、今日如其元、可参上存候へ共、今少

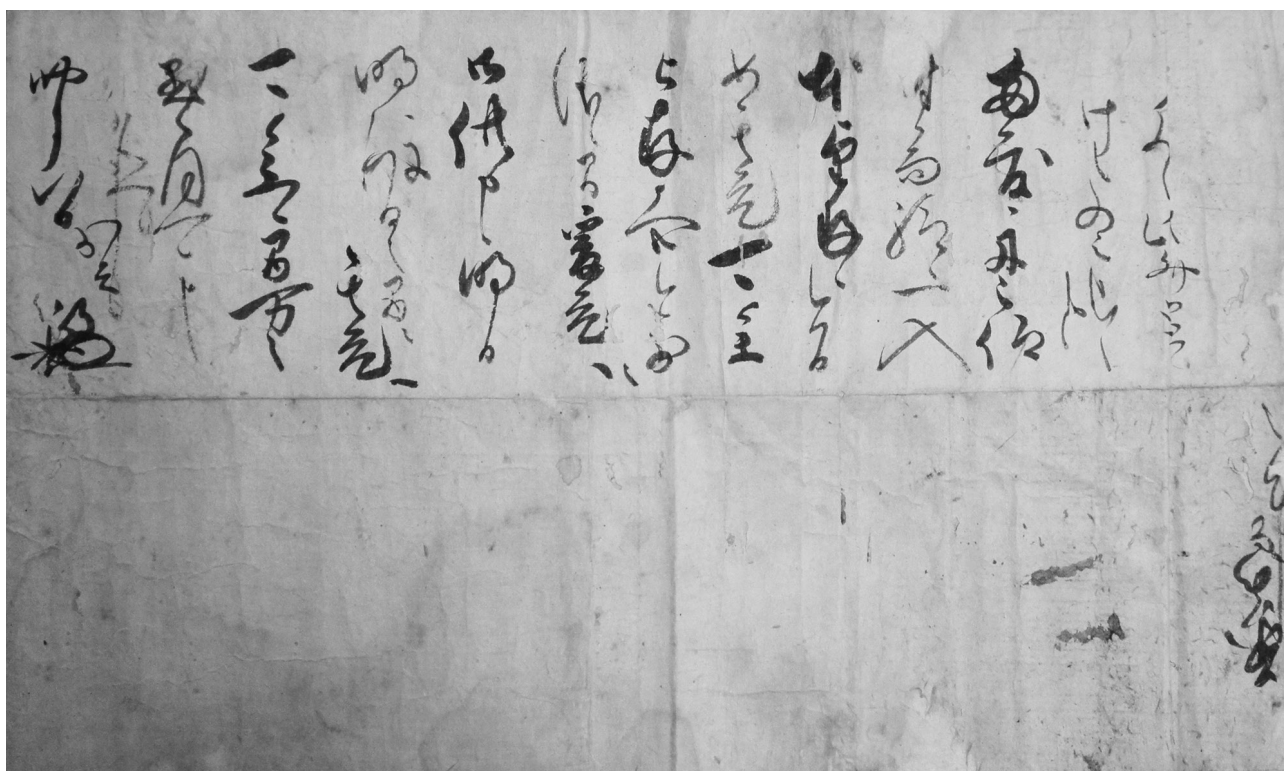


写真2 天野元政書状（「原田家文書」当館蔵）

之儀候間、爰元へ御供申候、明日明後日之間二其元へ可參候間、万々就御目可申候、恐々謹言、

(天野)
少六

四月八日

(正夜)
政判

【史料①】は当館蔵「原田家文書」のうち、年未詳四月八日天野元政書状であり(25)、【史料②】は「天和家状」に収録される【史料①】の写である。差出の天野元政は毛利元清の同母弟にあたり、当初は安芸国人天野氏を継ぎ、天野元政と名乗っていた。その後、兄元清と同様に毛利を称して一門のまとめ役となり、子孫は江戸時代に佐波郡右田を領して萩藩一門八家の一つ右田毛利家として存続することになる。書状は元政が原田政則に宛てたもので、元政の到着が遅れることを通知している。

原田家は、「天和家状」に載る同家の由緒や系図等によれば、後漢の靈帝の末裔で大蔵姓であり、祖先は伯耆国にいたとされる。しかし、同家には大内氏に仕えたという伝承があり、写ではあるが大内氏の発給文書も伝わっていることから、筑前原田氏の一族ではないかと思われる。「藩中略譜」によれば大内氏に仕えた原田種則の子政則が毛利元清に従い、その子政勝が毛利秀元に仕えて以降、子孫は長府藩士として存続したという。

【史料①】と【史料②】を比較すると、【史料②】では追而書と宛所を欠いているほか、誤写している文字があることがわかる。これ以外の文書も含めて、「天和家状」収録文書には、誤写や情報の欠落が見受けられることから、良質な写本とは言い難いように思われる。「天和家状」には、現状で原本が所在不明の文書が多いことから、書写にそのような問題があることを十分留意したうえで、利用する必要がある。

なお、後掲の目録を見れば分かるように、「天和家状」収録の「原田家文書」には、当館蔵の「原田家文書」には含まれない文書が多数見受けられ(26)、

こういった傾向は、他の家でも確認することができる。たとえば、当館所蔵の「渡辺家文書」(27)は、清末藩士であった渡辺家に伝来し、中世文書の写を含んでいるが、「天和家状」には、当館所蔵の「渡辺家文書」には含まれていない文書が一〇点程度収録されている。

清末藩は毛利綱元の時代に長州藩初代藩主秀元の遺言に基づき、綱元の叔父にあたる元知が一万石分知されることで成立した支藩であり、「天和家状」成立の時点ではすでに存在している。清末藩士は、大部分が旧長府藩士やその分家によって構成されたことから、たとえば「天和家状」収録の「渡辺家文書」は長府藩士として存続した家に伝わった文書で、当館所蔵の「渡辺家文書」は、清末藩士となった分家が、本家に伝わった文書を写したもののいう可能性がある。

また、長府毛利家からは、前述した三代藩主綱元の子元倚(萩藩五代藩主吉元)や八代藩主匡敬(萩藩七代藩主重就)など、萩毛利家に入った人物がおり、その際に同道して長府藩士から萩藩士へと所属が変わった者がいる。そのような異動に伴い、「天和家状」編纂後に長府藩領から外に出た文書が存在したことも想定できる。

現在、「天和家状」収録文書の原本は、大部分が所在不明である。しかし、今後はこのような伝来経緯の分析を手掛かりとしつつ、原本の検索を行うことも必要であろう。

【史料③】吉川元春・小早川隆景連署書状写

(筑前国)

(候脱カ)

(筑前国)

立花表之衆案外取退候由、然間笠城番衆之事、多分彼表罷出候間、可為無人候、乍辛勞至笠城、急度御登城専一候、此者着候者、不移時可有御登候、此度御緩候てハ、太不可然候、爰元之儀、急度令陳易可仕候条、其内旁御馳走専一候、恐々謹言、

九月十七日

左衛門佐
(小早川)

隆景

駿河守
(吉川)

元春

杉豊後守殿
(連緒)

御陳所

【史料③】は、毛利氏が北部九州をめぐって豊後大友氏と対立していた永祿年間後半のものに比定される吉川元春と小早川隆景の連署書状写である(28)。宛所の杉豊後守は実名を連緒といい、大内氏の筑前守護代であった杉興長(彈正忠)・興運(彈正忠・豊後守)の流れを汲む人物で、この当時は毛利方として各地で大友方と戦っていた。元春と隆景は、永祿九年(一五六六)に毛利氏が尼子氏を降したのち河野氏の救援のため伊予国に赴き、帰国後の永祿一一年に九州に渡海し、大友方との戦いを指揮している。書状の内容は、毛利氏が筑前国立花城をめぐる大友氏との攻防に関連して、同国笠木山城(笠城)の在番衆が少なくなってしまうため、杉連緒に登城を求めたものである。

この文書は「天和家状」の記述によれば、宗近友庵の家に伝わった証文であるが、宗近家に関する由緒などの記載はない(29)。しかしながら、「天和家状」には、このほか友庵の家に伝わった小早川隆景の文書数点が収録されていることから、友庵の祖先はおそらく当初小早川隆景に従い、その後元清、あるいは秀元に仕えたものと思われる。

長府藩士のなかには、当初は小早川隆景に仕え、その後元清や秀元に仕えることになったという由緒の遺る家が見受けられる。周知のように小早川隆景は毛利氏の東進において山陽方面を担当しており、管轄地域が元清の活動領域と重なることから、双方の文書を受給する機会があり、そのような伝承

が遺されることになったと推察される。元清家臣団の形成について分析するためには、毛利氏の東進における指揮系統や役割分担の実態分析と併せて考える必要があるだろう。

【史料④】毛利輝元安堵状写

防州佐波郡之事、長門守以手続被付之上者、不相替可令所勤之事肝要候、謹言、

三月十九日

輝元御判
(毛利)

「羽仁二郎右衛門殿
(栄保)」

輝元

【史料④】は、毛利輝元が羽仁二郎右衛門栄保に対し、父長門守就忠同様に「防州佐波郡之事」を管掌するよう伝えたものである。弘治三年(一五五七)四月に大内氏を滅ぼした毛利氏は、大内氏の郡司(郡代)制を継承したとされる(30)。毛利氏時代の佐波郡司としては、阿川左衛門尉、羽仁栄保が知られ、【史料④】は、羽仁栄保の佐波郡司職が、父就忠から継承されたことを示すものである。羽仁氏は、安芸国厳島神社神主家の有力者で、同国佐伯区草津を本拠とし、神主家滅亡後は大内氏・陶氏に属したのち、毛利氏に仕えたとされる(31)。就忠・栄保父子の活動は、「防府天満宮文書」などで断片的に確認できるが、「天和家状」収録の「羽仁家文書」は、栄保の子孫に伝わった家伝文書の写であり、佐波郡司の実態を示す毛利氏による防長支配を考えるうえで重要な史料といえよう。「天和家状」収録の「羽仁家文書」には、このほか豊臣政権が朝鮮出兵に際して定めた京・大坂から肥前国名護屋までの継馬・継夫に関する規定を「天神府(周防国府)宿奉行」に伝える豊臣秀次の朱印状の写なども収録されている。このような朱印状については、周防国花岡奉行宛のもの(32)や長門国下関宛のもの(33)が知られており、「天神府(周防国府)」も豊臣政権による交通網の整備において拠点の一つに位置付けられていたことがわかる。

おわりに

以上、「天和家状」や長府毛利家臣団に関する簡単な分析を行ったうえで、「天和家状」に収録される文書写の状態を示す史料や、長府毛利家臣団の形成を探るうえで手掛かりとなりそうな史料、戦国時代の毛利氏の防長支配の実態を解明するうえで重要な史料などを紹介した。前述のように、「天和家状」収録の写は状態があまりよくないため、取り扱いには注意が必要であるが、現状で原本が所在不明の史料を数多く含んでおり、かつその内容は多岐にわたっている。今後、「天和家状」収録文書を利用した研究の進展や、原本が発見されることを期待したい。

註

- (1) 江戸時代の山口県域には、萩に藩庁を置く本藩のほか、三つの支藩が存在した（吉川家が治める岩国領については注(3)参照）。本稿では、本支藩を総称する場合は長州藩という表記を用い、各藩を個別に指す場合は藩庁の所在地から萩藩、長府藩のような表記を用いている。
- (2) なお、「寺社由来」には、一部支藩領に伝わる古文書・古記録が収録されている。
- (3) 吉川家が治める岩国領が正式な藩として認められるのは、大政奉還後の慶応四年（一八六八）三月のことであり、それ以前は萩毛利家の家臣である吉川家の領地として扱われた。しかし、岩国領に伝わる古文書・古記録は「閩閩録」には収録されていない。
- (4) 代表的なものとしては、山口県文書館所蔵の「譜録」収録文書がある（「譜録」については、広田暢久「長州藩編纂事業史（其の五）」（『山口県文書館研究紀要』一三、一九八六年）・「長州藩編纂事業史（其の六）」（『山口県文書館研究紀要』一四、一九八七年）に詳しい）。「譜録」の収録文書については、活字化されているものもあるが、史料の活字化はその時々の方針に基づいて成されるため、いまだ活字化されていないものも存在している。
- (5) 広田暢久氏は、「萩藩閩閩録」編纂にあたり写本提出年数が複数年にわたっている

理由を、本文のように推測しているが（「長州藩編纂事業史（其の一）」（『山口県文書館研究紀要』九、一九八二年））、これらの冊子についても同様と思われる。

- (6) 「藩中略譜」には、各家譜を系図のかたちで記したものと、文字で記したものの二種類があり、ともに未刊であるが、現在は双方ともに当館に所蔵されている。
- (7) なお「天和家状」については、元当館非常勤職員伊秩秀紀氏から多くのご教示を得た。「天和家状」の成立についても、後日同氏に研究成果を公表する予定があるとのことであるから、ここでは、「天和家状」成立の背景について、若干の推論を述べるに留めておく。
- (8) なお、特に稲葉正則については、長府毛利家に「御手鑑」を贈ったことで知られる。この手鑑は、長府毛利家において「筆陣」と改められ、国元でも「浜千鳥」という手鑑が作成されたほか、正則から贈られた手鑑もいくつかに分散され、多くの手鑑が作成されたようである（『下関市史 藩政―市政施行』下関市、二〇〇九年）。現在当館に所蔵される「筆陣」（山口県指定文化財）や「毛利家御手鑑」（下関市指定文化財「長府毛利家文書」）は、そのような手鑑の一部であり、このほかにも長府毛利家で作成された手鑑や、それらの手鑑から剥ぎ取られたと推測される古文書・短冊等を収録した手鑑の存在が知られている。
- (9) 前掲『下関市史 藩政―市政施行』。
- (10) この過程で、萩藩でも各家臣に家伝の古文書類を書き上げさせており、寛文三〜五年（一六六三〜六五）に提出されたものが、現在山口県文書館に保管されている。
- (11) 萩藩の修史事業については、広田暢久「長州藩編纂事業史（其の一〜六）」（『山口県文書館研究紀要』九、一四、一九八二〜八七年）に詳しい。
- (12) なお、広田暢久氏は吉元の事業の目的について、享保の改革遂行のために家臣団の把握が必要であったことから、家臣団個々の家と毛利家との結び付きを知ったうえで家臣団機構の体系化を意図したものと推定している（前掲広田「長州藩編纂事業史（其の一）」）。吉元の実父である綱元は、法体系の整備を推進し、長府藩政を確立させたことで知られているから（前掲『下関市史 藩政―市政施行』）、広田氏の指摘をふまえれば、「天和家状」の編纂についても藩政推進のための家臣団の把握が目的であった可能性もある。

(13) 松岡久人「解説」(『廿日市町史 資料編Ⅰ』廿日市町、一九七九年)。

(14) 石畑匡基「戦国期毛利元清の権限と地位」(『古文書研究』七八、二〇一四年)。

(15) 古くから、元清は備中庄氏の一族である穂田(穂井田)氏を継承したとされてきた。この認識は、江戸時代の長府毛利家にも存在したようであるが、この元清の穂田氏継承については、すでに村井良介、石畑匡基両氏が指摘するように事実ではなく、猿懸在城に伴い、在名を名乗ったに過ぎない(村井良介『戦国大名権力構造の研究』(思文閣出版、二〇一二年)、石畑匡基『毛利元清発給文書の研究』(倉敷の歴史)二四、二〇一四年)・「戦国期毛利元清の権限と地位」。なお、南北朝時代に安芸国から長門国豊浦郡に移り、大内氏に仕えて厚母郷を領した毛利氏の末裔である毛利元員は、永祿十一年(一五六八)以前には在名である厚母を名乗るようになっていた(『厚母家文書』一二『山口県史 史料編 中世3』山口県、二〇〇四年、一〇二頁)。また、大内氏の子孫陶氏の旧臣であった毛利与三は、永祿八年には奈古屋を称することを毛利元就・輝元から許可されている(『奈古屋家文書』二『山口県史 史料編 中世3』三七七頁)。これらのことから、永祿年間頃から、毛利家臣のなかに毛利苗字からの改称を行う動きがみられたことがわかる。この動向については、奈古屋改称を許可した毛利元就・同輝元連署書状写に「当時名字(毛利―筆者注)之儀雖不苦候、重々望之義候条」とあることから、毛利氏からの強制ではなく、家臣の側からの自発的な行いであつたらしい。おそらくこのような動向は、毛利氏の勢力拡大に伴い生じたものであつたと考えられる。石畑匡基氏は、毛利氏が毛利苗字の統制を行っていたと指摘するが(前掲石畑「戦国期毛利元清の権限と地位」)、苗字の統制については、このような事例もふまえて検討する必要があるだろう。

(16) 毛利秀元の事績については、田中洋一『毛利秀元拾遺譚―元就の再来』(二〇一六年)などを参照した。

(17) 笑山寺は、秀元の入部前は臨済宗寺院の金山長福寺といい、秀元により父元清の菩提寺とされ、改宗・改称された。なお、笑山寺は、のちに長府藩二代藩主となった秀元の子光広によって秀元の菩提寺に改められ、秀元の法名から功山寺と改称されることになる。これに伴い、元清の位牌は妻の菩提寺であつた妙寿寺に移され、こ

ちらが改称されて新たな笑山寺となった。

(18) 根本みなみ『近世大名家における「家」と「御家」―萩毛利家と一門家臣』(清文堂出版、二〇一八年)。

(19) なお、萩毛利家は秀就の誕生によって秀元が分家独立したという認識にたつていたが、長府毛利家は秀元がいったん輝元から家督を継承し、その後秀就に家督を譲つて隠居することで長府毛利家が成立したと主張していた(田中誠二「萩藩本・支藩関係をめぐる」(『山口県地方史研究』六一、一九八九年)・同「毛利秀元論」(『山口県地方史研究』六二、一九九〇年)。

(20) ただし、「天和家状」の各家の由緒書では、元清の発給文書の伝来をもつて、祖先が元清に仕えていたと考える傾向があつたことがうかがわれる。後述する輝元・元清双方との主従関係の存在もふまえ、元清家臣団の形成を考えるうえでは、主従関係成立の時期や指標の設定について、慎重に検討する必要がある。

(21) なお、現残存する「天和家状」に収録される家のうち、家老家は山口県文書館所蔵分に収録される伊秩某家のみである。この家と同様に家老を務めた桂家については、分家は収録されるが、少なくとも現存の冊子のなかに本家は収録されていない。

(22) 「毛利家乗」は明治時代に編纂された長府毛利家の家史であり、前記として毛利氏の略歴と元清の事績について記したのち、秀元から編纂当時の当主元敏までの各代の事績を編年でまとめている。当館所蔵の原本には、本編に加えて附録があり、このうち本編のみは戦後に復刻されている(『毛利家乗』防長史料出版社、一九七五年)。

(23) 元清の家臣については、給地の宛行に際して元清が知行宛行状ではなく、打渡状を発給していることが多いことなどをふまえ、元清と輝元の二重に主従関係を有することが想定されるという石畑匡基氏の指摘がある(前掲石畑「毛利元清発給文書の研究」)。

(24) 長府藩の分限帳については、藤村直編『長府藩分限帳(史料叢書二九)』(下関文書館、一九八七年)で活字化されている。

(25) 「原田家文書」は長府藩士原田家に伝わり、平成二三年度に旧下関市立長府博物館に寄贈され、当館に引き継がれた。

(26) なお、逆に当館蔵の「原田家文書」には、「天和家状」に収録されない文書が数点

含まれている。これらについては、別の機会に紹介することにした。

(27) 「渡辺家文書」(『山口県史 史料編 中世4』山口県、二〇〇八年、三七六―三七九頁)。

(28) この時期の北部九州の状況については、『飯塚市史 上巻』(飯塚市、二〇一六年)の筆者執筆部分において若干の考察を試みたことがあるため、あわせて参照されたい。

(29) 「藩中略譜」によれば、友庵の家は医業をもって長府藩に仕えたという。

(30) 松浦義則「戦国大名毛利氏の領国支配機構の進展」(藤木久志編『戦国大名論集 一四 毛利氏の研究』吉川弘文館、一九八四年(初出は一九七六年))。なお、松浦氏の研究については、岸田裕之氏により異論が出されている(『戦国大名毛利氏の周防国東部支配―段銭徴収のあり方からみた―』(講演録で読む中国地域の戦国時代史』清文堂出版株式会社、二〇一九年))。

(31) 「史料解題 羽仁家文書」(『山口県史 史料編 中世3』、『萩藩閥閥録』巻四八羽仁右衛門)。

(32) 「花岡八幡宮文書」五二『山口県史 史料編 中世2』三二三頁。

(33) 「佐甲家文書」九『山口県史 史料編 中世4』二七六頁。

〔付記〕

本稿執筆にあたっては、先述の伊秩秀紀氏をはじめとする方々からご教示を得た。末筆ながらお礼申し上げる。

【「天和家状」収録中世文書目録】

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
1	大内義隆預々状写	5月15日	(大内) 義隆	伊秩美作守	伊秩某 1	1	当家は代々長府藩家老を務めており、天和～元禄年間の当主は元敬(元二) といった
2	大内義隆感状写	7月25日	(大内) 義隆	伊秩美作守	伊秩某 2	1	
3	大内氏奉行人連署書状写	5月7日	(沼間カ) 興国・宗哲	伊秩美作守	伊秩某 3	1	
4	大内義長書状写	7月5日	(大内) 義長	伊秩美作守	伊秩某 4	1	
5	毛利元清知行打渡状写	天正 15 年 5 月 15 日	(毛利) 元清	伊秩安房守 (清泰)	伊秩某 5	1	
6	毛利元康書状写		七郎兵 (毛利元康)	伊房 (伊秩清泰)	伊秩某 6	1	
7	小早川秀包知行打渡状写	10月23日	(小早川) 秀包	伊秩安房守 (清泰)	伊秩某 7	1	
8	毛利秀元書状写	文禄 2 年 2 月 23 日	(毛利) 秀元	伊房 (伊秩清泰)・虎松 (内藤五郎兵衛女)	伊秩某 8	1	虎松は伊秩清泰養女
9	毛利元清書状写	(天正 12 年) 9 月 17 日	(毛利) 治太元清	西堂 (安国寺恵瓊カ)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 1	1	
10	毛利元就感状写	永禄 6 年 11 月 20 日	(毛利) 元就	飯田七郎右衛門 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 2	1	『関』 132 飯田 9
11	吉川元春感状写	(永禄 11 年) 9 月 21 (11 ㄱ) 日	(吉川) 治部元春	飯田七郎右衛門 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 3	1	『関』 132 飯田 14
12	毛利元就・同隆元連署感状写	天文 23 年 6 月 11 日	(毛利) 隆元・(毛利) 元就	飯田七郎右衛門 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 4	1	『関』 132 飯田 1
13	毛利輝元感状写	文〔永〕 禄 11 年霜月 13 日	(毛利) 輝元	飯田七郎右衛門 (元著カ)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 5	1	『関』 132 飯田 15
14	毛利輝元感状写	元亀 2 (3 ㄱ) 年正月 8 日	(毛利) 輝元	飯田弥七郎 (元著)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 6	1	『関』 132 飯田 16、『関』では元亀 3 年
15	毛利元就・同隆元連署感状写	天文 23 年 10 月 6 日	(毛利) 隆元 (・毛利) 元就	飯田七郎右衛門 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 7	1	『関』 132 飯田 2、[「天和家状」では差出のうち毛利元就を欠く]
16	毛利隆元感状写	永禄 4 年 6 月 13 日	(毛利) 隆元	飯田七郎右衛門 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 8	1	『関』 132 飯田 5
17	毛利輝元書状写	(天正 5 年) 2 月 28 日	(毛利) 輝元	飯田越中守 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 9	1	『関』 132 飯田 18
18	毛利隆元感状写	永禄 4 年 12 月 13 日	(毛利) 隆元	飯田弥七郎 (元著)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 10	1	『関』 132 飯田 6
19	毛利元就・同隆元連署感状写	天文 24 年 6 月 28 日	(毛利) 隆元・(毛利) 元就	飯田七郎右衛門 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 11	1	『関』 132 飯田 3
20	毛利元就・同隆元連署感状写	(弘治元年) 正月 9 日	(毛利) 隆元・(毛利) 元就	(飯田義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 12	1	『関』 132 飯田 7、[「天和家状」では宛所を欠く]
21	毛利輝元感状写	3月4日	(毛利) 輝元	飯田越中守 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 13	1	『関』 132 飯田 13
22	毛利元就・同隆元連署感状写	(天文 23 年) 6 月 11 日	(毛利) 隆元・(毛利) 元就	飯田七郎右衛門 (義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 14	1	『関』 132 飯田 8

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
23	小早川隆景書状写	12月8日	(小早川) 隆元〔景〕	飯田越中守(義武)・飯田七郎右衛門(元著)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 15	1	『関』132 飯田 11、『関』の差出が隆景であること、飯田義武が越中守を名乗る永禄 11 年以前に毛利隆元が死去していることから、差出は隆景の誤り
24	毛利隆元感状写	弘治 2 年 3 月 26 日	(毛利) 隆元	飯田七郎右衛門(義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 16	1	『関』132 飯田 4
25	吉川元春・小早川隆景書状写	8月10日	(吉川) 元春・(小早川) 隆景	飯田越中守(義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 17	1	『関』132 飯田 17
26	小早川隆景書状写	卯月 18 日	(小早川) 隆景	栗藏(栗屋元種)・栗宗兵(栗屋就秀)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 18	1	『関』132 飯田 12
27	吉川元春書状写	2月16日	(吉川) 元春	飯田越中守(義武)・同七郎右衛門(元著)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 19	1	『関』132 飯田 25
28	毛利輝元感状写	(天正 12 年) 6 月 14 日	(毛利) 輝元	飯田弥七郎(元覚)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 20	1	『関』132 飯田 20
29	小早川隆景書状写	11月26日	(小早川) 隆景	(毛利) 元清 安国寺(恵瓊)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 21	1	『関』132 飯田 24
30	毛利輝元書状写	7月28日	てるもと(毛利輝元)	飯七右(飯田元著)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 22	1	『関』132 飯田 21
31	小早川隆景書状写	(天正 12 年) 5 月 2 日	(小早川) 隆景	飯田越中守(義武)	飯田平治兵衛信治・飯田左源太正勝 23	1	『関』132 飯田 23、「天和家状」では追而書を欠く
32	毛利輝元書状写	5月14日	(毛利) 輝元	桂兵部丞(元親)・内藤神兵衛	飯田与治兵衛 1	1	
33	毛利輝元感状写	8月23日	(毛利) 輝元	飯田右近丞	飯田与治兵衛 2	1	
34	吉川元春・小早川隆景書状写	8月18日	小早川隆景・吉川元春	飯田右近允	飯田与治兵衛 3	1	
35	毛利輝元感状写	閏 3 月 11 日	(毛利) 輝元	飯田右近允	飯田与治兵衛 4	1	
36	毛利元就・同隆元連署書状写	5月22日	(毛利) 隆元・(毛利) 元就	飯田大炊助(元秀)	飯田与治兵衛 5	1	
37	瀧川一益書状写	天正 11 年 5 月 2 日	瀧川左近(一益)	岩間新兵衛	岩間新兵衛門之賢 1	1	
38	毛利元清書状写	8月24日	(毛利) 元清	伊佐兵部丞(重継)	伊佐吉兵衛正為 1	1	
39	毛利元清条書写	11月11日	(毛利) 元清	極楽寺・伊兵(伊佐重継)	伊佐吉兵衛正為 2	1	
40	毛利元清書状写	12月22日	(毛利) 元清	国右(国司元武)	伊佐吉兵衛正為 3	1	
41	桜田親良書状写	10月14日	桜田源兵衛尉親古〔良〕	(毛利) 元清	伊佐吉兵衛正為 4	1	桜田親良は桂元澄の家臣と伝わり、原本は裏に赤川元保の証判ありという
42	某元資感状写	極月 15 日	元資	石井与三兵衛	石井作右衛門直昔 1	1	石井家には庄元資の感状との伝承あり
43	毛利元清假名書出写	天正 16 年 3 月 19 日	(毛利) 元清	石井彦三郎	石井作右衛門直昔 2	1	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
44	毛利元清加冠写	文禄4年●月27日	(毛利) 元清	石井市蔵	石井作右衛門直普3	1	
45	毛利元清書状写		(毛利) 元清	妙楽 (原田政則カ)	原田将監 1	1	
46	毛利元清知行打渡状写	天正5年12月15日	(毛利) 元清	原田如嶋 (政則)	原田将監 2	1	原本当館蔵
47	毛利元清知行宛行状写	天正13年12月晦日	(毛利) 元清	原田若狭入道 (政則、如嶋)	原田将監 3	1	
48	毛利元清書状写	7月12日	(毛利) 元清	原田若狭守 (政則)	原田将監 4	1	
49	毛利秀元黒印知行宛行状写	慶長4年11月12日	(毛利) 秀元	原田若狭守 (政則)	原田将監 5	1	
50	毛利元清書状写	正月9日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 6	1	
51	毛利元清書状写	2月1日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 7	1	
52	毛利元清書状写	10月3日	(毛利) 元清	佐カ与三右 (佐世元嘉カ)	原田将監 8	1	
53	毛利元清書状写	卯月16日	(毛利) 元清	(宛所虫喰)	原田将監 9	1	
54	毛利元清書状写	8月28日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 10	1	
55	毛利元清書状写	12月14日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 11	1	
56	毛利元清書状写	12月18日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 12	1	
57	毛利元清書状写	7月4日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 13	1	
58	毛利元清書状写	2月18日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)・光左	原田将監 14	1	日付を上からなぞって修正している
59	毛利元清書状写	4月23日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 15	1	
60	毛利元清書状写	11月15日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 16	1	
61	毛利元清書状写	11月14日	(毛利) 元清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 17	1	
62	毛利元清書状写	12月3日	(毛利) 元清	原若 (原田若狭守)	原田将監 18	1	
63	毛利元清書状写	9月7日	(毛利) 元清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 19	1	
64	毛利元清書状写	8月24日	(毛利) 元清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 20	1	
65	天野元政書状写	11月5日	(天野) 少六元政	原若 (原田政則)	原田将監 21	1	原本当館蔵
66	天野元政書状写	4月8日	(天野) 少六 (元) 政	原若 (原田政則)	原田将監 22	1	原本当館蔵
67	毛利元清書状写	8月16日	(毛利) 元清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 23	1	
68	毛利元清書状写	10月24日	(毛利) 元清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 24	1	
69	毛利元清書状写	3月17日	(毛利) 元清	西孫兵 (元由)・原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 25	1	
70	毛利元清書状写	6月22日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 26	1	
71	毛利元清書状写	2月15日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 27	1	
72	毛利元清書状写	正月15日	(毛利) 元清	(宛所切れ)	原田将監 28	1	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
73	毛利元清書状写	6月22日	(毛利) 元清		原田将監 29	1	
74	毛利元清書状写	後7月23日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 30	1	
75	毛利元清書状写	12月5日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 31	1	
76	毛利元清書状写	正月13日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 32	1	
77	毛利元清書状写		ち太 (毛利元清)		原田将監 33	1	
78	毛利元清書状写	8月24日	(毛利) 元清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 34	1	
79	毛利元清書状写	閏7月22日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 35	1	
80	毛利元清書状写	7日	(毛利) もと清	原若 (原田政則)	原田将監 36	1	
81	毛利元清書状写	2月15日	(毛利) 元清	多久十 (多久和清秀)・坪 孫右 (坪井孫右衛門)・原 若 (原田政則)・内泉・中 左 其外面々	原田将監 37	1	
82	毛利元清書状写	5月9日	(毛利) 元清		原田将監 38	1	
83	毛利元清書状写	正月22日	(毛利) 元清	原若狭守 (原田政則)	原田将監 39	1	
84	毛利元清書状写	正月7日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 40	1	
85	毛利元清書状写	正月8日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 41	1	
86	毛利元清書状写	3月19日	(毛利元) 清	原若 (原田政則)	原田将監 42	1	
87	毛利元清書状写	7月13日	(毛利) 元清		原田将監 43	1	
88	毛利元清書状写	卯月6日	(毛利元) 清	原若 (原田政則)・飯田右	原田将監 44	1	
89	毛利元清書状写	5月13日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 45	1	
90	毛利元清書状写	3月27日	(毛利) 元清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 46	1	
91	毛利元清書状写	3月18日	(毛利元) 清	原若 (原田政則)・飯田右	原田将監 47	1	
92	毛利元清書状写	極月29日	(毛利) もと清	原若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 48	1	
93	毛利元清書状写	卯月12日	(毛利) 元清	原若 (原田政則)	原田将監 49	1	
94	毛利元清書状写	12月11日	(毛利元) 清	若入 (原田政則、如嶋)	原田将監 50	1	
95	某元親書状写	8月22日	元親	(市川) 元好	羽仁権右衛門 1	1	
96	市川元好書状写	8月15日	市式 (市川) 元好	羽仁源右衛門	羽仁権右衛門 2	1	
97	毛利輝元安堵状写	元龜 4年5月3日	(毛利) 輝元	羽仁源三郎 (元頼)	羽仁権右衛門 3	1	
98	毛利輝元仮名書出写	天正 10年12月23日	(毛利) 輝元	羽仁源三郎 (元頼)	羽仁権右衛門 4	1	
99	毛利輝元仮名書出写	天正 10年12月23日	(毛利) 輝元	羽仁源三郎 (元頼)	羽仁権右衛門 5	1	前号文書と重複
100	毛利秀元黒印知行宛行状写	慶長 4年10月28日	(毛利秀元)	羽仁市兵衛 (元貞)	羽仁権右衛門 6	1	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
101	豊臣秀吉朱印状写	(天正20年8月カ)	(豊臣秀吉)		羽仁次郎右衛門1	1	
102	豊臣秀次朱印状写	天正20年8月日	(豊臣秀次)	天神苻(苻)宿奉行	羽仁次郎右衛門2	1	
103	豊臣秀次朱印状写	天正20年9月4日	(豊臣秀次)	天神のこふ(古苻カ)奉行	羽仁次郎右衛門3	1	
104	豊臣秀次朱印状写	2月日	(豊臣秀次)	周防天神府にて安芸宰相 (毛利輝元)代官	羽仁次郎右衛門4	1	
105	毛利元就・同輝元連署感状写	5月17日	(毛利)元就・(毛利)輝元	羽仁長門守(就忠)	羽仁次郎右衛門5	1	
106	毛利輝元書状写	10月6日	(毛利)輝元	羽仁長門守(就忠)	羽仁次郎右衛門6	1	
107	毛利輝元安堵状写	元亀3年8月朔日	(毛利)輝元	羽仁長門守(就忠)	羽仁次郎右衛門7	1	
108	毛利輝元書状写	12月8日	(毛利)輝元	羽仁長門守(就忠)	羽仁次郎右衛門8	1	
109	毛利輝元書状写	10月3日	(毛利)輝元	市川伊豆守(經好)	羽仁次郎右衛門9	1	
110	羽仁就忠申状写	10月28日	羽仁長門守(就忠)	栗屋内蔵丞(元種)	羽仁次郎右衛門10	1	
111	毛利輝元書状写	5月12日	(毛利)輝元	信常太郎兵衛(元実)・羽仁長門守(就忠)・原兵庫頭内藤七郎	羽仁次郎右衛門11	1	
112	小早川隆景書状写	10月6日	(小早川)隆景	羽仁長門守(就忠)	羽仁次郎右衛門12	1	
113	毛利輝元安堵状写	天正8年3月19日	(毛利)輝元	羽仁次郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門13	1	
114	毛利輝元書状写	3月13日	(毛利)輝元	(内藤)隆春	羽仁次郎右衛門14	1	
115	毛利輝元書状写	12月28日	(毛利)輝元	羽仁次郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門15	1	
116	吉見広頼書状写	10月7日	吉見広頼	羽仁次郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門16	1	
117	吉川広家書状写	正月9日	(吉川)蔵人広家	羽仁次郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門17	1	
118	佐世元嘉カ書状写	11月21日	作石●(元カ)嘉(佐世元嘉カ)	羽仁次郎右衛門(榮保)・三内左(三浦元定)代	羽仁次郎右衛門18	1	
119	小早川隆景書状写	8月5日	(小早川)隆景	羽仁二郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門19	1	
120	毛利輝元書状写	正月20日	(毛利)輝元	羽仁次郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門20	1	
121	毛利輝元書状写	正月18日	(毛利)輝元	羽仁二郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門21	1	
122	毛利輝元書状写	正月22日	(毛利)輝元	羽仁次郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門22	1	
123	毛利輝元書状写	3月19日	(毛利)輝元	羽仁二郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門23	1	
124	毛利輝元書状写	12月25日	(毛利)輝元	羽仁二郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門24	1	
125	毛利輝元書状写	12月13日	(毛利)輝元	羽仁二郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門25	1	
126	毛利輝元書状写	霜月20日	(毛利)輝元	羽仁二郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門26	1	
127	毛利元清書状写	11月朔日	(毛利)治部元清	羽仁次郎右衛門(榮保)	羽仁次郎右衛門27	1	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
128	毛利輝元加冠状写	文禄 3 年	(毛利) 輝元	羽仁善内	羽仁次郎右衛門 28	1	
129	毛利輝元仮名書出写	天正 4 年 9 月 16 日	(毛利) 輝元	羽仁源五郎	羽仁次郎右衛門 29	1	
130	毛利輝元袖判条書写	正月 2 日	(毛利輝元)		羽仁次郎右衛門 30	1	
131	織田家カ家臣請取状写		きぶ(岐阜カ) 宰相(織田秀信カ) 内 大西久右衛門・小嶋与一	羽仁二郎右衛門(栄保)	羽仁源五郎 1	1	
132	前田家家臣請取状写	天正 20 年卯月 9 日	黒田長右衛門・中村常他カ・村井豊後守	羽仁次郎右衛門(栄保)	羽仁源五郎 2	1	
133	上杉家家臣請取状写	卯月 10 日	泉源河内守	羽仁次郎右衛門(栄保)	羽仁源五郎 3	1	
134	伊達家家臣請取状写	卯月 10 日	伊達下之者 鈴木七右衛門信吉	羽仁次郎右衛門(栄保)	羽仁源五郎 4	1	
135	加賀爪カ某請取状写	卯月 10 日	かゝ(加賀) 爪カ	羽仁二郎右衛門(栄保)	羽仁源五郎 5	1	
136	佐竹家家臣請取状写	天正 20 年卯月 10 日	佐竹内 太繩讀岐	羽仁次郎右衛門(栄保)	羽仁源五郎 6	1	
137	羽仁次郎右衛門遣方覚書写	天正 20 年卯月 7 日	羽仁二郎右衛門(栄保)		羽仁源五郎 7	1	
138	毛利元清加冠状写	天正 12 年 12 月 30 日	(毛利) 元清	林勝七(清之)	林左兵衛 1	1	
139	毛利元清知行打渡状写	天正 15 年 12 月 9 日	(毛利) 元清	林勝七(清之)	林左兵衛 2	1	
140	毛利元清書状写	卯月 29 日	(毛利) 元清	小野神右衛門	小野理兵衛道順 1	2	
141	毛利元清書状写	5 月 23 日	(毛利) 元清	小野神右衛門・江本喜衛門	小野理兵衛道順 2	2	
142	毛利元清書状写	6 月 18 日	(毛利) 元清	小野神右衛門	小野理兵衛道順 3	2	
143	毛利元清書状写	9 月 15 日	(毛利) 元清	小神右(小野神右衛門)	小野理兵衛道順 4	2	
144	毛利元清加冠状写	文禄 4 年卯月 18 日	(毛利) 元清	小野久五郎	小野理兵衛道順 5	2	
145	庄元資書状写	永禄 13 年 8 月 10 日	(庄) 式部少輔元資	小坂宗四郎	小坂惣右衛門 1	2	
146	毛利元清書状写	8 月 28 日	(毛利) 四郎元清	元将	小坂惣右衛門 2	2	
147	毛利元清加冠状写	天正 18 年 9 月 2 日	(毛利) 元清	岡部勘兵衛	岡部彦左衛門 1	2	
148	毛利元清仮名書出写	文禄 4 年 10 月 10 日	(毛利) 元清		岡部彦左衛門 2	2	
149	毛利元就感状写	永禄 6 年 8 月 14 日	(毛利) 元就	渡辺神右衛門(宗)	渡辺次郎兵衛貞長 1	2	
150	毛利隆元感状写	永禄 4 年 12 月 23 日	(毛利) 隆元	渡辺与三次郎	渡辺次郎兵衛貞長 2	2	
151	毛利隆元書状写	6 月 9 日	(毛利) 隆元	渡辺与三次郎	渡辺次郎兵衛貞長 3	2	
152	毛利輝元仮名書出写	慶長 4 年閏 3 月 28 日	(毛利) 輝元	渡辺神右衛門(宗)	渡辺次郎兵衛貞長 4	2	
153	某三右(児玉元良カ) 書状写	12 月 6 日	三右(児玉元良カ)	張六郎(元至)	渡辺次郎兵衛貞長 5	2	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
154	毛利輝元書状写	7月13日	(毛利) てる元	神惣 (神田元忠)	渡辺次郎兵衛貞長 6	2	
155	毛利輝元・神判・神田元忠書状写	8月6日	(毛利輝元) / 神田宗四郎元忠	羽仁次郎右衛門 (栄保)	渡辺次郎兵衛貞長 7	2	
156	国司元武書状写	2月10日	国司右京亮 (元武)	市川式部少輔 (経好)	渡辺次郎兵衛貞長 8	2	
157	法泉カ寺宗治書状写	正月28日	法泉カ寺宗治	洞雲寺	渡辺次郎兵衛貞長 9	2	
158	毛利元就書状写	5月27日	(毛利) 元就	渡辺神右衛門尉 (宗)	渡辺次郎兵衛貞長 10	2	「渡辺」 3 (『山県 2』)
159	毛利隆元書状写	5月7日	(毛利) 備中守隆元	秋山掃部助 (元継)	渡辺次郎兵衛貞長 11	2	「渡辺」 1 (『山県 2』)
160	毛利輝元書状写	(天正7年) 10月20日	(毛利) 輝元	渡辺神右衛門 (宗)	渡辺次郎兵衛貞長 12	2	「渡辺」 11 (『山県 2』)
161	毛利輝元書状写	(天正7年) 10月30日	(毛利) 輝元	渡辺神右衛門 (宗)	渡辺次郎兵衛貞長 13	2	「渡辺」 12 (『山県 2』)
162	毛利輝元知行宛行状写	天正4年6月7日	(毛利) 輝元	渡辺神右衛門尉 (宗)	渡辺次郎兵衛貞長 14	2	「渡辺」 5 (『山県 2』)
163	毛利輝元書状写	(天正4年) 6月1日	(毛利) 輝元	国司対馬守 (就信)・黒河三河守 (著保)	渡辺次郎兵衛貞長 15	2	「渡辺」 4 (『山県 2』)
164	毛利輝元書状写	5月5日	(毛利) 輝元	渡辺豊後守 (宗)	渡辺次郎兵衛貞長 16	2	「渡辺」 8 (『山県 2』)
165	毛利輝元書状写	7月3日	(毛利) 輝元	池右・渡豊 (渡辺宗)	渡辺次郎兵衛貞長 17	2	「渡辺」 9 (『山県 2』)、異本は宛所の順序が逆
166	毛利輝元加冠状写	天正20年2月26日	(毛利輝元)	渡辺神 (甚ノ) 吉	渡辺次郎兵衛貞長 18	2	「渡辺」 7 (『山県 2』)
167	吉川元春書状写	10(7ノ)月19日	(吉川) 元春	渡辺神兵衛 (宗)	渡辺次郎兵衛貞長 19	2	「渡辺」 10 (『山県 2』)
168	小早川隆景書状写	(天正8年) 2月15日	(小早川) 隆景	渡辺甚右衛門尉 (宗)	渡辺次郎兵衛貞長 20	2	「渡辺」 6 (『山県 2』)
169	毛利元就書状写	2月15日	(毛利) 元就	渡辺宗兵衛尉	渡辺弥左衛門貞致 1	2	
170	毛利元就・同輝元・連署書状写	11月13日	(毛利) 輝元・(毛利) 元就	渡辺但馬守	渡辺弥左衛門貞致 2	2	
171	小早川隆景・安国寺恵瓊・連署書状	10月9日	(小早川) 隆景・(安国寺) 恵瓊	栗藏 (栗屋元種)	渡辺弥左衛門貞致 3	2	
172	毛利輝元加冠状写	天正16年3月11日	(毛利) 輝元	渡辺源二郎	渡辺弥左衛門貞致 4	2	
173	毛利輝元知行宛行状写	天正16年	(毛利) 輝元	渡辺源二郎	渡辺弥左衛門貞致 5	2	
174	後陽成天皇口宣案写	文禄5年5月12日	上卿 源中納言 (庭田重通) / 藏人権右少弁藤原 (柳原) 資淳	(豊臣 (桂) 元善)	桂某 1	2	「桂」 8 (『山県 3』)
175	後陽成天皇口宣案写	文禄5年5月12日	上卿 源中納言 (庭田重通) / 藏人権右少弁藤原 (柳原) 資淳	(豊臣 (桂) 元善)	桂某 2	2	「桂」 9 (『山県 3』)
176	毛利元清書状写	9月29日	(毛利) 元清	桂内蔵太夫 (就秀)	桂八郎兵衛宗澄 1	2	「桂」 10 (『山県 3』)
177	毛利元清書状写	12月29日	(毛利) 元清	蔵太 (桂就秀)	桂八郎兵衛宗澄 2	2	「桂」 11 (『山県 3』)

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
178	毛利元清書状写	卯月 20 日	(毛利) 元清	桂蔵 (就秀)	桂八郎兵衛宗澄 3	2	「桂」 12 (『山県 3』)
179	毛利秀元黒印条書	12 月 24 日	(毛利) 秀元	桂勘左衛門 (元辰) ・ 内藤八郎右衛門 (清教)	桂八郎兵衛宗澄 4	2	
180	毛利元清安堵状写	天正 2 年 8 月 5 日	(毛利) 元清	桂内蔵太夫 (就秀)	桂兵左衛門政澄 1	2	「桂」 13 (『山県 3』)
181	毛利秀元宛行状写	慶長 4 年 10 月 28 日	(毛利秀元)	桂与左衛門尉 (元吉)	桂兵左衛門政澄 2	2	「桂」 14 (『山県 3』)
182	毛利秀元黒印宛行状写	慶長 4 年 11 月 13 日	(毛利秀元)	桂八郎兵衛 (元吉)	桂兵左衛門政澄 3	2	「桂」 15 (『山県 3』)
183	毛利秀元宛行状写	慶長 4 年 11 月 13 日	(毛利秀元)	桂八郎兵衛 (元吉)	桂兵左衛門政澄 4	2	「桂」 16 (『山県 3』)
184	毛利隆元書状写	6 月 6 日	(毛利) 隆元	能登守 (桂元澄)	桂次郎左衛門清貞 1	2	「桂」 5 (『山県 4』)
185	毛利元清書状写	9 月 7 日	(毛利) 治太元清	桂伊賀入 (清道カ)	桂次郎左衛門清貞 2	2	「桂」 17 (『山県 3』)
186	毛利元清書状写	5 月 20 日	(毛利) 治太元清	桂伊賀入道 (清道カ)	桂次郎左衛門清貞 3	2	「桂」 18 (『山県 3』)
187	毛利元清書状写	3 月 23 日	(毛利) 治太元清	伊賀 (清道カ)	桂次郎左衛門清貞 4	2	「桂」 19 (『山県 3』)
188	毛利元清書状写	6 月 19 日	(毛利) 治太元清	桂伊賀守 (清道カ)	桂次郎左衛門清貞 5	2	「桂」 20 (『山県 3』)
189	毛利元清書状写	11 月 2 日	(毛利) 元清	桂伊賀入道 (清道カ)	桂次郎左衛門清貞 6	2	「桂」 21 (『山県 3』)
190	毛利元清書状写	9 月 28 日	(毛利) 元清	桂孫太 (清方)	桂次郎左衛門清貞 7	2	「桂」 22 (『山県 3』)
191	毛利元清書状写	14 日	(毛利) 元清	桂孫太 (清方)	桂次郎左衛門清貞 8	2	「桂」 23 (『山県 3』)
192	毛利元清書状写	24 (14 ㄱ) 日	(毛利) 元清	桂孫太 (清方)	桂次郎左衛門清貞 9	2	「桂」 24 (『山県 3』)
193	毛利元清書状写	2 月 7 日	(毛利) 元清	桂孫太 (清方)	桂次郎左衛門清貞 10	2	「桂」 25 (『山県 3』)
194	毛利元清書状写	7 月 16 日	(毛利) 元清	桂孫太郎 (清方)	桂次郎左衛門清貞 11	2	「桂」 26 (『山県 3』)
195	毛利元清書状写	16 日	(毛利) 元清	桂孫太 (清方)	桂次郎左衛門清貞 12	2	「桂」 27 (『山県 3』)
196	毛利秀元黒印宛行状写	慶長 4 年 12 (11 ㄱ) 月 13 日	(毛利秀元)	桂次右衛門 (清方)	桂次郎左衛門清貞 13	2	「桂」 28 (『山県 3』)
197	毛利元清安堵状写	天正 12 年 11 月 5 日	(毛利) 元清	桂坂法師 (清方)	桂次郎左衛門清貞 15	2	「桂」 29 (『山県 3』)
198	毛利元清加冠状写	天正 12 年正月朔日	(毛利) 元清	桂坂法子 (清方)	桂次郎左衛門清貞 16	2	「桂」 30 (『山県 3』)
199	毛利元清仮名書出写	天正 20 年 8 月 24 日	(毛利) 元清	桂孫太郎 (清方)	桂次郎左衛門清貞 17	2	「桂」 31 (『山県 3』)
200	毛利元清仮名書出写	文禄 5 年 12 月 30 日	(毛利) 元清	桂孫太郎 (清方)	桂次郎左衛門清貞 18	2	「桂」 32 (『山県 3』)
201	毛利元清書状写	9 月 28 日	(毛利) 元清	福太 (福原就次)	桂次郎左衛門清貞 19	2	「桂」 33 (『山県 3』)
202	毛利元康書状写	11 月 2 日	(毛利) 七郎兵元康	桂孫太 (清方) ・ 清庵・作 (作間) 助兵	桂次郎左衛門清貞 20	2	「桂」 34 (『山県 3』)
203	毛利元清打渡状写	天正 11 年 2 月 14 日	(毛利) 元清	福原大和守 (就次)	桂次郎左衛門清貞 21	2	
204	毛利元清打渡状写	天正 17 年 10 月 6 日	(毛利) 元清	福原大和守 (就次)	桂次郎左衛門清貞 22	2	
205	毛利元清打渡状写	天正 5 年 12 月 5 日	(毛利) 元清	福原右京亮	桂次郎左衛門清貞 23	2	
206	毛利元清知行宛行状写	元龜 3 年閏正月 24 日	(毛利) 元清	香川平兵衛尉	香川九郎右衛門 1	2	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
207	藤原相々連知行打渡状写	大永 8 年 7 月 23 日	藤原相々連	伊佐千菊丸	片山吉太夫 1	2	
208	毛利輝元一字書出写	永禄 13 年 8 月 7 日	(毛利) 輝元	伊佐彦七	片山吉太夫 2	2	
209	毛利輝元仮名書出写	慶長 4 年卯月 2 日	(毛利) 輝元	片山真藏	片山吉太夫 3	2	
210	佐々木義綱申状写	貞治 3 年 3 月 日	(佐々木義綱)		村上市左衛門正勝 1	3	
211	足利義詮カ下文写	貞治 3 年 3 月 26 日	(足利義詮カ)	佐々木佐渡守義綱	村上市左衛門正勝 2	3	
212	室町将軍家御教書写	応安 5 年 6 月 25 日	武藏守 (細川頼之)	佐々木佐渡守 (義綱カ)	村上市左衛門正勝 3	3	
213	某宛行状写	寛正 6 年 12 月 19 日		佐々木古志新兵衛尉 (有綱カ)	村上市左衛門正勝 4	3	
214	某安堵状写	文明 7 年 10 月 15 日		佐々木古志三郎兵衛尉 (吉綱カ)	村上市左衛門正勝 5	3	
215	某安信書下写	文亀 3 年 12 月 4 日	安信	左衛門大夫	村上市左衛門正勝 6	3	
216	源広頼書状写	12 月 18 日	源広頼	小早川左衛門佐 (隆景)	村上市左衛門正勝 7	3	
217	大内義隆書状写	6 月 2 日	(大内) 義隆	古志佐渡守 (豊清カ)	村上市左衛門正勝 8	3	
218	毛利元就書状写	享禄 2 年 5 月 3 日	(毛利) 元就	坪井源六	村井八左衛門尉元良 1	3	
219	毛利輝元宛行状写	元亀 4 年卯月 10 日	(毛利) 輝元	坪井鶴法士 (村井清房)	村井八左衛門尉元良 2	3	
220	毛利元清書状写	8 月 9 日	(毛利) 元清	坪井与三衛門 (村井清房)	村井八左衛門尉元良 3	3	
221	椋梨盛平知行宛行状写	6 月 3 日	(椋梨) 盛平	むくなし才法師	椋梨五郎兵衛清親 1	3	「椋梨」 10
222	椋梨弘平書下	永禄 3 年 7 月 4 日	(椋梨) 弘平	(椋梨) 又九郎	椋梨五郎兵衛清親 2	3	「椋梨」 5
223	毛利元就書状写	霜月 15 日	(毛利) 元就	椋梨上総介 (清平)	椋梨五郎兵衛清親 3	3	「椋梨」 11
224	毛利元就・同隆元連署預々状写	永禄 3 年 10 月 10 日	(毛利) 隆元・(毛利) 元就	椋梨又九郎	椋梨五郎兵衛清親 4	3	「椋梨」 6
225	小早川隆景感状写	天文 22 年 8 月 2 日	(小早川) 隆景	椋梨又九郎	椋梨五郎兵衛清親 5	3	「椋梨」 1
226	小早川隆景感状写	天文 24 年 4 月 28 日	(小早川) 隆景	椋梨又九郎	椋梨五郎兵衛清親 6	3	「椋梨」 4
227	毛利元清知行宛行状写	天正 16 年 7 月 6 日	(毛利) 元清	椋梨上総介 (清平)	椋梨五郎兵衛清親 7	3	「椋梨」 7
228	児玉就忠書状	7 月 18 日	(児玉) 就忠	上州 (椋梨清平)	椋梨五郎兵衛清親 8	3	「椋梨」 12
229	桂就延書状写	12 月 4 日	(桂) 就延	椋梨又九郎	椋梨五郎兵衛清親 9	3	原本個人蔵
230	毛利秀元黒印状写	慶長 4 年 11 月 13 日	(毛利秀元)	村野三左衛門尉 (兼仲)	村野庄左衛門保連 (連カ) 1	3	
231	小早川隆景書状写	3 月 11 日	(小早川) 隆景	宗近右衛門	宗近友庵 1	3	
232	小早川隆景書状写	6 月 5 日	(小早川) 隆景		宗近友庵 2	3	
233	小早川隆景書状写	7 月 16 日	(小早川) 隆景	宗近右衛門尉	宗近友庵 3	3	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
234	吉川元春・小早川隆景連署書状写	9月17日	(小早川) 左衛門佐隆景・(吉川) 駿河守元春	杉豊後守(連緒)	宗近友庵4	3	
235	吉川元春書状写	9月6日	(吉川) 駿河守元春	(小早川) 隆景	宗近友庵5	3	
236	某通等々書状写	8月5日	通等々	宗近右衛門尉	宗近友庵6	3	
237	小早川隆景書状写	7月16日	(小早川) 隆景	宗近右衛門尉	宗近友庵7	3	
238	小早川隆景書状写	3月1日	(小早川) 隆景	(高又兵)	宗近友庵8	3	
239	毛利秀元書状写	慶長5年9月23日	(毛利秀元)	内藤四郎右衛門	宗近友庵9	3	「宗近」1(『山果4』)
240	毛利秀元黒印状写	慶長4年10月28日	(毛利秀元)	転五郎右衛門(長良)	転五郎右衛門長次1	3	
241	毛利秀元重臣連署連書写	慶長4年11月21日	西孫兵衛(元由)・上里藤右衛門・西以節(清房)・福原大炊頭・安戸善兵衛・い(伊)秩采女正(元処)	宇多田五郎右衛門(長良)	転五郎右衛門長次2	3	
242	毛利秀元書状写	慶長4年12月2日	(毛利秀元)	転五郎右衛門(長良)	転五郎右衛門長次3	3	
243	毛利元清加冠状写	文禄5年5月8日	(毛利) 元清	碓井七兵衛	碓井権右衛門忠利1	3	
244	毛利元清書状写	2月29日	(毛利) 元清	(碓井) 盛侃	碓井権右衛門忠利2	3	
245	毛利秀元書状写	正月15日	(毛利) 秀元	福太・柳庵・内市(内藤方安カ)・(碓井) 盛侃・田惣右坪弥兵	碓井権右衛門忠利3	3	
246	毛利元就書状写	弘治2年12月15日	(毛利) 元就	上里宗右衛門	井上次郎左衛門忠辰1	3	
247	毛利元就書状写	12月24日	(毛利) 元就	上里宗右衛門	井上次郎左衛門忠辰2	3	
248	毛利隆元書状写	3月25日	(毛利) 隆元	上里宗右衛門	井上次郎左衛門忠辰3	3	
249	吉川元春書状写	6月10日	(吉川) 駿河守元春	上里肥前守	井上次郎左衛門忠辰4	3	
250	小早川隆景書状写	正月23日	(小早川) 隆景	上里宗右衛門	井上次郎左衛門忠辰5	3	
251	毛利輝元書状写	7月3日	(毛利) 輝元	上里肥前守	井上次郎左衛門忠辰6	3	
252	毛利輝元書状写	卯月16日	(毛利) 輝元	上里肥前守	井上次郎左衛門忠辰7	3	
253	毛利輝元書状写	11月6日	(毛利) 輝元	上里肥前守	井上次郎左衛門忠辰8	3	
254	毛利元清書状写	8月10日	(毛利) 元清		井上次郎左衛門忠辰9	3	
255	毛利元清書状写	6月15日	(毛利) 元清	井藏(井上内藏丞)	井上次郎左衛門忠辰10	3	
256	毛利元清書状写	2月29日	(毛利) 元清	井藏(井上内藏丞)	井上次郎左衛門忠辰11	3	
257	毛利元清書状写	6月21日	(毛利) 元清	内市(方安)・西二左(清房)	井上次郎左衛門忠辰12	3	
258	毛利元清書状写	9月15日	(毛利) もと清	おつゝまね	井上次郎左衛門忠辰13	3	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
259	毛利元清書状写	2月20 ヲ日	(毛利) もと清	いくらうち (井内蔵内)	井上次郎左衛門忠辰 14	3	
260	毛利元清書状写	9月16 日	(毛利) もと清	いくらうち (井内蔵内)	井上次郎左衛門忠辰 15	3	
261	毛利元清書状写		(毛利) もと清	こさい少	井上次郎左衛門忠辰 16	3	
262	毛利元清書状写	6月20 日	(毛利) もと清	井上内蔵丞うち (内)	井上次郎左衛門忠辰 17	3	
263	毛利元清書状写	3月1日	(毛利) もと清	井上うち (内)	井上次郎左衛門忠辰 18	3	
264	毛利元清書状写	6月25 日	(毛利) もと清	井くらうち (内蔵内)	井上次郎左衛門忠辰 19	3	
265	毛利元清知行打渡状写	元亀 3年2月9 日	(毛利) 元清	井上内蔵丞	井上次郎左衛門忠辰 20	3	
266	毛利元清知行打渡状写	元亀 3年8月28 日	(毛利) 元清	井上内蔵丞	井上次郎左衛門忠辰 21	3	
267	毛利元清知行打渡状写	天正 5年12月5 日	(毛利) 元清		井上次郎左衛門忠辰 22	3	
268	毛利元清知行打渡状写	天正 17年10月6 日	(毛利) 元清	井上内蔵丞	井上次郎左衛門忠辰 23	3	
269	毛利元清カ知行宛行状写	天正 20年正月25 日	(毛利元清カ)		井上次郎左衛門忠辰 24	3	
270	毛利元清カ知行宛行状写	天正 20年正月25 日	(毛利元清カ)		井上次郎左衛門忠辰 25	3	袖に印判ありという
271	毛利元清カ知行宛行状写	天正 20年正月25 日	(毛利元清カ)		井上次郎左衛門忠辰 26	3	
272	毛利元清知行打渡状写	天正 20年2月23 日	(毛利) 元清	井蔵 (井上内蔵丞)	井上次郎左衛門忠辰 27	3	
273	毛利元清カ知行打渡坪付写		(毛利元清カ)		井上次郎左衛門忠辰 28	3	
274	毛利宮松丸 (秀元) 加冠状写	天正 17年11月10 日	宮松 (毛利秀元)	井上余平 (元信)	井上与三兵衛豊忠 1	3	
275	毛利秀元一字書出写	慶長元年11月13 日	(毛利秀元)	井上孫四郎 (元信)	井上与三兵衛豊忠 2	3	
276	毛利秀元黒印知行宛行状写	慶長 4年10月28 日	(毛利秀元)	井上孫四郎 (元信)	井上与三兵衛豊忠 3	3	
277	毛利元就感状写	天文 9年9月13 日	(毛利) 元就	井上助四郎	井上小左衛門宜定 1	3	
278	毛利元就感状写	天文 10年正月14 日	(毛利) 元就	井上助四郎	井上小左衛門宜定 2	3	
279	毛利元就知行宛行状写	天文 11年3月3 日	(毛利) 元就	井上助四郎	井上小左衛門宜定 3	3	
280	毛利元就知行宛行状写	天文 11年3月3 日	(毛利) 元就	井上助四郎	井上小左衛門宜定 4	3	
281	小早川隆景知行宛行状写	天文 20年6月16 日	(小早川) 隆景	井上左馬助	井上小左衛門宜定 5	3	
282	毛利輝元加冠状写	天正 5年6月28 日	右馬頭 (毛利輝元)	井上弥七郎	井上源右衛門正定 1	3	
283	毛利輝元書状写	天正 8年3月22 日	(毛利) 輝元	神田惣四郎 (元忠)	井上源右衛門正定 2	3	
284	毛利輝元仮名書出写	天正 13年2月6 日	(毛利) 輝元	井上弥七郎	井上源右衛門正定 3	3	
285	毛利輝元書状写	6月29 日	(毛利) 輝元	井弥七 (井上弥七郎)	井上源右衛門正定 4	3	
286	毛利輝元書状写	8月28 日	(毛利) 輝元	神惣四 (神田元忠)	井上源右衛門正定 5	3	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
287	毛利元就・同輝元連署書状写	12月13日	(毛利) 輝元・(毛利) 元就	迫田善兵衛(元光)	井上甚左衛門清教 1	3	「迫田」 2 (『下V』)
288	毛利元就書状写	6月28日	(毛利) 右馬頭元就	(小早川) 隆景・(吉川) 元春	井上甚左衛門清教 2	3	
289	毛利隆元カ感状写	永禄4年12月18日	(毛利カ) 隆景(元カ)	迫田善兵衛尉(元光)	井上甚左衛門清教 3	3	「迫田」 1 (『下V』)
290	毛利輝元書状写	8月21日	(毛利) 輝元	市川伊豆守(経好)	井上甚左衛門清教 4	3	
291	毛利輝元受領書出写	天正4年5月18日	(毛利) 輝元	迫田善兵衛(元光)	井上甚左衛門清教 5	3	「迫田」 3 (『下V』)
292	毛利輝元書状写	卯月3日	(毛利) 輝元	内藤左衛門太夫(隆春)	井上甚左衛門清教 6	3	「迫田」 4 (『下V』)
293	毛利輝元書状写	5月18日	(毛利) 輝元	国司右京亮(元武)・児玉三郎右衛門(元良)	井上甚左衛門清教 7	3	「迫田」 6 (『下V』)
294	毛利輝元書状写	10月10日	(毛利) 輝元	迫田筑前守(元光)	井上甚左衛門清教 8	3	「迫田」 5 (『下V』)
295	毛利輝元預ケ状写	天正6年12月12日	(毛利) 輝元	迫田筑前守(元光)	井上甚左衛門清教 9	3	
296	毛利輝元書状写	卯月15(5カ)日	(毛利) 右馬頭輝元	(内藤) 隆春	井上甚左衛門清教 10	3	「迫田」 7 (『下V』)
297	毛利輝元加冠状写	天正15年7月7日	(毛利) 輝元	迫田新四郎(元長)	井上甚左衛門清教 11	3	
298	毛利元清加冠状写	文禄5年正月8日	(毛利) 元清	井上吉藏(清光)	井上甚左衛門清教 12	3	「迫田」 22 (『下V』)
299	小早川隆景書状写	3月8日	(小早川) 隆景	長筑(長井親房)・児周(児玉就方)・国右(国司元武)	井上甚左衛門清教 13	3	「迫田」 8 (『下V』)
300	小早川隆景書状写	8月12(2カ)日	(小早川) 隆景	国司右京亮(元武)・児玉三郎右衛門(元良)・長井右衛門太夫(元親)	井上甚左衛門清教 14	3	「迫田」 9 (『下V』)
301	小早川隆景書状写	8月13日	(小早川) 隆景	仁保右衛門太夫(隆感)	井上甚左衛門清教 15	3	
302	小早川隆景書状写	2月4日	(小早川) 隆景	迫筑(迫田元長)	井上甚左衛門清教 16	3	「迫田」 10 (『下V』)
303	小早川隆景書状写	10月29日	(小早川) 隆景	国右(国司元武)	井上甚左衛門清教 17	3	「迫田」 13 (『下V』)
304	小早川隆景書状写	9月11日	(小早川) 隆景	妙寿寺(周泉)・国右(国司元武)	井上甚左衛門清教 18	3	「迫田」 12 (『下V』)
305	小早川隆景書状写	10月28日	(小早川) 隆景	妙寿寺(周泉)	井上甚左衛門清教 19	3	「迫田」 16 (『下V』)
306	小早川隆景書状写	2月10日	(小早川) 左衛隆景	迫筑(迫田元光)	井上甚左衛門清教 20	3	「迫田」 11 (『下V』)
307	毛利秀元加冠状	12月晦日	(毛利秀元)	井上吉藏	井上甚左衛門清教 21	3	
308	毛利秀元黒印同重臣連署書状写	3月17日	(毛利秀元)／西次郎入以節(清房)・西孫兵衛元由	井上茂右衛門(清光)	井上甚左衛門清教 22	3	「迫田」 29 (『下V』)
309	西元由書状写	3月18日	西孫兵(元由)	井上茂右衛門(清光)	井上甚左衛門清教 24	3	「迫田」 30 (『下V』)
310	毛利元清知行打渡状写	天正15年11月8日	(毛利) 元清	尾崎新五郎	尾崎彦右衛門正光 1	3	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
311	毛利元清仮名書出写	天正 6 年 11 月 12 日	(毛利) 元清	尾崎新五郎	尾崎彦右衛門正光 2	3	
312	毛利秀元感状写	慶長 5 年 8 月 25 日	(毛利) 秀元	尾崎四郎右衛門	尾崎彦右衛門正光 3	3	
313	毛利秀元黒印知行宛行状写	慶長 4 年 10 月 28 日	(毛利秀元)	尾崎助兵衛	尾崎合助正張 1	3	
314	毛利秀元感状写	慶長 5 年 8 月 25 日	(毛利秀元)	尾崎合介	尾崎合助正張 2	3	
315	毛利元清仮名書出写	文禄 3 年正月 8 日	(毛利) 元清	尾崎源五郎	尾崎三十郎 1	3	
316	毛利元清一字書出写	天正 6 年 10 月 25 日	(毛利元清)	尾崎源五郎	尾崎三十郎 2	3	
317	毛利元就安堵状写	永禄 13 年 8 月 8 日	(毛利) 元就	熊野伊賀守(就保)	熊野太郎右衛門親保・熊野次郎兵衛保守・熊野甚五左衛門保貞・熊野才右衛門治紀 1	3	
318	毛利元就袖判付写	天文 21 年 4 月 21 日	(毛利元就)	(熊野就保)	熊野太郎右衛門親保・熊野次郎兵衛保守・熊野甚五左衛門保貞・熊野才右衛門治紀 2	3	
319	毛利輝元安堵状写	天正 7 年正月 20 日	(毛利) 輝元	熊野縫殿助(輝保カ)	熊野太郎右衛門親保・熊野次郎兵衛保守・熊野甚五左衛門保貞・熊野才右衛門治紀 3	3	
320	毛利元清書状写	正月 8 日	(毛利) 元清	熊野縫殿助(輝保カ)	熊野太郎右衛門親保・熊野次郎兵衛保守・熊野甚五左衛門保貞・熊野才右衛門治紀 4	3	
321	毛利元清書状写	正月 5 日	(毛利) 治太元清	(天野カ) 元政	熊野太郎右衛門親保・熊野次郎兵衛保守・熊野甚五左衛門保貞・熊野才右衛門治紀 5	3	
322	毛利秀元黒印状写	慶長 4 年 11 月 13 日	(毛利秀元)	熊野清五郎	熊野太郎右衛門親保・熊野次郎兵衛保守・熊野甚五左衛門保貞・熊野才右衛門治紀 6	3	
323	毛利元清書状写	3 月 8 日	(毛利) 元清	熊野縫殿助(輝保カ)	熊野太郎右衛門親保・熊野次郎兵衛保守・熊野甚五左衛門保貞・熊野才右衛門治紀 8	3	
324	毛利元就知行宛行状写	天文 20 年 12 月 21 日	(毛利) 元就	熊野左馬允	熊野角右衛門 1	3	
325	毛利元就知行宛行状写	永禄 12 年 12 月 13 日	(毛利) 元就	小田縫殿助	熊野角右衛門 2	3	
326	毛利元就知行宛行状写	永禄 12 年極月 20 日	(毛利) 元就	小田縫殿助	熊野角右衛門 3	3	
327	毛利輝元書状写	元龜 2 年 8 月 10 日	(毛利) 輝元	小田縫殿助	熊野角右衛門 4	3	
328	毛利元就書状写	正月 17 日	(毛利) 元就	小田縫殿助	熊野角右衛門 5	3	
329	毛利元就書状写	正月 20 日	(毛利) 元就	(吉川) 元春	熊野角右衛門 6	3	
330	小早川隆景書状写	3 月 24 日	(小早川) 隆景	見玉三郎右衛門	熊野角右衛門 7	3	

番号	名称	年月日	差出	宛所	分類	巻	備考
331	毛利輝元加冠状写	天正12年正月16日	(毛利) 輝元	熊谷小四郎(就直)	熊谷七郎右衛門邦辰1	3	
332	毛利輝元安堵状写	慶長2年卯月14日	(毛利) 輝元	熊谷藤左衛門(小田元辰)	熊谷七郎右衛門邦辰2	3	
333	毛利輝元書状写	9月2日	(毛利) 輝元	(空戸カ) 隆秀	熊谷七郎右衛門邦辰3	3	
334	毛利興元知行宛行状写	大永2年12月3日	(毛利) 興元	国弘太郎次郎	国弘久右衛門勝夏1	3	
335	小早川隆景安堵状写	天文21年5月7日	(小早川) 隆景	国弘左京亮	国弘久右衛門勝夏2	3	
336	小早川隆景感状写	弘治2年5月2日	(小早川) 隆景	国弘太郎次郎	国弘久右衛門勝夏3	3	

【凡例】

- ・本目録は、下関市立歴史博物館（以下、当館）及び山口県文書館に所蔵される「天和家状」に収録される中世文書を目録化したものである。なお、収録年代は、上限を応徳3年（1086）、下限を慶長5年（1600）とした。
- ・目録化にあたっては、「天和家状」内の各家の配列順にならない当館所蔵の冊子2冊と山口県文書館所蔵の冊子1冊をいちは順に配列し、便宜的に山口県文書館所蔵の冊子を1巻、当館所蔵の冊子を配列順に2巻、3巻とした。
- ・目録には、通番と名称、発給年月日、差出、宛所、分類、巻数を載せた。このうち、分類は「天和家状」に載せられた各家の当主の名を載せ、収録順に番号を付した。
- ・差出については、日下→奥の順で示した。
- ・判読が困難な文字については●で示した。
- ・校訂者の註は〔 〕、または（ ）で括った。このうち〔 〕は文字を正す場合に用い、（ ）は説明注に用いた。
- ・異本の表記を示すときは、(○イ)とした。
- ・字体については原則として常用漢字を使用し、異体字等は原則として正字に改めた。また変体仮名については、できる限り通用の仮名に直した。
- ・「天和家状」収録文書のうち、原本や写本がすでに活字化されているものは、備考欄に示した。各略称は次のとおりである。

（例）「花岡八幡宮文書」52『山口県史 史料編 中世2』→「花岡」52（『山口県21』）、「迫田家文書」1『下関市史 資料編Ⅴ』→「迫田」1（『下Ⅴ』）、「萩藩関関録」巻132飯田七郎右衛門1→『関』132飯田1、「長府棕梨家文書」1（田中洋一「長府棕梨家文書について」『山口県地方史研究』113、2015年）→「棕梨」1

櫻山招魂場の成立とその変遷

松田 和也
小林 善也

はじめに

下関市上新地町に所在する櫻山神社は、奇兵隊士をはじめとする国事殉難者などを慰霊し、祭神として祀る崇敬神社である。社殿の背後には、祭神として祀られる人物の神霊碑三九一基が配列されている(1)。なお、この三九一人は、後述のとおり同社に祀られている全ての祭神ではない。櫻山神社の歴史は、元治元年(一八六四)五月十九日に創建された櫻山招魂場に始まる。

日本初の招魂場として知られる櫻山招魂場については、その成立背景などに関する研究が蓄積されている(2)。加藤隆久氏によれば、そもそも招魂場で行われる祭祀である招魂祭は、文久二年(一八六二)、京都霊山の霊明舎において、在京諸藩有志など六十六名によって初めて執り行われたといわれる(3)。萩藩からは諸藩の中で最多の十二名の藩士が参加しており、櫻山招魂場の成立を考えるうえで示唆的である。翌文久三年(一八六三)には、京都祇園神社(八坂神社)境内において、小祠を建て、祭神明記の下で招魂祭が執り行われており、祭祀が発展していく様子がうかがえる。

このような招魂祭発展の根本には、幕末における尊王攘夷思想があった。津田勉氏は、特に萩藩においては尊王攘夷を祈願した楠公祭が盛んに行われており、これが国事殉難者を祀る祭祀へと発展していく過程を明らかにしている(4)。このような萩藩における国事殉難者を祀る祭祀の発展と、京都において始まった招魂祭が、最終的に櫻山招魂場の創建に繋がることとなる。



写真1 現在の櫻山神社(2014年12月15日永山伸一氏撮影)

また、国学への造詣が深く神道への信仰が厚い白石正一郎の存在も櫻山招魂場創建を後押ししたとされている(5)。

以上のように、櫻山招魂場成立前後に関しては、一定の研究成果が蓄積されているものの、その後の変遷については不明な部分が多い。特に国事殉難者を祀る櫻山招魂場のシンボルともいえる神霊碑については、どのような過程を経て現在の姿になったのかほとんど明らかにされていない。本稿では櫻山招魂場の成立から現在に至るまでの変遷について、考察を行いたい。

なお、本稿の文責は、はじめに3・おわりにを松田、4を小林が分掌し、全体の編集は二者協議のもとにおこなった。

1. 櫻山招魂場の成立

櫻山招魂場は、奇兵隊が中心となって造営された。元治元年(一八六四)一月から二月にかけて、萩藩士久芳内記らとともに、奇兵隊士が招魂場の設置場所の検分に参加。そして同年二月上旬から、奇兵隊士が中心となって新地岡の原山での造営作業が開始され、同年五月十九日に招魂場が完成した(6)。

新地岡の原山が、招魂場設置場所として選定された理由は、関門海峡が攘夷の舞台となったことによるものである。文久二年(一八六二)に即今攘夷(破約攘夷)を藩論とした萩藩は、翌文久三年(一八六三)五月から関門海峡において外国船に対する攻撃を開始した。外国との交戦による戦死者を慰霊するために、関門海峡に近い場所に招魂場が必要だったのである。

なお、当時関門海峡沿いには、萩藩・長府藩・清末藩の領地が混在していた。海峡沿いの大部分を領有していたのは長府藩である。即今攘夷の中心となり、櫻山招魂場を造営した萩藩の領地は、新地という限られた地域であった。関門海峡に最も近い萩藩領である新地の中における適地が、岡の原山だった。

たのである。

このようにして成立した櫻山招魂場であるが、成立当時の姿を明確に伝える資料は、残念ながら遺されていない。慶応二年(一八六六)七月に出版された「桜山歌集」には、「その木かげをすか／＼しうはらひて、しるしの石たてならべにたる」という記述がみえる(7)。また、櫻山招魂場が成立した翌慶応元年(一八六五)八月に社殿が完成している(8)。そのため、当初の姿としては、山を開墾しただけの場所であった可能性(9)と、そこに神霊碑を並べただけの場所であった可能性が考えられる。

明治六年(一八七三)の段階で、櫻山招魂場は、社殿が建つ一反八畝の土地と、九反六畝の付属地から構成されていることが記録されている(10)。櫻山招魂場成立前後には、同地において奇兵隊などが軍事訓練を実施している(11)。軍事訓練は、大隊による発砲などをともなうものであることから、広大な付属地で実施された可能性が高い。また、「招魂場設置ノ由来及聞書」には、「招魂場開設ノ後、該地所内広キ所ヲ桜ノ馬場ト唱ヘタリシ」とあり、櫻山招魂場は、当初から大小二ヶ所の敷地で構成されていたものと考えられる。

『奇兵隊日記』(12)や「白石正一郎日記中摘要」(13)によると、完成当初の櫻山招魂場は「招魂場」「馬関招魂場」「新地招魂場」などと呼ばれており、特に定まった呼称がなかったことがうかがえる。文久二年(一八六二)に始まった招魂祭は、既にある神社の境内において執り行われてきた。櫻山招魂場は、招魂祭を執り行う専用の施設として初めて成立したものであり、他に類似の施設がなかったことから、単に「招魂場」などと呼ばれていたものと考えられる。

なお、招魂場開墾時、赤間関各所から桜が献納されており、先述のとおり招魂場の一部分は「桜の馬場」と称されるようになった(14)。これが後に「櫻

山」という呼称に変わり、明治七年（一八七四）五月、明治政府より社号の照会があった際に、正式に「櫻山」という社号が定まることとなる（15）。

2. 近代における櫻山招魂場の来歴

櫻山招魂場の成立以降、慶応年間から明治初年頃にかけて防長両国には次々と招魂場が創建された。大正七年（一九一八）の段階で、山口県内には二十二の招魂場が確認される（16）。しかし、明治四年（一八七二）に廃藩置県が施行されると、当初の設置者である藩を失った招魂場は、荒廃することとなる。そこで、翌明治五年（一八七二）、山口県内の招魂場の祭神は、一時的に全て櫻山招魂場に合祀された。その後、官費による招魂場管理が担保されると、合祀された祭神は、再び各招魂場に戻されることとなる（17）。

なお、現在の下関市貴船町にあった旭陵招魂場（田中招魂場）から合祀された報国隊士の祭神については、戻されることはなかった。報国隊は、長府藩によって組織された有志隊である。報国隊の祭神が戻されなかったのは、奇兵隊と報国隊が幕長戦争や戊辰戦争において行動を共にしていたことや、櫻山招魂場と旭陵招魂場が非常に近い場所にあったことが理由であるとされている（18）。

明治七年（一八七四）には、櫻山招魂社が正式な名称となったが、先述のように、櫻山招魂場成立当時、そこに社殿は存在しなかった。単に招魂祭を執り行うための場であったことから招魂場という呼称であった。翌年、社殿が創建されると、以降各地で成立していった招魂場は、社殿を伴うものが主流となり、神社としての形式が整っていくこととなる。その結果、当初の社殿を伴わない招魂場という呼称と、社殿を伴う招魂社という呼称が混在することとなったものと考えられる。

その後、明治十一年（一八七八）から翌年にかけて、社殿の改修と拝殿・

祭器庫・石段・敷石などの造営が行われ、櫻山招魂社の施設の整備が一段と進む（19）。明治三十四年（一九〇一）には、私祭招魂社と官費支出を認める官祭招魂社との区別が図られ、社名は下関市官祭招魂社となった（20）。しかし、長年にわたり公文書などに「櫻山」という呼称を使用してきたために運営に支障が生じることや、地元の人々にも「櫻山」という呼称が浸透していることなどから社名復旧の要望が出され、大正七年（一九一八）に官祭櫻山招魂社となった（21）。

昭和十四年（一九三九）には、内務省から全国の招魂社の名称を護国神社に改める通達が出され、櫻山護国神社となるが、戦後の昭和二十一年（一九四六）に櫻山神社に改められ、現在に至ることとなる（22）。

3. 神霊碑の変遷について

櫻山神社は、奇兵隊を中心とした国事殉難者らを神霊として祀っている。それを象徴するのが、社殿の背後に並ぶ神霊碑である。現在三九一基の神霊碑が建っているが、「官祭櫻山招魂社神霊簿」（23）によると、同社に祀られる祭神の数は、八二四柱である（神霊簿には八六五柱が記載されているが、四十一柱の重複がある）。つまり、神霊碑を建立することが祀られる要件ではなく、神霊碑のない祭神も存在するのである。

さて、元治元年（一八六四）に成立した櫻山招魂場において、神霊碑がいつどのように配置されたのかを明確にする資料は確認できないが、先に紹介した「桜山歌集」によれば、成立時に神霊碑に類するものが建てられていた可能性も考えられる。また、「白石正一郎日記中摘要」の明治元年（一八六八）十二月十一日条には「厚東次郎介より来書、招魂場木標石碑二相成二付、名前所書月日等委書付呉候様、頼来候」という記述がみえる。

これらを勘案すると、神霊碑は、元治元年の櫻山招魂場成立時、もしくは

成立後早い段階ですでに建てられていたとみられる。さらに、現在すべての神霊碑は石製であるが、当時木製のものが混在していたことがわかる。

なお、山口県熊毛郡田布施町に所在する麻郷神社には、現在も石製と木製の神霊碑が混在して遺っている。麻郷神社は、慶応二年（一八六六）、上関宰判内の戦没者を祀るために萩藩によって創建された惣田山招魂社を前身とする（24）。櫻山招魂場をはじめとする各地の招魂場には、当初木製の神霊碑も建てられており、その多くが石製に変わっていったのである。

「古谷道庵日乗」（25）の明治三年（一八七〇）四月二十二日条には、「招魂場に登る、桜樹垣列するも未だ大木ならず（中略）、死所皆碑に書し、側に其の所由を記す、一周して下る」という記述がみえる。現在櫻山神社に建つ神霊碑の多くは、正面に祭神の名前、右側面に亡くなった年月日や場所、死因などが刻まれている。この銘文のスタイルも明治初期の段階で確立されていた可能性が高い。

「明治六年 招魂場記録」（26）によると、櫻山招魂場の神霊碑は三百四十八基とされている。これが確認できるものとも古い時期の神霊碑の数である。次いで、明治十六年（一八八三）には、神霊碑の整備が実施された（27）。この際の整備前後の図面が遺されており、これが確認できる最も古い神霊碑の配置である。これによると、社殿と拝殿を取り囲むように配置されていた神霊碑【図1-1】が、社殿と拝殿を中心としたコの字型配置に変更されたことがわかる【図1-2】。このコの字型配置は、明治二十五年（一八九二）に出版された「馬関土産」の挿絵でも確認することができる。また、毛利家文庫（28）や、「馬関勝景写真帖」（29）には、コの字型配置の時期のものともみられる写真も遺されている。

明治四十年（一九〇七）に出版された「防長遺芳」には、神霊碑の写真が掲載されており、具体的な配置と銘文の一部が確認できる。現在、基壇入口



写真2 麻郷神社の木製神霊碑（2015年8月23日松田撮影）

の正面には、他のものより一段高い（基台が二段になっている）吉田松陰の神霊碑が建っている。そして、その両側には高杉晋作と久坂玄瑞の神霊碑が建つ。しかし、この段階では、吉田松陰の神霊碑は他のものと同じ高さ（基台が一段のみ）であることがわかる。また、その両側には高杉晋作と高橋忠信の神霊碑が建っており、配置の違いも確認できる。さらに高杉晋作については、現在の銘文は「高杉晋作春風 神霊」だが、この段階では「谷潜蔵春風 神霊」となっており、神霊碑自体が現在とは異なることがわかる。

明治四十年には、社殿の背後に基壇を築き、そこに神霊碑を整備している（30）。基壇に整備された神霊碑の姿は、絵葉書の写真で確認することができる（31）。

明治四十四年（一九一）には、さらなる神霊碑の整備が実施された（32）。整備前後の図面が遺されており、基壇が拡張されるとともに、神霊碑の列の間の通路幅が拡大されていることなどがわかる【図2-1】【図2-2】。よって、これにともなう配置変更も生じたものとみられる。しかし、現在吉田松陰の神霊碑が建つ基壇入口の正面には、神霊碑が据えられていないため、この段階においても現在の配置とは異なるものであることがわかる。

大正二年（一九一三）に十六基の神霊碑の追加を経て（33）、昭和十一年（一九三六）十一月時点の神霊碑の配置を記録した「桜山神社奉祀者氏名表」には、基壇入口の正面に吉田松陰の神霊碑が建っており、ほぼ現在のものと同じ配置が紹介されている（34）。さらに、昭和十四年（一九三九）四月十八日下関要塞司令部許可の櫻山招魂社絵葉書（35）からは、吉田松陰の神霊碑が他のものより一段高いことも確認できる。よって、現在の配置の大枠は明治四十四年から昭和十一年の間に成立したものである。

昭和三十四年（一九五九）に二十三基の神霊碑が追加され、神霊碑の数は三百九十一基となる（36）。さらにその後、重複分の五基が除かれ、現在の

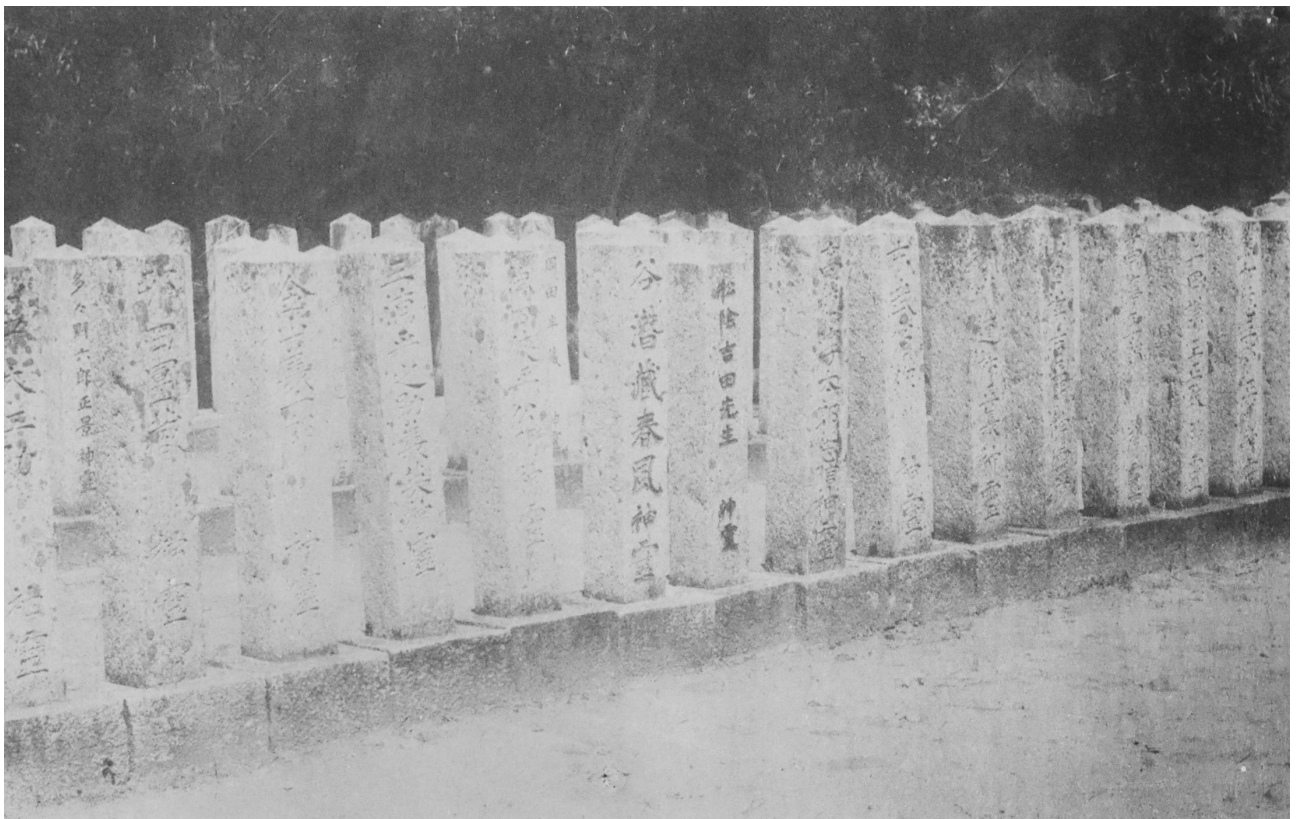


写真3 「防長遺芳」（個人蔵・下関市立歴史博物館寄託）に所収される神霊碑写真

三百九十一基となった【図3】。

4. 神霊碑について

以上のように変遷し、現在の配置形態となった櫻山招魂場であるが、現在の神霊碑を観察するとその形態によりいくつかの類型に区分することができ。その違いは、神霊碑の製作時期の新旧関係を明らかにする手がかりとなる可能性があるため、ここで素描しておきたい。

現在、櫻山招魂場に配置されている神霊碑は三九一基である。これらすべての碑文判読【表4】をおこなうことに併せて、【図4】のa～fのとおりに現地で計測を行い、石碑形態の確認を行った(37)。その結果に基づき、計測した神霊碑の法量傾向を示すと次のとおりとなる。

総高最高値は一一三センチに対して、総高最低値は九六・五センチであることから、最高値と最低値ではおよそ一六・五センチの差が認められ、総高平均値は一〇六・八センチとなる。各神霊碑の詳細は【表4】のとおりに。なお、吉田松陰神霊碑の総高は一二四・七センチである。神霊碑の形態は、【図4】に示すとおり典型的な神道式の方柱で、標柱頂部の形態によりA・B・Cの三つの型式に分類できる(38)。加えて、神霊碑の石材については、基本的に花崗岩が使用されその色調により橙色系、黄色系、白色系、緑色系の四系統を観察できる。この違いは石材産地の違いを示唆するものであろう。

このような神霊碑形態と石材の表面観察による色調差異に基づいて、現在の神霊碑の配置状況を俯瞰すると【図5】のようになる。その上で、神霊碑の型式と石材の色調にどのような相関性があるのかを【表1】のとおりに整理すると、次の四点を指摘できる。

- ・神霊碑の主体型式はA型式である。
- ・A型式は橙色系及び緑色系と相関する傾向にある。

・B型式は黄色系と相関する傾向が強い。

・C型式は黄色系・白色系・緑色系と相関しない傾向にある。

このような傾向を第3章で明らかにした神霊碑の配置変遷を踏まえ、例えば昭和三四年(一九五九)の整備に照らしてみると、史料で明らかな昭和三四年に追加された二三基の神霊碑が極めて規則的に配置され、その型式もすべて緑色系A型式であることが把握できる。このことは、昭和三四年の整備前の配置状況では、縦列の通路が確保されていた可能性が高いことを浮き彫りにするとともに、神霊碑型式が一定の製作時期を示す証左となり得ることを示すものである。神霊碑の型式学的な分析は、神霊碑自体の設置時期やその変遷を一層明らかにするうえで欠かせない作業となろう。また、今回は触れることができなかったが、神霊碑に陰刻される碑文の筆致(彫り方)についてもいくつかの類型に分類できる可能性が高く、これに関しても製作時期や製作先を検討する重要な手がかりになるものと考えられる。したがって、神霊碑の型式細分、石材種別とその産地同定、碑文の筆致類型などについて検討を加えることで各属性を抽出し、それら属性の相関性に基づいた神霊碑型式を明らかにすることができれば、史料からは窺い知れない現存する神霊碑の新旧関係を明らかにできる可能性が高い。

なお、これら神霊碑における隊士の所属や殉職した事変の内訳を『櫻山顕光録』を参考にと表2及び表3のとおりと。小倉戦・戊辰戦・北越戦で戦死した奇兵隊士と報国隊士で多数となるのは当然ではあるが、少数ながらその他の隊や不明の者も含まれることは留意する必要がある。

おわりに

本稿では、櫻山招魂場について、その成立背景について考察するとともに、従来の研究では触れられることの少なかった近代以降の変遷を分析した。

櫻山招魂場は、招魂祭を執り行うための初めての施設として、攘夷戦の舞台となった関門海峡に最も近い萩藩領である新地に成立した。招魂祭を執り行うための場として初めて成立したものであったことから、当初は単に「招魂場」などと呼ばれ、社殿なども備わっていなかった。その後成立していった招魂場は、社殿などを備えた形が主流となり、「招魂社」という呼称が一般的となっていた。

櫻山招魂場も、明治初期までには、社殿や神霊碑などといった基本的な体裁が整えられている。同社のシンボルである神霊碑は、明治時代以降整備が繰り返され、碑の交換や配置の変更が重ねられた。現在の姿の大枠が定まったのは、明治四十四年（一九一一）から昭和十一年（一九三六）の間である。

幕末に誕生した招魂社は、近代に入ると国家の管理・保護の側面を強めることとなる。そのため、櫻山招魂社の変遷には、政治・社会状況の変化が反映されているものと考えられる。

例えば、元々他のものと同じ高さで建てられ、特に強調されていなかった吉田松陰の神霊碑に変化がみられるのは、明治四十四年から昭和十一年の間である。松陰は、明治三十七年（一九〇四）に初めて修身の国定教科書に紹介された。その後、「忠君愛国」の象徴として、松陰の記述は増大していく（39）。櫻山招魂社における神霊碑の変化は、このような松陰顕彰運動の高まりと関連付けて考えることができる。

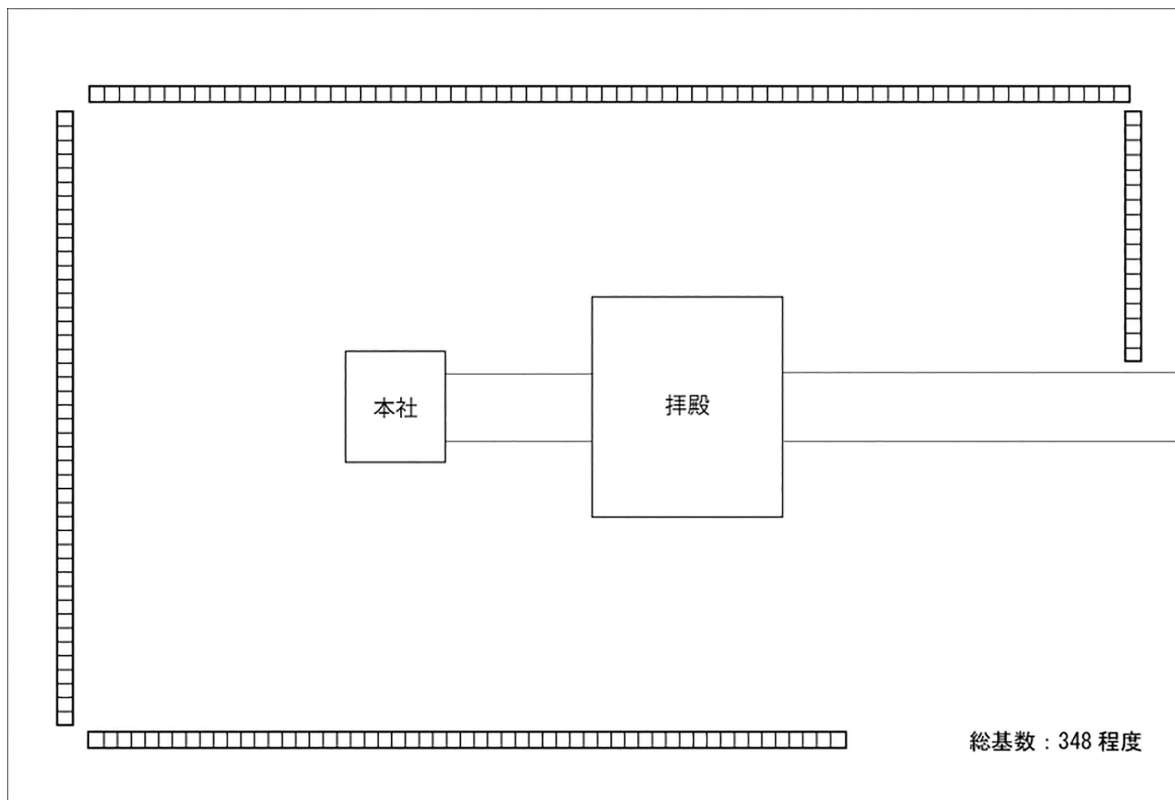
この他にも、櫻山招魂社の変遷には、様々な政治的・社会的要因があったことが想定される。各時代における変遷と、その背景について更なる検討を深めていくことを今後の課題として擲筆としたい。

註

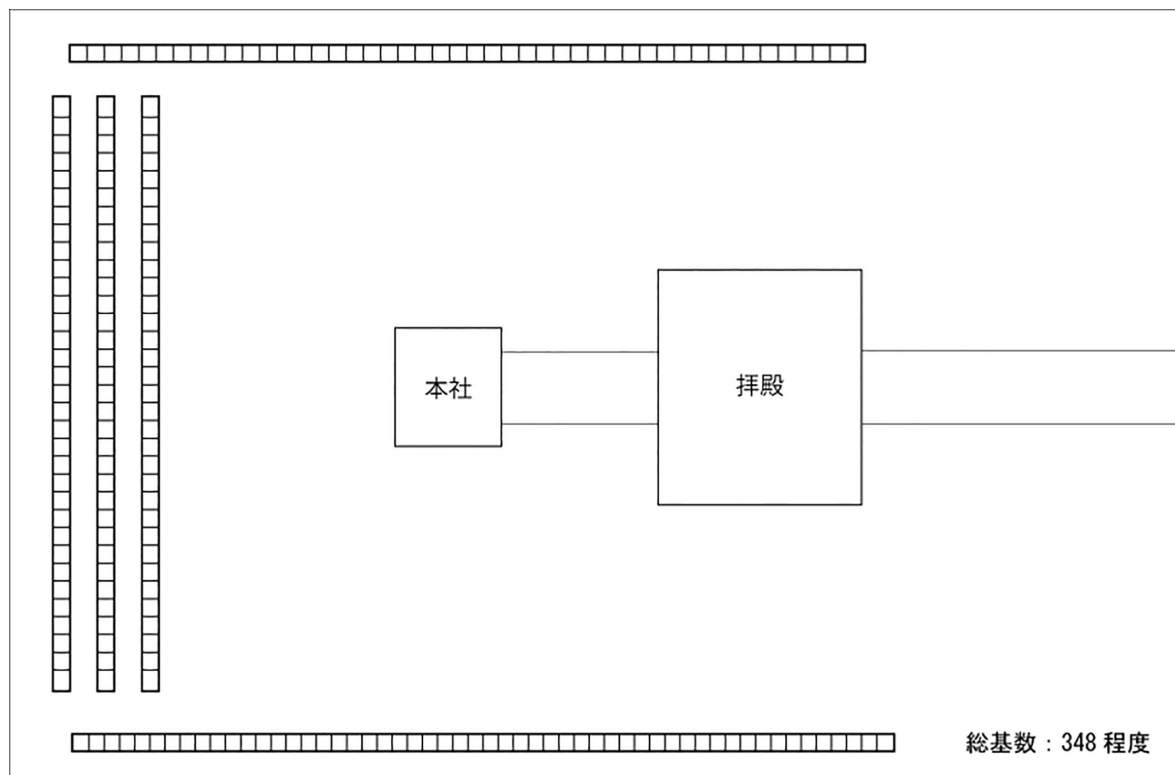
- (1) 碑の呼称については、墓・招魂碑・石碑など様々な呼称があるが、本稿では神霊碑で統一する。
- (2) 津田勉「高杉晋作の神葬祭―長州藩に於ける水戸の自葬―」（『山口県神道史研究』一三号、二〇〇一年）、津田勉「幕末長州における招魂社の発生」（『山口県神道史研究』二二号、二〇〇九年）、津田勉「白石正一郎の神道信仰―桜山招魂社創建を巡って―」（『山口県神道史研究』一四号、二〇一二年）、武田秀章「馬関戦争と下関招魂場の形成」（『霊魂・慰霊・顕彰―死者への記憶装置―』二〇一〇年）など。
- (3) 加藤隆久「津和野教学と招魂社」（『神道津和野教学の研究』、一九八五年）
- (4) 津田勉「幕末長州における招魂社の発生」（前掲註2）
- (5) 津田勉「白石正一郎の神道信仰―桜山招魂社創建を巡って―」（前掲註2）
- (6) 『定本 奇兵隊日記』（マツノ書店、一九九八年）
- (7) 「さくらやま歌集」（下関市立歴史博物館蔵）
- (8) 「招魂場設置ノ由来及聞書」（櫻山神社蔵）。同史料は、櫻山招魂場の創建やその後の管理に関わった南野一郎の調査などを基に、櫻山招魂社の由来をまとめたもの。大正時代初期に成立したとみられる。なお、櫻山神社『復刻 櫻山光顯録』（櫻山神社、二〇〇五年）に全文が掲載されている。
- (9) 文久二年（一八六二）の京都における初めての招魂祭は、社などを建てることなく執り行われている。そのため、招魂祭を執り行うための招魂場は、山を開墾しただけの場であっても成立するものと考えられる。
- (10) 「招魂場記録」（山口県文書館蔵）。なお、付属地は、現在の下関短期大学の敷地から高杉晋作療養の地周辺にかけての一带にあたる。また、厳島神社（下関市上新地町）の鳥居横が招魂場の入口であった。
- (11) 前掲註6
- (12) 前掲註6
- (13) 下関市教育委員会『白石家文書』（国書刊行会、一九八一年）
- (14) 前掲註8
- (15) 前掲註8

- (16) 時山弥八『もりのしげり』（赤間関書房、一九六九年復刻再版）
- (17) 前掲註8
- (18) 前掲註8
- (19) 前掲註8、「招魂場事務」（山口県文書館蔵）
- (20) 「官祭招魂社官修墳墓」（山口県文書館蔵）
- (21) 前掲註20
- (22) 『山口県神社誌』（山口県神社庁、一九九八年）
- (23) 櫻山神社蔵
- (24) 津田勉「県内二十二の官祭招魂社」（『山口県神道史研究』二十一号、二〇〇九年）
- (25) 山口県『山口県史 史料編 幕末維新7』（山口県、二〇一四年）
- (26) 前掲註10
- (27) 「招魂場事務」（山口県文書館蔵）
- (28) 「桜山官祭招魂社」（山口県文書館蔵）
- (29) 宮内庁ホームページ、書陵部所蔵資料目録・画像公開システム
- (30) 「官祭招魂社及官修墳墓」（山口県文書館蔵）
- (31) 「下関市桜山官祭招魂社絵はがき」（山口県文書館蔵）
- (32) 「招魂社墳墓」（山口県文書館蔵）
- (33) 「官祭招魂社官修墳墓」（山口県文書館蔵）
- (34) 「桜山神社奉祀者氏名表」（下関市立歴史博物館蔵）
- (35) 「下関桜山名所絵はがき」（下関市立歴史博物館蔵）
- (36) 櫻山神社『復刻 櫻山光顕録』（櫻山神社、二〇〇五年）
- (37) 基台は地表面から一〜二センチほどの誤差で沈んでいるものもあるため、この程度の計測誤差があることを前提とする。また、吉田松陰神霊碑については、基台が二段構造となっているため、他の碑より基台一段分ほど計測箇所が多い。
- (38) 各型式の頂部は高低により今後さらに細分できる可能性がある。
- (39) 田中彰『吉田松陰 変転する人物像』（中公新書、二〇〇一年）

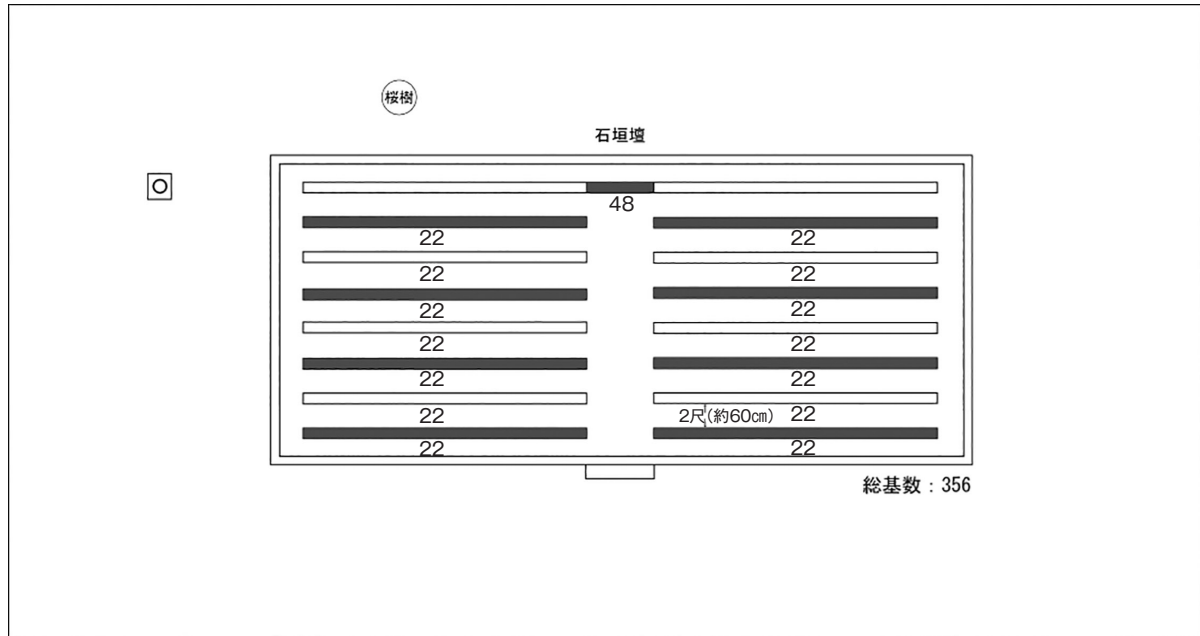
【図1-1】明治十六年以前の配置模式図



【図1-2】明治十六年以降の配置模式図

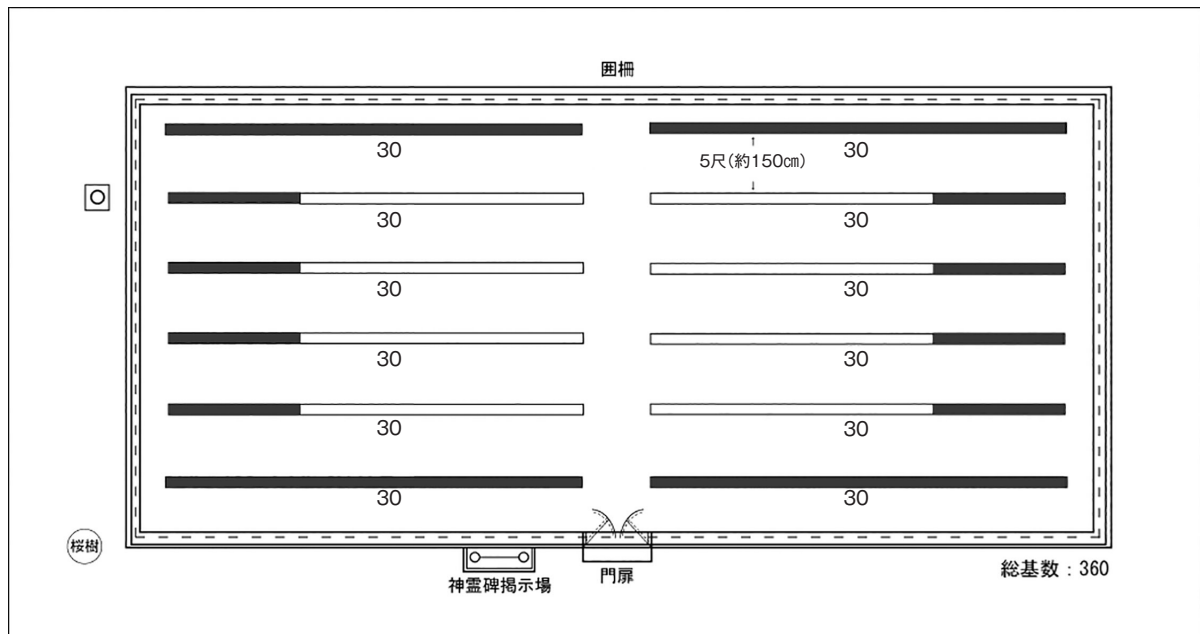


【図2-1】明治四十四年以前の配置模式図



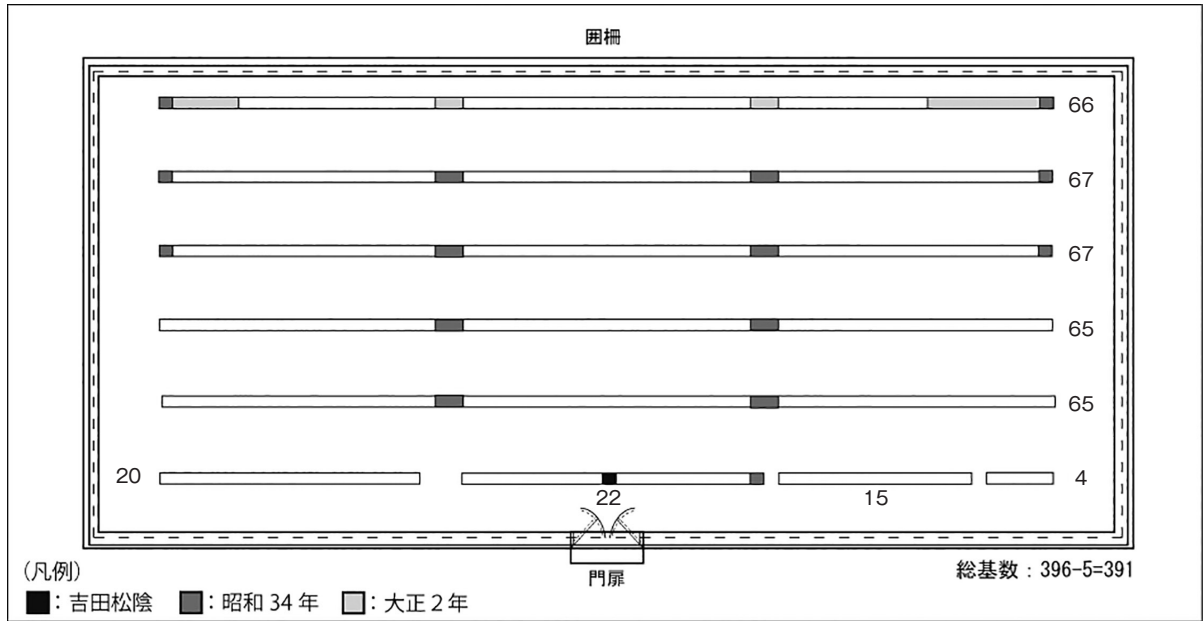
※塗りつぶし部は、整備にかかる移設のため、取り除かれた神霊碑を示す。

【図2-2】明治四十四年以降の配置模式図

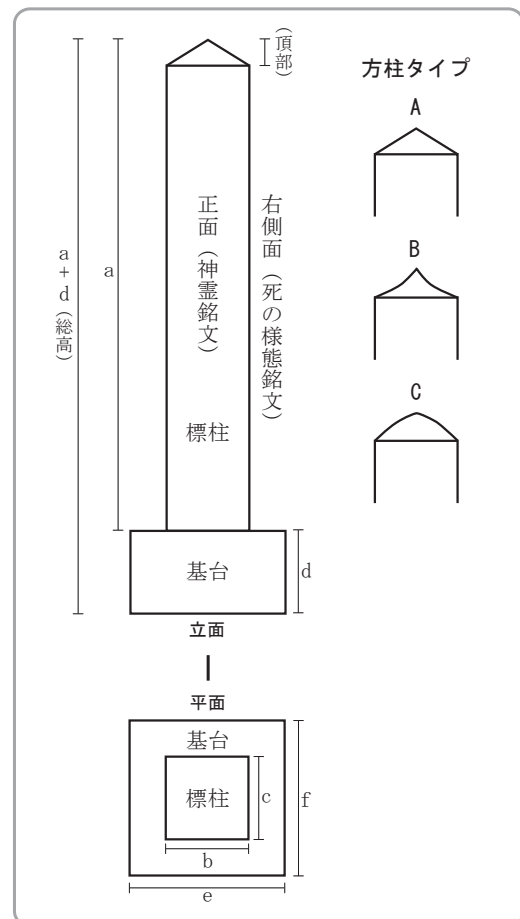


※塗りつぶし部分は、【図2-1】で取り除いた神霊碑を新たに設置した場所を示す。

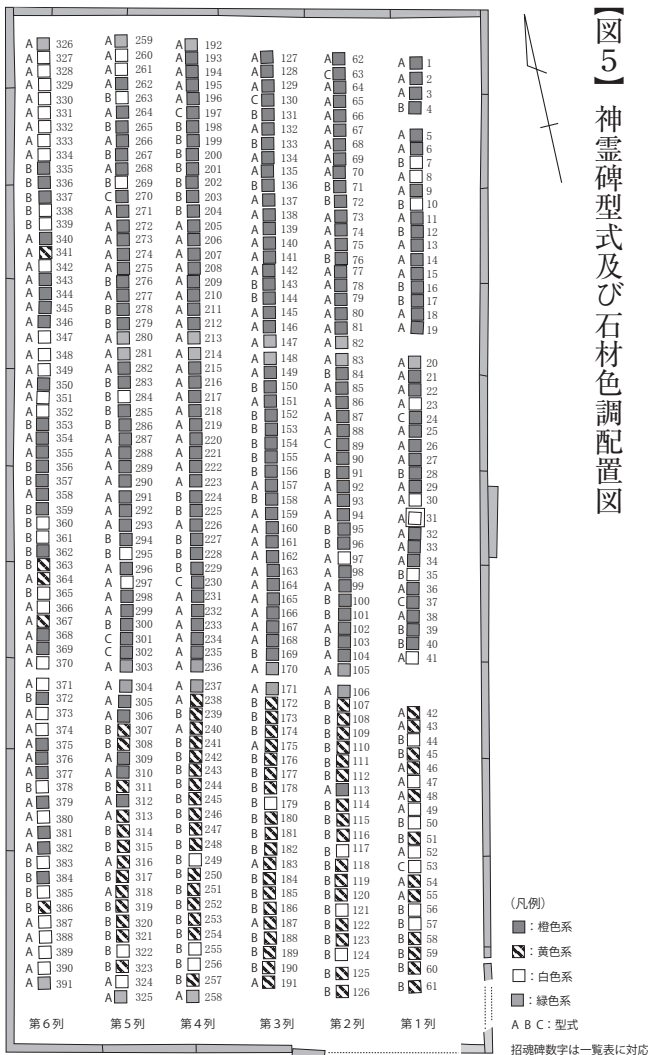
【図3】現在の配置



【図4】神霊碑形状図



【図5】神霊碑型式及び石材色調配置図



神霊碑型式と石材色調の相関

型式	石材色調																						型式内訳	色調内訳					
	第1列				第2列				第3列				第4列				第5列				第6列				橙系	黄系	白系	緑系	
	橙系	黄系	白系	緑系	橙系	黄系	白系	緑系	橙系	黄系	白系	緑系	橙系	黄系	白系	緑系	橙系	黄系	白系	緑系									
A	23	7	7	1	29	0	1	4	27	4	0	4	27	2	0	6	26	3	4	6	17	3	24	2	227	149	19	36	23
B	7	6	7	0	10	16	3	0	13	15	1	0	12	15	3	0	10	10	5	0	10	2	8	0	153	62	64	27	0
C	2	0	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	11	10	0	1	0

【表1】神霊碑型式と石材色調

所属名称	基数	備考
奇兵隊	255	正名団4を含む
報国隊	96	磐石隊を含む
膺懲隊	6	
八幡隊	3	
遊撃軍	7	別働隊・好義隊を含む
整武隊	1	
育英隊	3	野勇隊を含む
不明	19	
合計	390	重複1基を除く数字

【表2】所属別の内訳

※内訳は『櫻山顕光録』より引用。

事変等名称	基数	備考
刑死したもの	3	
攘夷戦	27	事変時期：文久3年(1863)6月、元治元年(1864)8月
奇兵・先鋒闘争	1	事変時期：文久3年8月
但馬義挙	11	事変時期：文久3年10月
京師変動	7	事変時期：元治元年7月
藩内訌戦	12	事変時期：慶応元年(1865)1月
小倉戦その他	95	事変時期：慶応2年(1866)6月～慶応3年1月
戊辰、北越その他	108	事変時期：明治元年(1868)8月～明治2年5月
病死	114	
その他 (自殺・賜死・牢死)	12	
合計	390	重複1基を除く数字

【表3】事変別の内訳

※内訳は『櫻山顕光録』より引用。

表 4 櫻山招魂場神霊碑一覧

※神霊碑の番号は平面図と一致する。計測値の単位は cm。

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
							b	c		d	e	f	
1	下瀬熊之進 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	1034	89.4	15.5	15.5	140	31.0	31.5		
2	松尾甲之進 神靈	文久三年亥八月病死京師享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	1082	90.2	15.0	15.0	180	31.5	29.5		
3	臼井留之助平胤勝 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年二十六	方柱 A	花崗岩 橙色系	1067	89.2	15.3	15.3	17.5	31.8	32.0		
4	和田小傳次唯之 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年	方柱 B	花崗岩 橙色系	1068	89.3	15.0	15.0	17.5	31.8	29.8		
5	世木騎六義安 神靈	元治二年乙丑正月十日戦死于美祿郡太田驛享年三十一	方柱 A	花崗岩 橙色系	97.7	87.2	15.0	15.0	10.5	30.0	32.5	騎は馬 + 奇	
6	堀平三郎知忠 神靈	元治元年甲子正月四日病死享年二十一	方柱 A	花崗岩 橙色系	101.5	85.5	14.8	15.3	160	33.3	32.0		
7	尾川清足 神靈	明治十六年九月二日於東京死	方柱 B	花崗岩 白色系	107.7	91.7	15.5	15.5	160	32.5	32.2		
8	従六位南野一郎 神靈	明治廿七年九月廿五日於赤間関病死年六十七	方柱 A	花崗岩 白色系	109.2	92.7	15.0	15.0	16.5	32.0	31.5		
9	阿部宗兵衛吉道 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前大谷戦死	方柱 A	花崗岩 橙色系	112.4	95.4	15.4	15.4	170	34.2	30.5		
10	白石資風 神靈	明治十三庚辰八月三十一日卒行年六十九	方柱 B	花崗岩 白色系	106.0	90.0	15.2	15.5	160	31.0	30.8		
11	山内賢之照通喜 神靈	文久三年癸亥五月五日戦死于前田臺場享年二十二	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.6	88.6	15.2	15.2	170	33.0	32.2	臺は別字体	
12	伊東貞三祐久 神靈	慶應二年丙寅八月十七日豊前狸山戦蒙創八月廿一日没年二十一	方柱 B	花崗岩 橙色系	107.8	91.8	15.0	15.5	160	32.0	32.0		
13	田中辨藏知忠 神靈	慶應二年丙寅正月廿二日病死	方柱 A	花崗岩 橙色系	111.1	94.1	15.0	14.5	170	32.2	29.0		
14	白石廉作資敏 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年三十六	方柱 A	花崗岩 橙色系	104.4	89.4	15.0	15.0	150	32.0	32.0		
15	伊藤百合五郎 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年十八	方柱 A	花崗岩 橙色系	104.9	88.9	15.5	15.5	160	31.5	32.0		
16	周田半蔵 神靈	文久三年八月□日病死于京師享年	方柱 B	花崗岩 橙色系	107.5	89.0	14.5	14.5	18.5	32.4	32.5		
17	井関英太郎 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年十八	方柱 B	花崗岩 橙色系	103.2	87.2	15.0	15.0	160	31.5	32.0		
18	永野熊之照政和 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年二十二	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.1	90.1	15.0	14.5	160	30.5	31.0		
19	小田村信之進 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.2	89.2	15.2	15.2	160	31.0	31.5		

番号	銘文		形態	材質	標柱				基台			備考
	正面	右側面			総高 a + d	高			幅			
						高 a	幅 b	幅 c	高 d	幅 e	幅 f	
20	山縣有朋 神靈	奇兵隊軍監大正十一年二月一日	方柱 A	花崗岩 綠色系	109.4	91.4	15.4	15.4	18.0	31.7	31.7	
21	堀瀧太郎浪風 神靈	慶応二年丙寅七月廿七日豊前大里戦重創廿九日没於	方柱 A	花崗岩 橙色系	110.3	94.3	15.0	15.0	16.0	32.0	32.0	
22	天宮慎太郎行文 神靈	元治二年乙丑正月六日戦死于美祿郡繪堂驛享年三十九	方柱 A	花崗岩 橙色系	103.5	89.5	15.5	15.0	14.0	32.7	31.7	美祿旧字体
23	十川東之助忠一 神靈	明治三庚午十月九日於山口病死	方柱 A	花崗岩 白色系	108.7	93.7	15.5	15.5	15.0	32.3	32.3	
24	阿川四郎延實 神靈	慶應二丙寅七月三日戦死于豊前大里年廿五	方柱 C	花崗岩 橙色系	110.3	94.8	15.5	16.0	15.5	32.5	29.2	
25	堀潜太郎春峰 神靈	慶應四年戊辰六月五日越後今町戦□創七月二日没年二十七	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.6	92.6	15.5	15.0	16.0	31.7	30.0	
26	宮城彦助御楯 神靈	文久三年癸亥八月二十六日死于赤間関享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	104.8	90.3	15.0	15.5	14.5	32.0	32.0	
27	福田侯平公明 神靈	明治元年戊辰十一月十四日病没于馬関年四十	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.6	91.1	15.5	14.8	15.5	33.0	32.0	
28	時山直八義直 神靈	慶応四年戊辰五月十三日戦死於越後朝日山	方柱 B	花崗岩 橙色系	109.4	93.4	15.5	15.0	16.0	31.7	31.0	直は旧字体
29	入江九一弘致 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年二十八	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.3	89.8	15.0	15.0	17.5	32.0	31.5	
30	高杉晋作春風 神靈	慶応三年丁卯四月十四日於馬関病死享年二十九歳	方柱 A	花崗岩 白色系	110.9	93.9	15.2	14.8	17.0	31.8	32.0	
31	松陰吉田先生 神靈	安政六年己未十月二十七日死于江戸享年三十	方柱 A	花崗岩 白色系	124.7	93.2	15.5	15.5	15.0	30.7	30.7	
32	久坂義助通武 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年二十五	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.3	89.8	14.5	14.5	16.5	32.0	31.5	
33	吉田年丸秀實 神靈	元治元甲子六月五日戦死于京師享年二十四	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.7	89.7	15.0	15.0	16.0	30.8	32.0	
34	河上彌一 神靈	文久三年癸亥十月十四日戦死于但馬享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.4	90.4	15.0	15.3	17.0	32.0	31.8	
35	前兵部少丞交野瑜 神靈	(銘文なし)	方柱 B	花崗岩 白色系	110.8	91.8	15.3	15.3	19.0	33.0	32.7	
36	藤村太郎稲彦 神靈	元治二年乙丑正月六日戦死於美祿郡繪堂戦死驛享年二十八	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.7	90.7	15.0	15.2	16.0	32.0	32.0	美祿旧字体
37	山田鵬輔成功 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前鳥越戦死	方柱 C	花崗岩 橙色系	112.8	94.8	15.5	16.0	18.0	33.5	34.0	
38	熊美平吾宜一 神靈	慶應四年戊辰六月五日越後赤坂蒙創七月廿三日没年二十六	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.0	89.5	15.3	14.7	17.5	31.0	31.5	

番号	銘文		形態	材質	標柱			基台			備考	
	正面	右側面			総高 a + d	高 a	幅		高 d	幅		
							b	c		e		f
39	元森熊次郎春幹 神靈	慶應二年戊辰閏四月廿七日越後小出島戰蒙創五月七日没年廿五	方柱 B	花崗岩 橙色系	1133	938	157	155	19.5	327	320	
40	藤村英次郎稔彦 神靈	慶應四年戊辰正月五日城洲淀城之役戰死年廿一	方柱 B	花崗岩 橙色系	1102	917	150	153	18.5	325	320	
41	岩本勘九郎 神靈	(銘文なし)	方柱 A	花崗岩 白色系	1109	929	155	150	180	31.5	310	
42	有川恒槌紀綱 神靈	元治元年甲子七月十九日戰死于京師享年十九	方柱 A	花崗岩 黄色系	1095	905	160	155	190	32.3	32.3	
43	泉十郎重次 神靈	慶應元乙丑十一月廿七日死于長府享年二十七	方柱 A	花崗岩 黄色系	1105	935	165	160	170	31.0	31.0	
44	熊野直介則之 神靈	明治元年戊辰六月二日戰死于越後今町享年二十三	方柱 B	花崗岩 白色系	1080	895	150	150	18.5	31.3	31.3	
45	千葉三郎忠明 神靈	慶應二丙寅九月十六日死于赤馬関享年二十	方柱 B	花崗岩 黄色系	1092	902	160	150	190	30.7	30.5	
46	下田胸介清彦 神靈	明治元年戊辰九月十五日於奥州會津郡若松被創□死享年三十	方柱 A	花崗岩 黄色系	1105	910	154	150	195	328	322	
47	下村文次郎高俊 神靈	慶應二丙寅七月三日戰死于豊前大里享年廿四	方柱 A	花崗岩 白色系	1092	902	160	150	190	29.5	29.5	
48	勝原國介棟栄 神靈	明治元年戊辰五月廿七日戰死于越後奥板金崎享年二十	方柱 A	花崗岩 黄色系	1113	918	155	155	19.5	31.8	30.8	
49	迫田為太郎清治 神靈	慶應二乙寅七月廿七日豊前赤坂戰關之	方柱 A	花崗岩 白色系	1160	960	157	153	200	32.5	31.0	
50	倉光新吉亮正 神靈	明治元年戊辰九月十八日戰死奥州會津郡若松享年二十二	方柱 B	花崗岩 白色系	1112	917	152	148	195	300	30.5	
51	瀧川六郎資直 神靈	明治元年戊辰九月十二日戰于越後十二潟享年二十一	方柱 B	花崗岩 黄色系	1126	916	156	154	21.0	30.7	32.4	
52	勝見善太郎末高 神靈	明治元年戊辰閏四月廿日死于奥州福岡城下享年廿一	方柱 A	花崗岩 白色系	1083	913	154	154	17.0	30.5	30.5	
53	穴山一俊幸 神靈	慶應二丙寅七月廿七日於豊前赤坂創而劇十月廿日終死于赤馬関享年廿	方柱 C	花崗岩 白色系	1028	853	155	150	17.5	30.5	30.8	
54	上原二九郎利之 神靈	明治元年戊辰五月十三日於越後榎木峠被創七月四日死享年廿三	方柱 A	花崗岩 黄色系	1083	908	150	150	17.5	32.7	32.0	
55	清水甚藏範正 神靈	明治元年戊辰閏四月廿七日戰死于越後小出島享年二十	方柱 A	花崗岩 黄色系	1037	902	155	155	13.5	30.5	30.8	
56	兒玉雷藏春唯 神靈	明治元年戊辰閏四月廿八日於越後高田病死享年二十二	方柱 B	花崗岩 白色系	1070	910	153	155	160	31.7	31.0	
57	堀尾六郎範勝 神靈	明治元年戊辰五月十一日戰死于越後榎木峠享年二十	方柱 B	花崗岩 白色系	1050	885	150	155	16.5	31.5	31.0	
58	無敵幸之進勝行 神靈	明治元年戊辰五月十一日戰死于越後榎木峠享年十九	方柱 B	花崗岩 黄色系	1037	887	153	155	150	32.3	31.0	
59	井上三郎正一 神靈	明治元年戊辰五月十四日戰死于越後榎木峠享年二十五	方柱 B	花崗岩 黄色系	1054	914	155	150	140	310	314	

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
							b	c		d	e	f	
60	平尾磯之助正一 神靈	明治元年戊辰五月十四日戦死于越後別山享年十七	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.3	90.8	15.5	15.5	14.5	31.8	31.3		
61	坂井采太郎義一 神靈	明治元年戊辰五月十九日戦死于越後長岡享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.3	92.8	15.4	15.3	12.5	31.7	31.0		
62	戸澤竹次郎政勝 神靈	慶應四年戊辰正月五日城州淀城之役戦死享年廿八	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.7	91.7	16.5	15.5	16.0	32.0	32.0		
63	藤重源九郎行政 神靈	慶應四年戊辰八月十五日越後新谷戦蒙創廿八日死年二十	方柱 C	花崗岩 橙色系	106.5	91.0	15.0	15.5	15.5	32.0	32.5		
64	藤井一郎雅章 神靈	慶應四年戊辰八月二日越後月岡戦蒙創遂死十九	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.5	92.0	15.5	15.5	13.5	32.5	32.0		
65	榊原剛之助勝忠 神靈	慶應四年戊辰八月二日越後月岡戦死年廿一	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.1	91.6	15.0	15.5	13.5	34.0	34.0		
66	竹森源二 神靈	慶應四年戊辰七月廿三日越後長岡戦蒙傷廿七日死	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.6	93.1	15.0	15.0	13.5	32.0	31.0		
67	藤田育太郎義懷 神靈	慶應四年戊辰七月廿五日越後長岡戦死年二廿四	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.6	94.1	14.5	15.0	14.5	33.0	30.0		
68	早川源次郎 神靈	慶應四年戊辰七月廿五日越後長岡役死	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.4	91.4	15.5	15.0	16.0	32.0	31.0		
69	藤川清二徳一 神靈	慶應四年戊辰七月廿五日越後長岡戦死年二十三	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.4	93.4	15.0	15.0	15.0	32.0	32.0		
70	入江勝馬一義 神靈	慶應四年戊辰正月五日城州淀城之役重創六日没年廿一	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.2	92.7	15.0	15.5	16.5	34.0	34.0		
71	石川伊三郎義忠 神靈	慶應四年戊辰正月五日城州淀城之役重傷六日死年三十	方柱 B	花崗岩 橙色系	108.2	94.2	15.2	14.7	14.0	33.5	33.5		
72	大村清次郎義忠 神靈	慶應四年戊辰正月五日城州淀城之役重傷二月四日死年廿六	方柱 B	花崗岩 橙色系	108.2	91.7	15.0	15.0	16.5	32.0	31.0		
73	本田正之助 神靈	元治元年甲子七月十九日早死于京師享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	103.0	89.0	14.0	14.5	14.0	32.0	32.0		
74	石川和三郎勝久 神靈	慶應四年戊辰正月五日城州淀城之戦重創二月四日死廿二	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.4	92.4	15.0	15.0	15.0	32.0	30.5		
75	伊藤俊三政寿 神靈	慶應四年戊辰閏四月廿七日戦死於越後小出島年三十七	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.7	93.7	15.5	15.5	15.0	33.0	33.5		
76	佐々木五右衛門綱孝 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年二十六	方柱 B	花崗岩 橙色系	105.4	90.4	15.0	14.5	15.0	32.0	32.0		
77	杉山篤太郎秀清 神靈	慶應四年戊辰閏四月廿七日戦死於越後小出島	方柱 A	花崗岩 橙色系	110.1	94.6	15.3	14.7	15.5	33.0	32.0		
78	渡邊八郎英 神靈	明治元年戊辰九月二日戦死于奥州陣享年二十七	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.4	92.4	15.0	15.5	15.0	32.5	32.5	峯は山への下がハ + 羊	
79	山田藤五郎貞光 神靈	慶應四年戊辰閏四月廿七日戦死于越後小出島年廿一	方柱 A	花崗岩 橙色系	110.9	93.4	15.0	14.5	17.5	34.0	33.5		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			高	幅		高	幅				
						a + d	a		b	c	d	e	
80	植木百合次正之 神靈	慶應四年戊辰九月十五日奥州若松城下戦死	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.2	91.2	14.5	15.0	15.0	31.5	31.7		
81	大本昇勝喜 神靈	慶應四年戊辰閏四月廿七日戦死于越後小出島	方柱 A	花崗岩 橙色系	111.1	94.6	15.0	15.0	16.5	32.0	31.5		
82	山本泰蔵 神靈	膺懲隊元治元年八月六日	方柱 A	花崗岩 緑色系	111.8	91.3	15.5	15.5	20.5	31.0	31.5	●は「+ 焦の下が」で はなく日	
83	北嶋保介 神靈	三番銃隊元治元年八月十六日	方柱 A	花崗岩 緑色系	108.6	91.1	15.5	15.2	17.5	31.5	32.0		
84	久富豊 神靈	文久三年癸亥十月戦死于但馬享年	方柱 B	花崗岩 橙色系	104.9	89.9	15.0	15.5	15.0	31.5	31.5		
85	山田寅之助盛次 神靈	元治元年甲子八月死于京師享年二十四	方柱 A	花崗岩 橙色系	104.3	89.3	15.5	15.2	15.0	34.0	32.0		
86	三分利徳三郎 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年十八	方柱 A	花崗岩 橙色系	103.0	88.0	15.2	15.5	15.0	32.0	32.0		
87	今津宇三郎 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.4	90.4	15.5	15.0	16.0	32.5	30.5		
88	内山太郎右衛門 神靈	元治元年甲子□月□日□死京師享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	104.7	89.2	15.0	14.5	15.5	32.0	31.8		
89	堀彌四郎敬忠 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年十八	方柱 C	花崗岩 橙色系	104.6	89.6	15.0	15.0	15.0	32.0	32.0		
90	山徳権之助 神靈	元治元年甲子七月十九日戦死于京師享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.4	90.4	15.0	15.0	17.0	32.0	32.0		
91	山本辨蔵道輝 神靈	明治元年戊辰九月十八日奥州高田戦死	方柱 B	花崗岩 橙色系	109.2	94.2	15.5	15.0	15.0	32.0	31.0		
92	山本作蔵 神靈	明治元年戊辰九月十八日戦死奥州大沼郡高田柳蒙傷	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.2	91.2	15.0	15.5	14.0	33.0	33.0		
93	廣瀬徹和義 神靈	明治元年戊辰九月十八日奥州高田之役重創十九日死年廿六	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.5	93.0	15.8	15.8	14.5	33.0	31.5		
94	國広数馬一之 神靈	明治元年戊辰九月十九日奥州若松城下戦死年廿五日	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.2	92.2	15.0	15.0	15.0	30.0	30.5		
95	徳永九十九忠信 神靈	明治元年戊辰六月十五日於越後國古志郡榎峠蒙傷十六日歿 歳十九	方柱 B	花崗岩 橙色系	105.3	90.8	15.0	14.0	14.5	30.0	32.3		
96	山県保助義幸 神靈	明治元年戊辰五月十三日於越後國古志郡榎峠蒙創同二己巳 二月十日歿歳三十二	方柱 B	花崗岩 橙色系	106.7	91.7	15.5	14.5	15.0	32.0	33.0		
97	三島現八忠之 神靈	明治元年戊辰九月朔日奥州河沼郡天屋戦蒙傷己巳正月十八 日死	方柱 A	花崗岩 白色系	105.5	90.5	15.0	15.5	15.0	32.0	33.0		
98	早川文三 神靈	慶應四年戊辰閏四月廿七日越後鯨波戦死年十六	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.9	94.4	14.5	15.5	15.5	31.0	31.2		
99	増野矢之助 神靈	慶應四年戊辰閏四月廿七日戦死于越後鯨波年十九	方柱 A	花崗岩 橙色系	110.0	92.5	15.0	15.0	17.5	31.5	31.2		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
							b	c		d	e	f	
100	吉武五郎清久 神靈	明治元年四月廿七日越後小出島ニテ戦死	方柱 B	花崗岩 橙色系	109.5	94.0	15.5	15.0	15.5	33.7	34.0		
101	橋本九兵衛忠誠 神靈	慶應四年戊辰閏四月廿七日越後小出島戦蒙創廿九日死年二十三	方柱 B	花崗岩 橙色系	110.4	95.4	15.0	14.5	15.0	31.0	28.5		
102	高橋源吾 神靈	慶應四年戊辰五月十一日越後榎峠戦死	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.8	93.8	15.5	15.0	15.0	32.0	31.7		
103	熊和惣五郎正訓 神靈	慶應四年戊辰五月十一日越後榎峠戦死年十九	方柱 B	花崗岩 褐色系	108.8	93.3	15.5	14.5	15.5	33.0	31.0		
104	上田謙三正致 神靈	慶應四年戊辰五月十一日越後榎峠戦死年三十九	方柱 A	花崗岩 褐色系	108.2	90.7	15.6	15.7	17.5	31.5	31.5		
105	山本弥八 神靈	文久三年六月朔日	方柱 A	花崗岩 緑色系	109.0	91.5	15.5	15.5	17.5	32.0	32.0		
106	上田仁兵衛 神靈	奇兵隊文久三年六月五日	方柱 A	花崗岩 緑色系	109.1	91.6	15.5	15.5	17.5	31.0	31.5		
107	後藤酒兵衛正信 神靈	明治元年戊辰五月廿六日戦死于越後小栗山享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	108.9	91.9	15.0	15.0	17.0	32.0	30.3		
108	吉田喜三郎正光 神靈	明治元年戊辰五月廿六日戦死于越後小栗山享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	107.4	91.4	15.5	15.0	16.0	32.0	31.0		
109	山名孫八政次 神靈	明治元年戊辰五月廿七日戦死于越後興板金ヶ崎享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	106.9	90.9	15.2	15.0	16.0	32.5	32.3		
110	平野耕造行家 神靈	明治元年戊辰五月廿七日戦死于越後興板金ヶ崎享年三十一	方柱 B	花崗岩 黄色系	106.3	90.8	15.2	15.5	15.5	32.0	30.5		
111	岡村常吉行信 神靈	明治元年戊辰五月廿八日於越後興板金ヶ崎蒙創同廿九日死享年十九	方柱 B	花崗岩 黄色系	108.0	90.0	15.2	15.2	18.0	32.0	30.5		
112	阪本伊三郎清則 神靈	明治元年戊辰五月廿八日於越後興板金ヶ崎被創六月廿四日死享年二十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	109.8	91.8	15.5	15.5	18.0	31.5	31.0		
113	江見謙介正勝 神靈	明治元年戊辰五月廿九日戦死于越後興板陳ヶ峯享年二十	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.1	92.1	15.0	15.0	17.0	32.0	33.0	峯は山カナムリに金	
114	榎本誠藏信喬 神靈	明治元年戊辰六月十二日戦死于越後興板陳ヶ峯享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	110.1	91.1	15.5	15.0	19.0	31.5	30.0	峯は山ヘン + 八の下が 手	
115	下田小太郎正行 神靈	明治元年戊辰六月廿二日戦死于越後半藏金享年二十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	106.2	91.2	15.5	15.5	15.0	31.5	32.0		
116	河田源太郎直一 神靈	明治元年戊辰六月廿二日戦死于越後半藏金享年二十三	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.6	88.6	15.5	15.5	15.0	32.0	32.0		
117	畠中孫助喬秀 神靈	明治元年戊辰六月廿二日戦死于越後半藏金享年二十七	方柱 B	花崗岩 白色系	107.6	90.6	15.5	15.0	17.0	30.5	32.0		
118	阿川五郎国光 神靈	明治元年戊辰七月廿二日戦死于越後興板赤田山享年二十	方柱 B	花崗岩 黄色系	108.0	91.0	15.5	15.5	17.0	32.0	30.0		
119	藤井直江正治 神靈	明治元年戊辰七月廿四日戦死于越後長岡享年二十三	方柱 B	花崗岩 黄色系	106.5	91.5	15.5	15.0	15.0	32.0	31.5		

番号	銘文		形態	材質	標柱				基台			備考
	正面	右側面			高			幅				
					a + d	a	b	c	d	e	f	
120	大崎源吾忠勝 神靈	明治元年戊辰七月廿四日戦死于越後長岡享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	107.1	91.6	15.5	15.0	15.5	31.5	30.5	
121	原親兵衛辰繁 神靈	明治元年戊辰七月廿四日戦死于越後長岡享年二十六	方柱 B	花崗岩 白色系	107.7	90.2	15.5	15.0	17.5	31.0	30.5	
122	関中力藏義之 神靈	明治元年戊辰九月十五日戦死于奥州若松享年二十一	方柱 B	花崗岩 黄色系	106.6	89.6	15.2	14.5	17.0	30.0	29.0	
123	原吉太郎貞徳 神靈	明治元年戊辰九月十五日於奥州若松被創九月廿五日死享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.4	89.9	15.3	15.5	15.5	30.8	29.8	
124	渋谷虎吉年之 神靈	明治元年戊辰九月十五日於奥州若松被創同廿五日死享年十九	方柱 B	花崗岩 白色系	101.5	92.0	15.0	15.0	9.5	31.0	32.2	
125	石田幾次郎光吉 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日戦死于豊前赤坂享年三十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.8	88.8	16.0	15.2	14.0	29.5	30.5	
126	石井兵藏重信 神靈	明治元年戊辰六月九日戦死于越後奥板陳ヶ峯享年二十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.3	91.8	15.5	15.0	13.5	30.0	31.0	
127	蓮海坊鬼顔 神靈	元治元年甲子八年五日戦死于赤馬関檀浦享年十八	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.0	89.0	15.0	14.5	16.0	32.0	32.0	
128	森脇三左衛門忠信 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.4	88.4	15.0	15.0	17.0	31.5	32.0	
129	福田彌太郎正重 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	103.5	88.5	15.2	15.2	15.0	32.0	31.5	
130	松江安右衛門 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 C	花崗岩 橙色系	103.5	89.5	14.7	15.0	14.0	32.5	31.5	
131	藤田吉作則忠 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 B	花崗岩 橙色系	103.3	89.3	15.0	15.5	14.0	31.5	32.5	
132	町田道之助勝久 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	103.9	89.9	15.3	15.3	14.0	33.0	32.0	
133	斉藤千熊幸郷 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 B	花崗岩 橙色系	102.1	90.1	15.3	15.0	12.0	32.0	32.3	
134	森重菊次郎謙 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	102.4	89.4	14.5	14.5	13.0	32.0	32.0	
135	水津惣之助重義 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	102.2	89.7	15.0	15.0	12.5	31.5	32.0	
136	正木泰藏正行 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于赤馬関前田享年	方柱 B	花崗岩 橙色系	102.3	89.8	15.0	15.0	12.5	30.0	31.0	満は旧字体 美祿は旧字体
137	田村熊吉郎恵満 神靈	元治二年乙丑正月十日戦死于美祿郡大田驛享年四十二	方柱 A	花崗岩 橙色系	102.8	89.8	15.2	15.0	13.0	32.0	32.0	
138	柳半之照之道 神靈	元治二年乙丑正月十日戦死于美祿郡大田驛享年三十四	方柱 A	花崗岩 橙色系	102.1	89.6	15.2	15.0	12.5	31.7	31.7	
139	西山八十槌長安 神靈	元治二年乙丑正月十日戦死于美祿郡大田驛享年二十二	方柱 A	花崗岩 橙色系	103.1	90.6	14.9	14.7	12.5	32.0	32.0	

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		
140	佐伯多三郎正道 神靈	元治二年乙丑正月十日戦死于美祢郡大田驛享年二十二	方柱 A	花崗岩 橙色系	1026	896	15.1	14.5	13.0	32.0	32.0		
141	松浦喜代藏信之 神靈	元治二年乙丑正月十日戦死于美祢郡大田驛享年二十七	方柱 A	花崗岩 橙色系	1042	897	14.6	14.6	14.5	32.0	32.2	蔵は旧字体	
142	田中英作義之 神靈	元治二年乙丑正月十日戦死于美祢郡大田驛享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	1020	890	15.0	15.0	13.0	32.3	32.0		
143	河村次郎通治 神靈	元治二年乙丑正月十日大田驛之戦蒙重傷同年七月十九日遂死享年二十二	方柱 B	花崗岩 褐色系	101.7	892	14.8	14.5	12.5	31.0	31.7		
144	飯田棟之丞敬之 神靈	慶應二年丙寅六月十七日戦死于豊前田浦	方柱 B	花崗岩 褐色系	105.1	91.1	15.5	15.0	14.0	35.7	32.7		
145	本田寅之助芳忠 神靈	慶應二年丙寅六月十七日豊前田浦役溺死	方柱 A	花崗岩 褐色系	107.8	933	15.0	15.0	14.5	33.0	35.5		
146	邨田團蔵 神靈	慶應四年戊辰五月十三日戦死于越後朝日山	方柱 A	花崗岩 褐色系	111.3	958	14.5	15.7	15.5	32.5	32.2		
147	西林利吉 神靈	文久三年六月五日	方柱 A	花崗岩 緑色系	108.1	921	15.5	15.3	16.0	31.7	32.0		
148	斎藤亀蔵 神靈	文久三年六月初日	方柱 A	花崗岩 緑色系	106.5	91.5	15.5	15.5	15.0	31.0	31.5		
149	秦音之進嘉延 神靈	慶應四年戊辰五月十二日戦死于越後榎峠年十九	方柱 A	花崗岩 褐色系	108.0	920	16.0	15.3	16.0	31.8	31.8		
150	岡田辰太郎正明 神靈	慶應四年戊辰五月十六日戦死于越後榎峠年廿五	方柱 B	花崗岩 褐色系	108.9	93.9	15.7	14.5	15.0	31.0	31.5		
151	吉岡三郎綱重 神靈	慶應四年戊辰五月十六日越後榎峠戦死年廿五	方柱 A	花崗岩 褐色系	107.4	94.4	15.6	15.0	13.0	32.0	30.8		
152	矢野伊兵衛 神靈	慶應四年戊辰五月十八日越後鬼倉山戦死	方柱 B	花崗岩 褐色系	107.2	922	15.0	15.5	15.0	34.4	33.3	鬼は異体字	
153	武井満太郎等実 神靈	慶應四年戊辰五月十九日越後榎峠戦死年二十二	方柱 B	花崗岩 褐色系	106.6	921	15.5	15.3	14.5	31.7	32.1		
154	高橋五郎高政 神靈	慶應四年戊辰五月十二日戦死于越後榎峠	方柱 B	花崗岩 褐色系	108.9	93.9	15.3	15.5	15.0	31.7	30.3		
155	山田棟吉正明 神靈	慶應四年戊辰五月十一日於越後榎峠戦死十四	方柱 B	花崗岩 褐色系	110.0	95.5	15.5	16.0	14.5	35.3	32.0		
156	井石和作茂秀 神靈	慶應四年戊辰五月廿六日越後杉澤戦死十八	方柱 B	花崗岩 褐色系	109.2	94.7	14.5	14.5	14.5	31.0	31.5		
157	三井熊吉忠臣 神靈	慶應四年戊辰五月廿八日越後金崎戦死二十二	方柱 A	花崗岩 褐色系	106.7	93.2	14.7	15.0	13.5	33.5	29.0	熊は異体字	
158	中郷廣太郎國久 神靈	慶應四年戊辰五月廿八日越後金崎戦死卅六	方柱 B	花崗岩 褐色系	108.6	94.6	15.0	15.5	14.0	36.2	32.7	卅は異体字	
159	寺岡軍一 神靈	慶應四年戊辰六月初日越後古志郡杉澤戦蒙傷三日死年二十九	方柱 A	花崗岩 褐色系	108.1	94.1	15.3	14.5	14.0	35.0	30.5		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		

160	吉邨常吉 神靈	慶應四年戊辰六月二日越後今町戦死	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.2	95.7	15.2	14.5	13.5	31.7	29.5	常は異体字
161	吉村盛之助忠光 神靈	慶應四年戊辰五月十三日越後朝日山戦蒙創六月十三日死年十九	方柱 A	花崗岩 橙色系	104.5	91.5	15.4	14.6	13.0	34.0	34.3	
162	福田鏡作任風 神靈	慶應四年戊辰六月十五日越後桂峠戦蒙創十八日死年廿六	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.9	93.4	15.3	15.3	14.5	33.0	34.0	
163	三井弦次郎 神靈	慶應四年戊辰五月十三日越後朝日山戦蒙創六月廿九日死	方柱 A	花崗岩 褐色系	104.9	92.4	15.3	15.3	12.5	31.5	32.0	
164	長尾兵馬春景 神靈	慶應四年戊辰六月一日越後西中之又戦死年三十二	方柱 A	花崗岩 褐色系	105.9	92.4	15.2	15.5	13.5	32.7	32.0	
165	中邨高平 神靈	慶應四年戊辰五月十三日越後榎峠戦蒙創七月四日死年廿五	方柱 A	花崗岩 褐色系	107.2	94.2	15.2	14.5	13.0	31.6	32.0	
166	小枝正之助守義 神靈	慶應四年戊辰五月十三日越後朝日山戦蒙創七月廿二日死年廿六	方柱 A	花崗岩 褐色系	108.4	94.4	15.3	14.3	14.0	33.5	34.0	
167	佐々木又四郎満寛 神靈	文久三年癸亥六月五日於前田茶臼山戦死歳二十六	方柱 A	花崗岩 褐色系	106.0	91.5	15.7	15.0	14.5	33.3	33.0	満は略字
168	土田内蔵太 神靈	元治元年甲子八月六日前田之役受重傷明年遂死	方柱 A	花崗岩 褐色系	110.2	95.7	15.5	15.5	14.5	32.5	32.7	
169	福田直右衛永光 神靈	元治元年甲子八月五日戦死于赤馬閑塩浦享年	方柱 B	花崗岩 褐色系	105.2	90.2	14.2	15.2	15.0	31.8	32.0	
170	阿武市之唳 神靈	法専寺にて切腹	方柱 A	花崗岩 緑色系	106.6	90.6	15.2	15.2	16.0	31.4	32.0	
171	木原四郎 神靈	慶應丙寅歳五月十八日	方柱 A	花崗岩 緑色系	107.9	92.4	15.3	15.6	15.5	31.5	30.5	
172	入船米吉信光 神靈	慶応二年七月廿七日小倉新町ニテ戦死	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.0	87.5	16.0	15.5	15.5	32.5	32.0	
173	泉光蔵時明 神靈	慶應二丙寅九月廿五日戦死于豊前城野新町享年三十三	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.4	90.9	16.0	15.5	14.5	31.5	31.5	
174	一柳勇次郎忠明 神靈	慶應二丙寅十月四日戦死于豊前曾根享年二十四	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.0	90.0	16.1	15.0	13.0	31.2	31.0	
175	萩原次郎右衛門忠孝 神靈	慶應二年丙寅七月二日戦死于豊前大里享年廿四	方柱 A	花崗岩 黄色系	104.4	88.9	16.2	15.1	15.5	30.1	30.2	
176	本田三郎金吉 神靈	慶應二年丙寅七月三日戦死于豊前大里享年十九	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.9	88.9	16.0	15.5	14.0	30.3	30.5	
177	処光蔵正勝 神靈	明治元年戊辰五月十四日戦死于越後別山享年二十	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.4	91.4	15.5	15.5	14.0	31.0	30.5	処は旧字体
178	徳永権次郎忠勝 神靈	慶應二年丙寅七月三日戦死于豊前大里享年廿六	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.3	89.3	16.0	15.5	14.0	30.3	29.5	
179	大藤季吉一好 神靈	明治元年戊辰六月十四日被創于越後大里村七月十五日死享年二十	方柱 B	花崗岩 白色系	105.6	90.6	15.3	14.7	15.0	31.3	30.5	

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		
180	岡本勝左衛門吉豊 神靈	明治元年戊辰六月九日於越後興板金ヶ崎被創九月九日死享年二十七	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.7	90.7	15.0	15.0	15.0	31.5	32.0	左は異体字	
181	太田銀次郎正光 神靈	慶応二丙寅九月九日戦死于豊前小倉享年三十	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.7	88.7	16.0	14.5	15.0	29.3	30.5		
182	渡辺幸助章 神靈	慶應二丙寅十月四日於豊前徳力受創而刺十月十九日終死赤馬関享年十七	方柱 B	花崗岩 黄色系	105.2	91.7	16.0	15.5	13.5	32.5	32.5		
183	川崎八郎行光 神靈	明治元年戊辰八月廿一日戦死于越後津川享年二十	方柱 A	花崗岩 黄色系	104.0	90.5	15.0	15.5	13.5	29.5	30.3		
184	金山太郎熊忠貴 神靈	元治元年甲子八月六日戦死于長門前田享年二十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	106.0	92.5	16.0	15.2	13.5	30.2	30.2		
185	河崎友次郎正勝 神靈	慶應二丙寅七月廿七日戦死于豊前大谷越享年十九	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.3	90.8	15.3	15.6	12.5	30.5	30.7		
186	金田常吉正盛 神靈	慶應二丙寅七月廿七日戦死于豊前八丁越享年三十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	101.8	89.8	16.2	15.0	12.0	30.3	29.3		
187	勝岡彌九郎信好 神靈	慶應二年丙寅六月十七日戦死于豊前田之浦享年十七	方柱 A	花崗岩 黄色系	99.4	89.4	15.8	15.5	10.0	30.0	30.8	彌は略字	
188	吉津定吉利政 神靈	明治元年戊辰六月廿二日於越後半蔵金被創七月七日死享年廿一	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.2	91.2	15.2	15.2	11.0	31.5	30.7		
189	吉崎常吉通行 神靈	明治元年戊辰五月十一日於越後榎木峠被創六月四日死享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	100.7	88.2	15.5	15.0	12.5	31.5	31.7		
190	武末孫六末長 神靈	慶應二丙寅八月十七日戦死于豊前狸山享年三十五	方柱 B	花崗岩 黄色系	96.5	87.0	16.0	16.0	9.5	29.5	29.0		
191	長綱瀧吉好文 神靈	明治元年戊辰六月十九日戦死越後十二潟享年二十四	方柱 A	花崗岩 黄色系	98.7	90.7	15.5	15.0	8.0	30.5	29.7		
192	虎蔵 神靈	文久三年六月朔日	方柱 A	花崗岩 緑色系	108.7	91.7	15.3	15.4	17.0	31.5	31.3		
193	中邨元之進清忠 神靈	慶応二年丙寅六月十七日豊前田浦之役溺死	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.9	92.9	15.0	14.0	17.0	33.0	33.5		
194	矢玉助太郎 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.2	91.2	105.3	15.0	17.0	33.5	32.5		
195	藤野浪太郎秀一 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日戦死于豊前赤坂年十九	方柱 A	花崗岩 橙色系	112.1	95.1	15.4	14.5	17.0	31.5	31.8		
196	伊藤虎松直之 神靈	慶應二年丙寅七月三日豊前大里役被創四日死年二十	方柱 A	花崗岩 橙色系	112.5	96.0	15.5	15.7	16.5	34.0	33.0		
197	古川順蔵正勝 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前大谷口戦重創八月朔日死年廿七	方柱 C	花崗岩 橙色系	112.2	95.2	15.7	15.7	17.0	33.5	32.0		
198	松原興兵衛時治 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦重創八月八日死年二十七	方柱 B	花崗岩 橙色系	112.3	93.8	15.5	15.2	18.5	32.6	32.0		
199	飯田幸十郎勝真 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦重創八月廿日死	方柱 B	花崗岩 橙色系	107.2	91.2	15.4	14.7	16.0	32.0	31.5		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		
200	中邨水穂 神靈	慶応二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死	方柱 B	花崗岩 橙色系	1066	91.1	148	144	15.5	32.7	33.0		
201	本郷志摩之助 神靈	慶応二年丙寅七月三日豊前大里戦蒙創九月十九日死	方柱 B	花崗岩 橙色系	1064	92.4	14.7	15.0	14.0	33.7	32.0		
202	御手洗音五郎光重 神靈	慶應二年丙寅八月十七日豊前曾根戦重創九月廿日死年廿一	方柱 A	花崗岩 橙色系	1068	94.3	15.2	14.8	12.5	34.0	32.0		
203	磯野虎蔵正一 神靈	慶應二年丙寅八月十七日豊前狸山戦蒙創九月廿八日死年廿二	方柱 B	花崗岩 橙色系	1056	91.6	15.0	15.5	14.0	32.0	31.5	虎は旧字体	
204	若月健蔵正一 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦重傷十月十六日死年二十	方柱 B	花崗岩 橙色系	108.9	94.5	15.3	14.8	14.4	33.0	31.2		
205	大枝八郎義謙 神靈	慶應二年丙寅八月十一日豊前狸山戦死年廿六	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.1	92.1	15.3	15.0	14.0	32.2	32.0		
206	渡辺逸蔵義之 神靈	慶應二年丙寅七月三日豊前大里戦重創十日死年廿六	方柱 A	花崗岩 橙色系	111.5	95.0	15.5	14.5	16.5	33.5	32.0		
207	福岡辰之助久重 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死年三十四	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.7	91.7	15.5	15.0	14.0	33.0	31.2		
208	梅村喜代三春行 神靈	好義隊慶應二年丙寅十月四日豊前曾根戦死卅六	方柱 A	花崗岩 橙色系	101.5	90.0	16.0	15.3	11.5	32.3	32.5		
209	見義市蔵助光 神靈	好義隊慶應二年丙寅十月四日豊前曾根重傷十一月十五日死年廿四	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.7	92.2	15.0	15.0	15.5	31.0	33.3		
210	木原祐太郎虎重 神靈	好義隊慶應二年丙寅十月四日豊前曾根戦死年卅一	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.0	92.5	15.5	14.5	16.5	32.0	32.5		
211	山崎四方七昌實 神靈	慶應二年丙寅六月十七日豊前田浦戦死	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.1	93.6	15.3	15.4	15.5	33.3	32.5		
212	安部清見 神靈	明治元年六月二日越後柏崎病院ニテ傷死	方柱 A	花崗岩 橙色系	112.3	95.3	15.5	14.5	17.0	34.5	32.5		
213	飯沼三千助 神靈	八幡隊慶應三年三月二十七日	方柱 A	花崗岩 緑色系	107.2	91.7	15.4	15.2	15.5	31.5	31.8		
214	井上收蔵 神靈	慶應二年八月十一日	方柱 A	花崗岩 緑色系	106.9	91.4	15.2	15.4	15.5	31.5	31.3		
215	玉江芳彦美臣 神靈	慶應四年戊辰八月二日越後月岡戦被創死年十八	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.0	93.0	15.5	15.6	15.0	32.3	32.0		
216	美香房之進忠義 神靈	慶應四年戊辰四月年廿五	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.7	93.2	15.0	15.0	15.5	33.5	33.5		
217	山田瀧太郎義忠 神靈	明治元年戊辰戦死于京師	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.5	92.0	15.3	14.5	15.5	33.3	31.0		
218	十河彦四郎義一 神靈	慶應四年戊辰四月病死于京師年廿四	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.1	91.6	15.0	14.7	15.5	31.0	29.5		
219	有田彦兵衛忠光 神靈	慶應四年戊辰正月五日城洲淀城之役重創六日死年廿四	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.7	95.7	14.5	14.9	13.0	31.5	33.5		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		
220	邨上小治郎周徳 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前騎村戦死年廿四	方柱 A	花崗岩 橙色系	111.1	946	160	15.5	16.5	34.0	33.5	騎は馬 + 寄	
221	関口彌太郎兼房 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前騎部戦死年廿八	方柱 C	花崗岩 橙色系	113.0	95.5	160	16.3	17.5	33.0	32.0		
222	大野秀兵衛義光 神靈	慶應三年丁卯九月廿四日戦死年三十二	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.2	93.7	150	15.0	15.5	30.0	30.0		
223	隅次郎秀光 神靈	慶応二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死年二十	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.4	93.9	14.7	15.5	13.5	32.0	32.0		
224	梅津熊之進正義 神靈	慶応二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死年廿五	方柱 B	花崗岩 橙色系	108.8	93.8	14.7	14.1	15.0	31.7	30.5		
225	守永光之進一正 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死	方柱 B	花崗岩 橙色系	109.9	95.4	15.5	14.5	14.5	33.2	31.2		
226	徳見興五郎忠信 神靈	慶応二年丙寅七月廿七日戦死豊前赤坂年十八	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.1	91.1	15.2	14.5	14.0	34.0	29.8		
227	春日興七芳風 神靈	慶応二年丙寅七月廿七日戦死豊前赤坂年二十四	方柱 B	花崗岩 橙色系	106.1	92.1	15.0	15.0	14.0	32.3	33.0		
228	山城平吉致久 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日戦死于豊前赤坂年廿七	方柱 B	花崗岩 橙色系	109.8	94.8	15.2	15.6	15.0	32.0	31.8		
229	橘式部信秀 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死年十七	方柱 B	花崗岩 橙色系	110.6	94.6	15.5	14.2	16.0	31.8	32.0		
230	重富秀之進義明 神靈	慶應二年丙寅七月廿七日戦死于豊前赤坂年十六	方柱 C	花崗岩 橙色系	105.8	90.8	15.4	15.4	15.0	35.8	28.7		
231	伊藤清治祐俊 神靈	慶応二年丙寅九月十日死年三十九	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.3	93.3	15.3	15.1	15.0	30.3	29.8		
232	内田文吉清忠 神靈	慶応二年丙寅九月十日死	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.8	92.8	15.7	14.7	15.0	32.2	30.6		
233	柳良平守忠 神靈	慶應二年丙寅九月十六日死年三十三	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.3	93.8	15.0	15.0	14.5	32.0	32.0		
234	藤野正助 神靈	慶應二年丙寅九月十六日死	方柱 A	花崗岩 橙色系	110.3	94.3	14.7	14.7	16.0	34.0	33.0		
235	高橋市之進 神靈	慶應二年丙寅九月十七日死年十七	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.6	93.1	15.5	15.5	15.5	31.5	32.0		
236	秋枝庄太郎 神靈	慶応二年七月廿七日	方柱 A	花崗岩 緑色系	108.4	91.4	15.0	15.0	17.0	31.5	30.5		
237	山下豊吉 神靈	慶應丙寅歳五月十八日	方柱 A	花崗岩 緑色系	109.5	92.0	15.2	15.3	17.5	31.5	31.8	歳は旧字体	
238	長岡勘助國光 神靈	明治元年戊辰五月十四日戦死于越後別山享年二十二	方柱 A	花崗岩 黄色系	107.6	91.6	14.4	14.7	16.0	31.8	32.0		
239	永山勝四郎光行 神靈	慶応二丙寅八月十七日戦死于豊前狸山享年廿一	方柱 B	花崗岩 黄色系	100.6	86.1	16.4	15.3	14.5	30.6	30.7		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		
240	中井源次郎忠一 神靈	慶應二年丙寅六月十七日戦死于豊前田之浦享年十八	方柱 A	花崗岩 黄色系	105.9	90.4	16.0	15.0	15.5	30.7	29.3		
241	梅林芳助忠一 神靈	明治元年戊辰五月廿二日於奥州杉澤被創十月二日死享年二十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	106.8	90.3	15.5	15.5	16.5	29.0	31.0		
242	野上繁九郎信綱 神靈	慶應二丙寅七月廿七日戦死于豊前赤坂享年二十一	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.7	88.7	16.0	15.5	14.0	31.0	29.4		
243	國重直人与芳 神靈	明治元年戊辰五月廿九日戦死于越後差出村享年二十六	方柱 B	花崗岩 黄色系	104.3	90.8	15.5	15.5	13.5	30.7	32.2		
244	黒塚源吾信廣 神靈	慶応二丙寅七月廿七日戦死于豊前大谷越享年二十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	99.8	86.8	15.7	15.4	13.0	30.4	30.5		
245	工藤合輔順豊 神靈	慶應二丙寅七月廿七日戦死于八丁越享年二十九	方柱 B	花崗岩 黄色系	99.9	86.4	16.0	15.2	13.5	31.5	31.3		
246	日下房助信義 神靈	慶應二丙寅八月十七日於豊前狸山蒙創而刺九月九日終死于赤馬関享年十五	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.3	88.8	15.9	15.0	13.5	32.6	31.4		
247	國村貞右衛門正明 神靈	慶應二丙寅十月四日戦死于豊前曾根享年三十七	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.5	90.0	16.1	15.4	13.5	30.7	30.0		
248	山尾謙次勝信 神靈	慶應二丙寅七月廿七日戦死于豊前大谷越享年二十五	方柱 B	花崗岩 黄色系	99.1	85.6	15.3	15.8	13.5	32.5	33.4		
249	松田新兵衛雪範 神靈	明治元年戊辰八月廿五日戦死于越後津川享年二十	方柱 B	花崗岩 白色系	103.6	91.6	15.2	15.2	12.0	31.2	30.6		
250	舩見榮作忠清 神靈	慶應二丙寅九月廿五日戦死于豊前城野享年二十五	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.8	89.8	15.3	15.5	13.0	30.2	30.0		
251	深津新吉清喬 神靈	明治元年戊辰五月廿八七日戦死于與板金ヶ崎享年十九	方柱 B	花崗岩 黄色系	101.9	90.9	15.2	15.0	11.0	30.3	31.0		
252	藤永政助雪範 神靈	慶應二丙寅七月廿七日戦死于豊前大谷越享年十六	方柱 B	花崗岩 黄色系	98.4	87.9	16.0	15.5	10.5	30.5	29.5		
253	福田忠藏武俊 神靈	慶應二丙寅七月廿七日戦死于豊前騎新町享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	100.8	89.8	16.1	15.6	11.0	30.3	30.0		
254	福原林之助俊喬 神靈	慶應二丙寅十月四日戦死于豊前城野新町享年十六	方柱 B	花崗岩 黄色系	101.0	90.0	15.5	14.9	11.0	30.5	30.0	騎は馬 + 寄	
255	作間友煇信忠 神靈	明治元年六月戊辰廿二日戦死于越後亀貝享年二十	方柱 B	花崗岩 白色系	99.6	89.6	15.2	15.0	10.0	29.5	28.0		
256	水野清藏範正 神靈	明治元年戊辰九月十五日戦死于奥州若松享年二十五	方柱 B	花崗岩 白色系	99.9	90.4	15.1	14.5	9.5	31.5	31.2		
257	北村忠藏光信 神靈	明治元年戊辰七月廿四日於越後花岡被創同廿四日死享年二十六	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.4	92.4	15.0	14.6	10.0	31.5	31.0		
258	藤吉 神靈	文久三年六月朔日	方柱 A	花崗岩 綠色系	102.1	91.1	15.2	15.3	11.0	30.4	31.5		
259	衆八 神靈	文久三年六月朔日	方柱 A	花崗岩 綠色系	111.9	92.4	15.2	15.0	19.5	31.4	31.5		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		

260	藤田平太郎岸彦 神靈	明治二年己巳七月十一日病死享年二十	方柱 A	花崗岩 白色系	109.6	92.6	15.6	15.0	17.0	30.8	30.0	
261	檜垣五三郎貞静 神靈	明治二年己巳五月廿一日病死享年二十七	方柱 A	花崗岩 白色系	110.0	93.0	15.4	14.7	17.0	32.7	32.2	
262	平賀宗四郎政一 神靈	慶応二年丙寅七月廿七日豊前赤坂戦死年四十六	方柱 A	花崗岩 橙色系	105.6	91.6	15.1	14.7	14.0	32.5	32.7	
263	西本四郎勝正 神靈	明治二年己巳五月廿七日病死享年十八	方柱 B	花崗岩 白色系	105.9	92.4	15.7	15.7	13.5	31.5	30.5	
264	今井満太郎忠備 神靈	慶応二年丙寅七月三日戦死于豊前大里年十五	方柱 A	花崗岩 橙色系	112.2	96.2	15.7	15.5	16.0	32.0	32.0	
265	山浪奈藏千治 神靈	慶応二年丙寅十月九日病死年廿三	方柱 B	花崗岩 橙色系	111.2	92.2	15.0	14.0	19.0	33.3	33.0	
266	木原亀之進弘幸 神靈	文久三年癸亥十月病自殺于三田尻陣中享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.8	89.8	15.2	15.2	17.0	31.1	31.3	
267	田邨勇人義之 神禱	好義隊元治二年乙丑正月十六日美祿郡赤村戦死年廿三	方柱 B	花崗岩 橙色系	108.0	91.0	15.4	15.2	17.0	34.0	33.6	
268	村岡彦十郎 神靈	慶應四年戊辰七月十日越後陣拳役蒙創逐死	方柱 A	花崗岩 橙色系	111.0	93.5	15.1	15.0	17.5	32.7	32.1	
269	萩原忠一郎忠秀 神靈	元治二年乙丑正月十六日於美祿郡赤村戦死行年十七	方柱 B	花崗岩 白色系	108.4	91.4	15.3	14.9	17.0	33.5	32.0	
270	安部直人 神靈	慶應四年戊辰六月二日越後今町役蒙創十日死	方柱 C	花崗岩 橙色系	111.9	95.4	15.0	15.5	16.5	31.7	33.0	
271	山下半三郎安邦 神靈	慶應四年戊辰七月四日越後乙茂郡戦死	方柱 A	花崗岩 橙色系	112.2	95.2	15.1	14.7	17.0	32.0	31.5	
272	野田藏之進信利 神靈	慶応三年丁卯八月四日病死年二十	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.0	93.0	14.9	14.9	15.0	33.0	29.0	
273	原川助右衛門安則 神靈	慶應四年戊辰正月五日城州淀城之役蒙創死年二十四	方柱 A	花崗岩 橙色系	111.2	95.7	15.5	15.3	15.5	33.5	32.0	
274	石田五郎直明 神靈	明治元年戊辰九月十日奥州荒井戦蒙創十七日死年十九	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.6	92.1	15.4	14.5	15.5	30.5	30.5	
275	加藤房藏 神靈	元治元年甲子九月病死享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	103.7	89.2	15.0	15.1	14.5	32.0	30.5	
276	多々野六郎正景 神靈	元治二年乙丑四月三日病死享年十八	方柱 B	花崗岩 橙色系	103.7	87.7	15.0	15.0	16.0	32.5	31.5	
277	酒井定五郎 神靈	元治二年乙丑閏五月廿日病死享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.3	89.8	15.5	15.6	17.5	31.8	32.2	
278	中尾千之丞忠光 神靈	元治二年乙丑二月病死享年	方柱 B	花崗岩 橙色系	105.0	89.0	15.0	15.2	16.0	33.0	32.1	
279	久富信吉 神靈	元治二年乙丑四月〇日病死享年二十九	方柱 B	花崗岩 橙色系	106.4	88.9	15.1	15.1	17.5	31.9	31.5	

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		
280	藤本利吉 神靈	壬戌丸水先案内文久三年六月朔日	方柱 A	花崗岩 緑色系	108.8	90.8	15.3	15.3	18.0	31.5	31.7		
281	井尻友藏 神靈	別働遊激隊兵卒明治十年六月廿五日	方柱 A	花崗岩 緑色系	109.2	90.2	15.1	14.8	19.0	31.2	31.5		
282	吉田治三郎 神靈		方柱 A	花崗岩 橙色系	110.5	94.5	15.0	15.0	16.0	33.6	32.9		
283	船木良藏 神靈	元治二年乙丑八月七日病死	方柱 B	花崗岩 褐色系	109.3	92.8	15.2	14.5	16.5	30.3	30.3		
284	關謙三正直 神靈	慶応二丙寅七月廿七日於豊前赤坂蒙創而劇八月廿四日終死 于赤間関享年廿三	方柱 B	花崗岩 白色系	105.4	89.9	15.7	15.3	15.5	30.0	28.4	關の略字	
285	末武省作定国 神靈	慶應二年戊辰五月十三日戦死于越後朝日山年十九	方柱 B	花崗岩 褐色系	108.8	93.8	15.5	15.7	15.0	35.5	30.2		
286	橋本常吉孝幸 神靈	慶應二年丙寅七月三日豊前大里役重創四日死	方柱 B	花崗岩 褐色系	111.1	95.1	15.0	15.4	16.0	33.6	33.6	橋は木 + 高	
287	杉野晋八 神靈	元治二年乙丑七月廿三日病死	方柱 A	花崗岩 褐色系	104.7	87.2	15.0	15.0	17.5	34.0	33.0		
288	金山義十郎 神靈	慶應四年戊辰三月十三日越後朝日山戦蒙創廿八日死	方柱 A	花崗岩 褐色系	109.5	92.5	15.5	15.0	17.0	30.3	32.2		
289	奈良尾源兵衛義民 神靈	文久三年癸亥八月十六日死	方柱 A	花崗岩 褐色系	107.7	92.2	15.5	15.0	15.5	32.1	32.0		
290	上領重三安利 神靈	慶應四年戊辰六月二日越後今町戦死	方柱 A	花崗岩 褐色系	106.2	91.2	14.8	14.7	15.0	33.5	33.5		
291	山中全助盛幸 神靈	慶應四年戊辰五月十三日越後朝日山戦蒙創廿二日死年廿三	方柱 A	花崗岩 褐色系	108.0	92.5	14.8	15.0	15.5	31.5	31.7		
292	三浦平之助義英 神靈	慶應四年戊辰五月十三日越後朝日山戦蒙遂死年二十二	方柱 A	花崗岩 褐色系	106.5	92.0	15.0	15.0	14.5	34.0	32.0		
293	高橋淳太郎忠信 神靈	慶應四年戊辰五月十三日戦死越後朝日山年廿四	方柱 A	花崗岩 褐色系	108.2	94.2	15.0	15.5	14.0	32.2	31.8	橋は木 + 高 淳は旧字体	
294	芳川道祐正義 神靈	慶應四年戊辰五月十二日戦死于越後榎峠年廿一	方柱 B	花崗岩 褐色系	107.7	93.7	15.4	15.0	14.0	32.0	32.2		
295	西山八郎勝清 神靈	慶應二年碑丙寅六月八日死	方柱 B	花崗岩 白色系	104.1	91.1	15.4	15.4	13.0	32.3	32.3		
296	小須賀逸衛知良 神靈	慶應四年戊辰病死于享師	方柱 A	花崗岩 褐色系	104.7	91.2	15.0	15.0	13.5	33.6	32.0	ヤヱイダレがい	
297	三栖谷建禮 神靈	明治元年四月廿七日病死	方柱 A	花崗岩 白色系	103.5	89.5	15.3	15.7	14.0	32.5	32.5	禮は示ではなくネ	
298	原勝之進為則 神靈	慶応二年丙寅九月八日病死年廿一	方柱 A	花崗岩 褐色系	109.2	94.2	14.7	14.0	15.0	31.5	30.2		
299	吉富信吉 神靈	慶応二年丙寅病死	方柱 A	花崗岩 褐色系	111.1	96.1	15.0	15.2	15.0	33.4	32.8		

番号	銘文		形態	材質	総高		標柱			基台			備考
	正面	右側面			a + d	高	幅		高	幅			
						a	b	c	d	e	f		
300	岡田五郎忠義 神靈	慶應二年丙寅四月十一日病死	方柱 B	花崗岩 橙色系	107.2	93.2	14.8	14.2	14.0	32.0	32.0		
301	馬屋原彦右衛門 神靈	慶應二年丙寅八月四日病死	方柱 C	花崗岩 橙色系	108.5	94.5	14.8	14.0	14.0	33.3	34.0		
302	伯野波江 神靈	慶應二年丙寅九月四日病死	方柱 C	花崗岩 橙色系	110.6	94.1	15.0	14.5	16.5	32.2	30.5		
303	廣世徹和儀 神靈	奇兵隊慶四年九月十八日	方柱 A	花崗岩 緑色系	106.8	91.3	15.3	15.2	15.5	31.5	31.5		
304	竹林次郎英生 神靈	奇兵隊三年二月二日	方柱 A	花崗岩 緑色系	107.0	92.0	15.0	15.0	15.0	31.5	31.5		
305	久我亀吉忠行 神靈	慶應四年戊辰五月六日越後椎谷戦蒙創十日死年二十三	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.0	95.0	15.0	15.0	14.0	33.5	34.0		
306	國嶋榮三高徳 神靈	明治元戊辰六月二日於越後國古志郡今衛蒙傷二日没歳二十四	方柱 A	花崗岩 橙色系	107.4	94.4	15.4	14.8	13.0	33.7	32.5	没は旧字体	
307	植田村喜代三郎 神靈	慶応二年丙寅八月十一日死于豊前曾根村享年	方柱 B	花崗岩 黄色系	104.1	91.6	15.5	15.0	12.5	30.0	29.6		
308	河野三郎信義 神靈	明治元年戊辰七月廿七日越後國器板戦争蒙傷死	方柱 B	花崗岩 黄色系	103.8	90.8	15.0	15.0	13.0	32.2	32.5		
309	稲田次郎 神靈	文久三年癸亥七月病死享年	方柱 A	花崗岩 橙色系	100.3	88.3	14.8	15.2	12.0	31.7	32.0		
310	杉山重吉忠義 神靈	慶応二年丙寅九月廿日病死三十	方柱 A	花崗岩 橙色系	104.5	91.5	15.0	15.0	13.0	33.3	32.3		
311	園田傳吉保次 神靈	慶應二年丙寅六月十七日死于豊前丸山砲臺享年二十五	方柱 B	花崗岩 黄色系	101.1	88.1	15.1	14.5	13.0	30.5	30.0		
312	小川直八道近 神靈	慶應二年丙寅九月廿四日病死	方柱 A	花崗岩 橙色系	106.1	93.6	15.5	15.5	12.5	34.5	33.5		
313	岡村勝三郎信國 神靈	慶應三年丁卯六月三日死享年三十五	方柱 A	花崗岩 黄色系	98.0	87.0	16.0	15.5	11.0	32.3	31.3		
314	原田儀助朝吉 神靈	慶應二丙寅十月廿三日死于赤馬関享年三十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	99.6	88.6	15.9	15.0	11.0	30.5	29.4		
315	大原新五郎正敬 神靈	慶應二年丙寅十二月廿三日死于馬関享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	99.9	87.9	15.5	15.9	12.0	32.2	30.2		
316	直江政吉實行 神靈	明治元年戊辰九月十八日死于赤馬関享年	方柱 A	花崗岩 黄色系	100.2	89.2	15.4	14.2	11.0	31.5	31.5		
317	上杉六郎良虎 神靈	慶応元年乙丑二月十七日死于長門中山享年十八	方柱 B	花崗岩 黄色系	98.5	87.0	16.1	15.0	11.5	32.0	30.8		
318	原勝藏廣行 神靈	慶應二丙寅八月十一日於豊前岸村為士冠死享年	方柱 A	花崗岩 黄色系	98.8	87.8	16.1	15.1	11.0	31.5	32.0		
319	末永勝之進信吉 神靈	甲子八月六日戦死于長門前田享年三十	方柱 B	花崗岩 黄色系	101.8	89.8	15.9	14.2	12.0	30.5	29.7		

番号	銘文		形態	材質	標柱				基台		備考
	正面	右側面			高			幅			
					総高 a + d	高 a	b	c	高 d	e	

320	島彌太郎勝正 神靈	明治元年戊辰八月朔日戦死于越後津川口赤坂享年二十二	方柱 B	花崗岩 黄色系	101.8	90.8	15.5	15.7	11.0	32.0	32.2	
321	藤梅吉俊行 神靈	明治元年戊辰五月廿七日戦死于越後奥板金ヶ崎享年三十三	方柱 B	花崗岩 黄色系	102.4	90.4	15.5	15.0	12.0	29.0	29.6	
322	枝川貞吉正芳 神靈	明治元年戊辰九月十七日戦死于奥州若松享年二十二	方柱 B	花崗岩 白色系	101.1	87.6	15.5	15.1	13.5	31.5	31.7	
323	江本豊太郎孝敷 神靈	慶應二年丙寅十月四日於豊前曾根蒙創而刺十月晦終死于馬関享年二十一	方柱 B	花崗岩 黄色系	100.0	88.5	16.1	15.7	11.5	30.7	30.5	
324	小使竹藏 神靈	明治元年戊辰九月十四日於奥州若松死享年二十	方柱 A	花崗岩 白色系	103.4	90.4	14.5	14.5	13.0	31.2	30.8	
325	幸助 神靈	奇兵隊慶應二年十月二十三日	方柱 A	花崗岩 緑色系	103.0	92.0	15.5	15.5	11.0	31.6	30.6	
326	権右エ門 神靈	庚申丸水夫慶應二年七月二十七日	方柱 A	花崗岩 緑色系	108.0	91.5	15.5	15.5	16.5	31.4	31.4	
327	久光秀太郎秀光 神靈	明治元年八月廿九日於陸奥國●尻村戦死享年二十三	方柱 A	花崗岩 白色系	108.4	91.9	15.2	15.1	16.5	30.2	29.5	●は卍 + 木 字か 岩の誤
328	杉村梅五郎義一 神靈	明治元年七月廿九日越後國妙見村戦死享年四〇五	方柱 A	花崗岩 白色系	109.0	92.5	15.3	14.7	16.5	30.8	30.1	
329	楊井安右衛門政之 神靈	明治元年六月二十四日於陸奥國白川戦死享年三十五	方柱 A	花崗岩 白色系	108.6	91.6	15.0	14.9	17.0	30.7	29.1	
330	森重謙介重謙 神靈	明治元年五月十四日於越後國一ノ坪被創九月七死	方柱 A	花崗岩 白色系	106.5	91.5	15.5	15.5	15.0	30.5	30.5	
331	上田瀧之助 神靈	明治元年正月四日於山城國鳥羽街道戦死	方柱 A	花崗岩 白色系	106.1	91.6	16.0	16.0	14.5	30.5	30.5	
332	皆川謙蔵義虎 神靈	慶応二年十月〇日於石見國益田被創死享年二〇七	方柱 A	花崗岩 白色系	109.1	92.6	15.5	15.5	16.5	30.5	30.0	
333	久松 神靈	慶應二年八月廿五日於豊前國狸山被創九月七死	方柱 A	花崗岩 白色系	108.6	92.1	15.0	15.0	16.5	30.5	30.5	
334	末村綱二郎守節 神靈	慶應二年十月十八日於石見國大麻山戦死享年二十五	方柱 A	花崗岩 白色系	107.9	92.4	15.0	15.0	15.5	30.5	29.5	節は旧字体
335	生雲五郎一友信 神靈	明治元年戊辰九月十五日奥州若松城下戦死	方柱 B	花崗岩 橙色系	107.3	91.3	15.5	14.0	16.0	31.0	32.0	
336	奇兵隊別富喜作 神霧	慶応二年十月五日馬関ニテ病死	方柱 B	花崗岩 橙色系	106.7	91.7	14.5	14.5	15.0	30.5	30.5	富は旧字体
337	奇兵隊小者利吉 神靈	慶応三年丁卯八月廿五日病死	方柱 B	花崗岩 橙色系	111.0	94.0	15.5	14.5	17.0	33.0	31.0	
338	奇兵隊工人治助 神靈	明治二年己巳七月五日病死	方柱 B	花崗岩 白色系	107.9	89.9	15.0	14.5	18.0	32.5	32.5	
339	奇兵隊小者友吉 神靈	慶応三年丁卯六月十日死	方柱 B	花崗岩 白色系	111.1	91.6	15.5	14.5	19.5	34.0	34.0	

番号	正面	銘文		形態	材質	標柱				基台		備考	
		右側面	総高 a + d			高		幅		高 d	幅		
						a	b	c	e		f		
340	奇兵隊小者喜八 神靈	慶應三年丁卯五月廿五日病死	方柱 A	岩 橙色系	1120	935	155	160	18.5	31.5	31.5		
341	奇兵隊小者廣吉 神靈	明治二年己巳五月廿日病死于浪花	方柱 A	岩 黄色系	1084	924	14.5	140	16.0	31.5	32.5		
342	柳井寅之助正明 神靈	明治二年己巳二月廿九日病死	方柱 A	岩 白色系	1059	929	150	15.5	130	320	32.5		
343	岡村房助義勝 神靈	明治二七己巳正月二十四日病死歳二十三	方柱 A	岩 橙色系	1047	902	150	150	14.5	320	320 岡は旧字体 歳は旧字 体		
344	奇兵隊付郷俠組久松 神 靈	慶應二年丙寅八月廿五日豊前狸山戦蒙創九月七日死	方柱 A	岩 橙色系	1062	922	150	15.5	140	31.5	31.5	富は旧字体	
345	奇兵隊別富清助 神靈	慶應四年戊辰七月廿六日関原戦死	方柱 A	岩 橙色系	1101	946	15.5	150	15.5	340	340		
346	笹倉新之丞正義 神靈	慶応三年丁卯三月廿三日病死年十五	方柱 A	岩 橙色系	1096	926	150	15.5	170	33.5	320		
347	橋本虎松孝幸 神靈	慶應二年七月三日豊前國大里被創四日死	方柱 A	岩 花崗岩 白色系	1087	927	15.5	150	160	30.5	30.5		
348	柿多牧太安親 神靈	慶応二年六月十七日石見國益田戦死享年十九	方柱 A	岩 花崗岩 白色系	1065	905	150	14.5	160	30.5	300		
349	末久亀二郎久勝 神靈	明治二年戊辰七月十日病死享年十九	方柱 A	岩 花崗岩 白色系	1082	922	150	14.5	160	33.5	340		
350	山下次郎鬼一 神禰	明治元年戊辰病死于越後柏崎年廿三	方柱 A	岩 花崗岩 橙色系	1116	931	150	14.5	18.5	33.5	330		
351	田辺五郎正道 神靈	明治二年己巳八月三日病死	方柱 A	岩 花崗岩 白色系	1090	915	150	140	17.5	32.5	320		
352	永田真平 神靈	明治二年己巳十一月八日病死	方柱 A	岩 花崗岩 白色系	1085	940	14.5	14.5	14.5	320	31.5		
353	細川清若饒金 神靈	慶応四年戊辰八月廿六日病死越後	方柱 B	岩 花崗岩 橙色系	1141	981	150	140	160	31.5	300		
354	野村織之助 神靈	(無銘)	方柱 A	岩 花崗岩 橙色系	1084	929	150	14.5	15.5	320	320		
355	原田幸三郎正義 神靈	明治元年七月廿四日出雲崎病院ニテ病死	方柱 A	岩 花崗岩 橙色系	1109	924	14.5	15.5	18.5	31.5	320		
356	杉山深太郎正一 神靈	慶応二年丙寅九月十七日死	方柱 B	岩 花崗岩 橙色系	1105	945	15.5	150	160	340	340		
357	和田十郎清門 神靈	同九月十七日吉田病院ニテ病死	方柱 B	岩 花崗岩 橙色系	1096	936	14.5	150	160	320	320		
358	和田三郎義一 神禰	慶應二年丙寅九月十七日死年廿二	方柱 A	岩 花崗岩 橙色系	1107	917	15.5	15.5	190	330	30.5		
359	藤岡三右衛門良道 神靈	慶應二年丙寅九月廿日死年三十	方柱 B	岩 花崗岩 橙色系	1091	921	15.5	15.5	170	320	32.5		

番号	銘文		形態	材質	標柱				基台		備考	
	正面	右側面			高			幅				
					総高 a + d	高 a	b	c	高 d	e		幅 f
360	磯野熊蔵 神靈	明治二年己巳 死	方柱 B	花崗岩 白色系	1066	921	155	150	145	325	320	
361	田中初太郎 神靈	明治二年己巳八月八日	方柱 B	花崗岩 白色系	1094	929	160	160	165	315	325	
362	依義復忠道 神靈	慶應四年戊辰六月二日戦後今町戦蒙創病死年廿三	方柱 B	花崗岩 橙色系	1080	920	145	140	160	315	315	
363	關外濱長府屋由五郎 神靈	慶應二年丙寅七月廿八日死于豊前新町享年	方柱 B	花崗岩 黄色系	1070	900	150	150	170	300	290	
364	奇兵隊小者彌吉 神靈	明治二年己巳六月十九日病死	方柱 A	花崗岩 黄色系	1087	927	140	140	160	325	325	
365	佐伯武治郎義武 神靈	(無銘)	方柱 B	花崗岩 白色系	1088	923	150	160	165	310	330	
366	前兵部權大録木村文太郎 神靈	(無銘)	方柱 A	花崗岩 白色系	1074	909	155	150	165	325	320	
367	關奥小路山形屋甚平 神靈	慶応二年丙寅八月十二日死于豊前曾根村享年	方柱 A	花崗岩 黄色系	1070	910	150	140	160	295	290	甚は旧字体
368	池田興吉 神靈	慶応三年丁卯正月二日病死	方柱 A	花崗岩 橙色系	1118	963	155	150	155	310	310	
369	波田仙一 神靈	(無銘)	方柱 A	花崗岩 橙色系	1116	921	160	155	195	325	325	
370	平田四郎忠勝 神靈	明治元年九月四日於陸奥國山之内柑戦死享年三十一	方柱 A	花崗岩 白色系	1090	920	155	145	170	310	295	
371	三輪内藏主 神靈	明治元年九月十日於陸奥國旗巻嶺戦死	方柱 A	花崗岩 白色系	1063	918	150	150	145	305	305	
372	井石閑斉茂隣 神靈	明治四年辛未六月八日病死享年二十三	方柱 B	花崗岩 橙色系	1068	938	150	140	130	305	305	
373	奇兵隊小者松次郎 神靈	慶応二年丙寅九月九日馬関ニテ病死	方柱 A	花崗岩 白色系	1088	968	150	150	120	325	320	
374	今永順治 神靈	明治三年庚午	方柱 A	花崗岩 白色系	1070	930	155	145	140	305	295	庚は旧字体
375	藤原静馬秀友 神靈	明治元年九月十五日奥州若松城下戦死年二十二	方柱 A	花崗岩 橙色系	1089	919	150	145	170	330	325	
376	奇兵隊小者富蔵 神靈	慶応二年丙寅九月十七日死	方柱 A	花崗岩 橙色系	1066	896	150	140	170	325	320	
377	渡辺九郎明 神靈	明治元年戊辰九月十六日奥州飯寺村蒙創戦死年廿二	方柱 A	花崗岩 橙色系	1052	922	160	150	130	320	325	
378	片山高岳 神靈	明治七年一月廿一日病死	方柱 A	花崗岩 白色系	1102	947	155	150	155	335	335	
379	宮崎浅太郎基 神靈	好義隊慶應四年戊辰五日病死	方柱 A	花崗岩 橙色系	1092	932	145	155	160	310	315	

番号	銘文	形態	材質	標柱						基台		備考
				総高 a + d	高			高 d	幅			
					高 a	幅 b	幅 c		幅 e	幅 f		
380	軍曹赤間関也藤原公任 神靈	明治四年歳享未八月四日於東京病死行年二十	方柱 A	花崗岩 白色系	109.8	95.3	15.5	15.0	14.5	33.0	33.0	歳は旧字体
381	井上勝之進康同 神靈	好義隊慶應四年戊辰五月十九日病死病死	方柱 A	花崗岩 橙色系	109.8	95.8	15.0	15.0	14.0	32.0	32.0	
382	奇兵隊別当利吉 神靈	(無銘)	方柱 A	花崗岩 橙色系	108.8	94.8	15.5	15.0	14.0	31.5	32.0	
383	桐原二平 神靈	明治六年二月廿八日於神戸病院死享年廿三	方柱 B	花崗岩 白色系	111.9	95.9	15.5	15.0	16.0	32.0	33.0	
384	奇兵隊郷俠組要吉 神靈	(無銘)	方柱 B	花崗岩 橙色系	108.3	93.8	15.5	15.0	14.5	33.5	33.5	
385	植田村九兵衛 神靈	慶応二年丙寅八月十一日死于豊前曾根村享年	方柱 B	花崗岩 白色系	106.7	92.7	15.0	14.5	14.0	31.0	29.0	
386	植田村嘉吉 神靈	慶應二年丙寅八月十一日死于豊前曾根村享年	方柱 B	花崗岩 黄色系	107.5	92.0	15.0	14.5	15.5	32.0	30.5	
387	山県清之進清澄 神靈	明治元年九月十一日於陸奥國小荒井村戦死享年二十□	方柱 A	花崗岩 白色系	103.6	93.6	15.5	15.0	10.0	31.0	30.0	
388	小村五郎 神靈	明治二年五月□日戦死	方柱 A	花崗岩 白色系	104.3	93.8	15.5	15.0	10.5	31.0	30.5	
389	守川豊神靈	明治二年五月七日戦死	方柱 A	花崗岩 白色系	102.6	91.1	16.0	15.0	11.5	30.5	30.5	
390	梅田樸之允 神靈	明治二年五月廿五日戦死	方柱 A	花崗岩 白色系	104.0	94.0	16.0	14.5	10.0	31.0	30.0	
391	鹿藏 神靈	奇兵隊小者明治二年二月廿日	方柱 A	花崗岩 緑色系	105.3	90.8	15.0	15.0	14.5	31.0	31.0	

下関市立歴史博物館
研究紀要 第一号

発行年月日 令和二年三月三十一日

編集・発行 下関市立歴史博物館

山口県下関市長府川端二丁目二番二七号

電話 (〇八三) 二四一一〇八〇

製 作 (株)三和印刷社

山口県下関市長府扇町九番一号

電話 (〇八三) 二四九一一三〇